
雷纏う竜（MH転生）

ヨヌフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷纏う竜（MH転生）

【Nコード】

N5443W

【作者名】

ヨヌフ

【あらすじ】

鈍いが適応力は高い主人公がドー○君モドキな神のミスで死んで、テンプレ転生でモンスターハンターのような世界へ。主人公はキリン娘達とイチチャイチヤできるのか……それは誰にも分からない……

不定期更新です。続けられたらいいな。

PS・感想募集中です。

プロローグ（前書き）

小説を書くこと自体が初めてです。ミスのご指摘ありましたら感想のほうでご連絡ください。これからよろしく願います。

プロローグ

いきなりだが、俺こと・・・はテンプレ的に転生することになった。ぬ？名前が出て来ない、まあいいか。二十歳の誕生日の前夜にメテオを喰らって俺は死んだらしい。

なぜ、死んだらしい(・・・)かと言うとメテオで即死したのもあるが、俺はお酒を飲んで寝ていたからよく分からなかったというのが大半である。最後と知っていたら高いやつを飲んでいたのに：何、フライング飲酒だと……こまけえことはいいんだよ。

どうせ死ぬなら他のテンプレみたいに、子供をかばうとかイイハナシダナーな感じで死にたかったと思うのは俺だけだろうか。ちなみに死体はあとかけらも残さず消滅、半径30mが吹き飛んだらしい。地味だな。ツングスーカクラスのメテオだったらもっと派手に逝けたのに。

まあ何はともあれ転生の間(仮)である。よくある真っ白でいかにも神々しい雰囲気の中で、目の前に神と呼ばれる物がある見た目は羽の生えた白いドー○君だが。しかし、このドー○君威圧感MAXで言葉に出来ない雰囲気が出ておられる。

現在までの神との会話を並べると「君死んだよ」「はあ」「原因はボクのせいだから転生させてあげるよ」「はあ、ありがとうございます」「その他の細かい事はそこに在るから」とグダグダだった。

その後、光る球体に触れて、死んでしまった事やその後、何が起きたか。夢じゃありませんよ残念ながらなどを知ることが出来た。最

後は分かりたくなかったでござる。

そして冒頭に戻るが転生だ。どうしこうなったかは分かったがこの後は何かチートな能力をもらって俺TUEEでもしたり、ハーレムでもつくって淫靡で退廃的な生活を送ったほうがいいんだろうか……

「どうしてこうなったかが分かったなら転生先を言うね」

あ、OKですよ。

「モンスターハンターのような世界に行ってもらうよ」

モンハンのような世界とな、まあようになってところが気になるが、大筋は変わらないだろう。遊んだのは2と2ndと2ndGだけだが、その他についてもうる覚え程度には知っているから情報チートが出来るかもしれない？ まあ、最近、やってないから2とかもう覚えだが。と言うか選択権は無いのね。なの○とかネギ□とか禁書のようなヒロインがいる作品が良かった。モンハン世界には、お茶漬けやカレーなどの好物があるかどうか不安だし。

「最後に君の願いを3つかなえてあげよう」

む、いよいよチート選択の時が来てしまったか……。ここは定番の王の財宝や幻想殺し、一世界^{ザ・ワールド}《ザ・ワールド》、魔力無限とかか？ いやまて、王の財宝や世界はともかく幻想殺しと魔力無限は役に立たない気がするぜ。それにギルドナイツっていう怖い人たちがいたから。特殊能力系はまずいか暗殺怖いッス……。なら、ちよつとした前世？の願いでもかなえてもらうか。

「じゃあ、ある程度強い体と、願い事二つ分でこれからは優しくしてください」

こんな願いをいった理由は、前世？の俺はプチ不運だったのだ。地味に何回か鳥の糞は当たるは、おみくじで中吉がでて内容そんなに良くないは、ポケモンずっとやってきて野生で捕まえた色違いは○タチだけだったりしたのだ（赤い○ヤラドスは除く）。けど、神様のミスのメテオで死んだから、もう、プチ不運じゃないのかな？メガ不運？

「変則的だけいいよ君の願い確かに確認したよ」

よしや！俺、あつちで生まれ変わったらキリン娘やナルガ娘とイチヤイチヤするんだ……ついでに、アツアツのピツアも食いてえ！ナラの木の薪で焼いた故郷の本物のマルガリータだ！ボルチーニ茸ものつけてもらおう！そんなピツアで大丈夫か。大丈夫だ、問題ない。ふむ、こんな感じかなでは送ってくださいな。

「いつてらつしゃい」

ラストにいいい！こんな神様のいる部屋にいられるか俺は一人で転生するっ！！

ブログ（後書き）

最後はふざけすぎたかな（汗）
りがとうございました。

ちょっと胃が痛いです。ご読了あ

第一話 〱ジンオウガかと思っただか、俺だよ〱（前書き）

よく分かる前回の話

主人公寝てる間にメテオ喰らう
神と名乗るホワイトドール〇現る
モンハン世界にテンプレ転生

第一話　　ジノオウガかと思っただか、俺だよ

さて、前回俺は、見事に産まれる前から死亡フラグを立てつつ転生と言っ高難易度なウルトラC級の技を披露、見事脳内オリンピックで優勝し文句なしの金メダルを手に入れることができたわけなのだが。今、現在の俺の状況を伝えらる。

狭いです

いやどのくらい狭いかって言うと、マジ狭い、腕一本足一本どころか指一本すら動かせない感じ、しかも周りもやばい硬い凄く硬い、恐らく産まれたばかりであろうこの赤ちゃん肌だと出っ張りで傷付く事は確定的に明らかである。

まったく、こんな薄暗くて暗くて狭いところにベイビーな俺を置いとくなんてトラとウマさんが悪魔合体して　ワガナハ　トラウマ　コンゴトモヨロシク　なかんじになっちゃったらどうするんだ。

ちなみに、現在意識が目覚めてからざっと6時間程度である。この間狭い場所にずっとうつぶせ状態で穴にジャストフィットし続けている。これ、神に強い体もらってなきゃ死んでんじゃねえか？死んでるよね。まあ少なくとも産まれたばかりであろう赤ん坊にする所業ではないなこれは。強い体チートもらってよかったと思う今日の頃である。

しかし、このチートな体にも限界はあるのかそろそろ意識がやばい。まずこの状況で6時間は精神的にも結構くるものがある。ただでさえ神だ、死んだだ、メテオだ、テンプレ転生でモンハン世界だとで疲れている身だというのに。そして肉体的にはアムハングリーと腹がへってしょうがない。だってお腹がへっちゃあ赤ん坊だもん状態である。

さてこのままいくとマズイ気がする。現在、ミツシヨン【穴からの脱出】を敢行中だ。必死に体をくねらせて全力前進する。こんな運動をベイビーがすれば疲れると思うが神様印の強い肉体だからかなんともない。

[illegible]

だがそれも無理なようだ。くねくねしすぎた為なのかは分からんが腹がさらにへってしまって、意識が朦朧としている。原作でいうならスタミナ5位かな。餓狼のスキルが無いので俺には何のメリットも無いがな。脳が至急、栄養補給を要求すると五月蠅い。このまま俺は息絶えてしまうのか。やはり死亡フラグを立てすぎたか……

そう思った時。ポトツと隣に何か落ちる音がした。同時にソレが食えそうな匂いを発している事を俺の鋭敏な嗅覚が捕らえた。その瞬間絶食を強いられていたケモノの如くソレに飛び掛った俺は、ソレが何であるかもかわわず噛み付いた。当然噛み付かれたソレは必死に抵抗し暴れまわった。しか、俺はその生き物より少しではあったが大きくそして力強かったため、押さえつけることができた。そのまま何度も何度も何度も赤い血が噴出さなくなるまで、その生き物の赤い肌に噛み付き最後にギュツと断末魔の鳴き声をあげた生き物を俺は貪り食った。

さて食糧事情はとりあえず解決したしさつきから目を背けていた俺の体について考えるか。まず腕一本足一本どころか指一本すら動かせない感じ、といったがまず俺の体には腕？が2本しかない。次にくねくねしていたが人間自体にあのくねくね感を出せない。最後に人間の赤ん坊は体全体で跳躍したり柔らかいといえど肉を食いちぎったり出来ない筈だ。そんな奴居たら怖いわ。チャッ〇ーがいたよ

そして目の前の水晶に映る俺の姿を見ると丸い口に並んだ小さいながらも鋭い歯、短い腕のようなもの、ところどころ血で赤く染まっているピンク色のヒルのような体。

ギィギに似ているが俺には判る。こいつはフルフルベビーだ。

ってなんじゃこりやあああああ！いや、確かにモンスターは普通に強い体だけれどもフルフルって、神よなんてチョイスをしてくれたんだ。一応飛竜の赤ちゃんだけれども！アイテム扱いのキャラが子供時代のフルフルにしくてもいいではないですか。どうせ飛竜ならリオレウスとかディアブロスとか格好いいのが良かったです。それじゃなくてもイヤンクックとか。

なぜにフルフルを選んだんだ。神よ……しかもピンクって新しい亜種ですかコンチクショ！。なんかもう、子供には見せられない体になつてるじゃねーか。大人になつた瞬間、R-18指定になつて、ギルドナイツ警察のお世話になるじゃねーか。せめて白になれ白になれ白になれ白になれ白になれもし変われるのなら白になれ…… おお、白になった。やってみるもんだな、念じれば通ずるとはこの事か……

さて今日は驚き過ぎて疲れた。どっかモンスターが少ない所に穴を掘って隠れて寝るかな。

第一話 ー ジンオウガかと思っただか、俺だよー（後書き）

喰った物

・フルフルベビー亜種

神の優しさ

・普通に強い人の体より強いフルフルの体・腹が減ったときに落ちてきた餌（空腹は最高のスパイス）・フルフルなのに目が見える・喰った物で強くなれる力

第二話 もつとがんばりましょう (前書き)

この話を書く前にフルフルについて調べました。

フルフルベビーって他の生物に寄生して成長して産まれたときは手足がないんだってさ……

このフルフルベビーは特別な訓練を受けています。

第二話 くもつとがんばりましょう

一晚寝たら落ち着きました。主人公こと現在フルフルベビーな俺です。起きてからこれからの予定を考えていると気づいたんだが、俺は今眼が見えている。当たり前だと言う人も居るかもしれないが、うる覚えになるがフルフルと言う生き物は、目が見えないもしくは視力がほとんど無いという設定だった筈。

つまりその子供であるフルフルベビーも同じくらい目が見えない筈なのに、俺はこの薄暗い洞窟の中はつきりと物が見える。やたら高性能な目だな。これは俺の願いである強い肉体が関係しているのだろうか？目が見えるのはいいことだが閃光玉とか食らっちゃわないのだろうか。

なにはともあれ俺はこれからの生き方を決めていこうと思う。とりあえずは喰われない程度には強くなるう。二回目の人生少なくとも100まで楽しみたい。うる覚えのフルフルの生態的に産まれた後しばらくが山場だと思っただが合ってるかな。

次に長期的目標だ。モンスターハンターの世界といえば古塔や太古の塊、所々にある遺跡など古代文明があったことを匂わす雰囲気があったり。赤衣の男や白いドレスの少女のような謎の人物が古龍のクエストの依頼人に居るなど、ちよつとした想像の翼を広げゴジマ粒子の海に飛び込みたくなるようなさまざまな設定を想起させられる単語が其処彼処にちりばめられていた。

そこから考えられる今俺が一番そうで有ってほしいと思う設定は、ミラ系統は人型になれるまたは人と意思疎通ができるという事だ。これはさっき言った赤衣の男関連の単語やミラルーツのクエストの依頼文から推察することができる設定だ。つまり飛竜の俺でも頑張

ればまた人の形をとることが出来る可能性があるということだ！
まあ、飛竜と古龍には隔絶たる違いがあるらしいので超低確率だろうがな。しかし俺は諦めん。いつかキリン娘とイチヤイチャするという目標だけは曲げられんのだ。俺が死ぬとしたらそれはキリン娘に討伐される時だろう。

話が少し逸れたが長期目標は人型になるために力と知恵をつけていく事である。おそらく人型になるためには高い知性と強い力が必要であろうから。その点、転生した俺は知性は初期から人間の知性搭載、力は神様印の強い体がある。それに神様に優しさをお願いしたからさっきの妄想設定もこの世界ではあるだろうから俺が人型になれる確率もそう低くは無いだろう。

さて目標も決まったこと事だし、今の俺に出来ることは人型目指してすこしずつ力を蓄えていくことである。つまり、食事をする事だ。よく食べよく寝てよく育つこれは大体の生き物に通じる。

人生の目標を決めた俺は今、食事をしている。いったい何を食っているのかというと。

虫を食っている。

こうノソリノソリと動きながら動きの遅いやつを自慢の口を大きく開けて喰ったり、待ち伏せしてから体全体を使った跳躍で少し大きな虫をパキクシャリと音を鳴らして飲み込んだりしている。

もうちよつとマシな物喰えと言う人も居るかもしれないが。現在の俺ではリスクが高すぎる。この世界は弱肉強食なのだ。モスならやれるかも知れないが道中で天に召されてしまうだろう。

それに、意外と虫って美味しいというのが俺の前世からの考えだ、

ほら、イナゴの佃煮とかはちのこぐらいなら皆も食べたことあるよね、……ないのか残念。蜘蛛とかちよつと食べてみたくなるのは俺だけだったのか……

まあさすがに毒っぽいことや、極端に気持ち悪い見た目の奴はスルーしているがな、Gとか。そんなこんなで次で食べた虫さん300匹目だ。しかしこの体は食べても太らないというか、食べた分だけ成長しているというか、不思議な体だ。すでに目覚めた時よりか大きさが1.5倍ほどにはなっていると思う。満腹とかになるのだろうかこの体。しかしこの大きさなら奴をしとめることが出来るかもしれないな。

というわけで移動してきました。その奴の所に。正直に言えば奴とはさつき見かけた、傷付いて洞窟に隠れにきたケルビさん（♀）である。弱ってる生き物を狙うのはちよつと嫌な気分になるが悲しいけど、これ自然界の掟なのよねということで勘弁してもらおう。

さて現在地はケルビが傷付き横たわっている所、その真上である。フルフル特有の吸盤もどきを、フルフルベビーである俺は両腕に持っている。それを利用して俺は天井にへばりついているのだ。勝負は一瞬で決めなければいけない。逃げられたら俺では追いつけないのだよ。故に此処は一撃必殺、暗殺上等のスタイルをとっている。今は対象が気を緩めるのを待ちつつ準備をしている、気を緩めたその時が奴の最後だ……

首を動かし周囲を警戒していたケルビが首を下ろし瞬間、俺は上から飛び掛かると同時に溜めていた唾液を吐き出した。俺の唾液を浴びたケルビは、俺をはね飛ばすほど暴れ回りすぐに動かなくなった。

……ってオイおかしいぞ。俺の予定だと唾液は牽制、良くて目潰し

だったのに、まさか唾液だけで死ぬとは。これも強い肉体の力なのか予想外すぎるぞ……
とりあえず。いろいろ集まってくる前にいただきます。

第二話　もつとがんばりましょう（後書き）

神の優しさ

・ 傷付いたメスのケルビのそばにオスのケルビがいなかった事・猛毒の虫を食べなかった e t c

産まれたばかりなので神の加護が多目です。

第三話〱チャレンジ精神を持ちなさい〱（前書き）

いつもよりちょっと長いです。

タイトル通りの主人公ですがよろしくお願いします。

第三話　チャレンジ精神を持ちなさい

初めてケルビを仕留めた日から一週間、目が覚めると俺はフルフル（成体）になっていた。

「キョアアアア！！！（よっしゃあああ！！！）」

おっと、思わず叫んでしまった。無駄な叫びは敵を寄せ付けるだけだと学習したのに。だが仕方ない、成体になった喜びは受験に合格した時の喜び以上だったからな。今なら何でも出来そうな気がする。しかし、成体になることが出来たのはいいが。

「キュウウ（まだ、ちっさいな）」

あれからケルビも九頭、モスも三匹食べたのに俺の体はそこまで大きくならなかった。成体になった今も、大きな目に見ても精々メスのケルビくらいである。

どうやらこの体は食べても大きさの変化は少ない代わりに肉体の質や性能が上がりやすいようだ。

実際俺がこの一週間確かめたこの肉体の性能は小さいながらも凄まじいものがあった。

まず、一週間前の予想外の結果の原因である。異常な威力を誇った俺の唾液についてだが。常時あんなものが出ていると、将来キリン娘といちゃつく時に邪魔になるので必死に研究した。それはもう干からびるほどに研究した。

その結果俺の唾液は自分の意思で溶かす力が変わる事が分かった。あの時は初のまともな獲物をハントする緊張と興奮で、その時の最

大威力の唾液になっていたのだろう。将来的には服だけ溶かせる魔法の唾液をだせるようになりたい！これは誰もが夢見ることだ！浪漫砲とはまた違う漢の浪漫だ！

また唾液研究には副産物も有った。それは唾液の粘度と電撃だ。

唾液の粘度の方は、溶かす力の研究中にたまたまデローンとしたのが出たからイロイロ試してみた。

粘度を薄めた結果できた異常にサラサラした唾液は、何時役に立つかは分からない代物だった。

しかし、粘度を高めたやつはクモの糸みたいになったのでクモの巣モドキを作ってケルビや虫達を搦め捕ったり、口からカエルの舌の如く飛ばしてケルビに引っ付け必〇仕事人の様に天井に引っ張り上げたりと大活躍している。

電撃は唾液を飛ばそうとしたらなんか出てきてしまった。あの時はかなりビックリした。本ツツ当に驚いた。その後、電撃ブレスを何度か吐いた後電気の扱い方が解り帯電攻撃にも成功した。

ただその時は出力不足らしくブレスも一つだけであり、帯電も長続きしなかった。

電撃に関しては威力は強くなれば勝手に上がるから常盤台のビリビリ娘並の精密制御が出来るようにしたい。

……決して、決つつつして人様にお見せできないような、ピンクな使い方が出来るようになるためではない。ないっतरらない。純粹な
Level 15クラスの電撃使いになるため挑戦である。
エレクトロマスター

次に肉体の基本性能だが、フルベビのくせして先程出ていたように自分より大きいケルビを持ち上げる筋力や、体のバネを利用して地

面から天井まで跳び上がれる瞬発力、調子に乗って地面と天井の間を高速で跳び回っても息一つ乱さない持久力と本当にフルベビか？と思われる程のハイスペックだを持っていた。

ついでに、地面と天井を跳び回っているとき、わざと水中に飛び込んで泳げる事も確認しそのままアロワナや金魚みたいな魚以外を二、三匹食べた後華麗に水面から飛び出した。

……アロワナ系を避けた理由は食べた物が爆発して死ぬとか流石に嫌過ぎるからである。バクレツアロワナ怖い。

この様に、フルベビの時点で凄まじい力を持った俺が成体になったのだ。となれば、俺が次に喰らうべき獲物は決まっている。

「ギョア（イーオスやブルファンゴ達だ）」

俺はビビリではない慎重かつ警戒心が高いだけなのだ。

まずイーオスを探しに出かけたのだが、その道中運の良いことに、メイドイン俺のクモの巣トラップに引っ掛かっているブルファンゴに出会った。フゴフゴ言っていたので遠距離から電撃責めで動きを止め生きたまま美味しく戴いた。

ケルビやモスに比べ筋っぽい肉だがその歯ごたえがクセにな「フゴアアア」五月蠅い。バチンッ。

新鮮さが楽しめるが、欠点は暴れたりうるさくなる度に電撃を流さなきゃ駄目な事だけだな。

……あ、動かなくなった。強すぎたか？まだ、半分しか喰ってないのに。

ところでブルファンゴが苦もなく喰えたのはラッキーだが、俺の今

日の目標は成体になったことで正面から何処まで戦えるか確かめる事だったので、今回のこの無抵抗の捕獲は若干不本意であった。

よって今、俺がイーオス達に囲まれているのは計画通りでありうっかりしていた訳ではない。

ブルファンゴを生きたまま食べることで血を飛び散らせて、その臭いで呼び寄せたのだ。

現在は威嚇しながらの睨み合いの最中だ。沢山集まって威圧感やバイとビビってたりなんかしていない。

イーオス達も俺にビビっているらしく、かかってこないの俺から仕掛けることにした。

喰らえ！俺の今編み出したばかりの必殺技！電磁ネットver致死！

俺は網状にした唾液を素早く放ち、八匹のイーオスをまとめて捕らえると今放てる最大の電撃で行動不能にした。

「「「「「ギアアアツ！？ ギゴヤアアアアアアツ！！」「」「」

」

説明しよう！電磁ネットとは粘性を高めた唾液を投網の様に吐き出し相手の動きを止め、其処から唾液に電撃を通す鬼畜コンボである。ver致死は最大威力の電撃と唾液で放つverであり、他にも色々なverを作る予定である。

その結果だがうむ、これは酷い。具体的には初撃の唾液をもろに被り頭が溶けて胴体しか残ってないのが三匹で。残りは唾液で全身焼け爛れていたところに電撃を喰らって上手に焼けてしまっている。

八匹のイーオスを仕留めた俺は過去を振り返らず一気に群れの半分

を小さなフルフルに倒されて動揺している、残りの八匹のイーオス達に立ち向かった。

まず一番近くにいた奴の足目掛けて首を伸ばして噛み付き、そのまま自分ごと天井に連れて行く。天井に尻尾の口でぶら下がった俺は首を伸ばした状態でイーオスを振り回し下にいたイーオス達をなぎ払った。そのまま振り回したイーオスの頭を壁に叩き付けて砕き、地面に降りるとこの時点で戦えるイーオスは五匹残っていた。

その後は、生き残っていてもフラフラのイーオス達に、突進を仕掛け吹っ飛ばしていく単調な作業だった。そのためこの戦いでは自分の斬撃に対する防御力は確かめられなかったのが残念である。打撃系に関しては壁に思いつきりぶつかったが傷一つ付かなかったので大丈夫なのは判っているんだが。いつそ何かの爪で自分の体引つかくとか、自分で噛んでみるとかしょうかな。

雑魚相手ならこの体は歯牙にもかけないことを確かめることができた俺は、この一週間で作った巣にこんがり焼けた獲物達を持ち帰った。

第三話　チャレンジ精神を持ちなさい（後書き）

ツツコミが来る前に一つ、イーオスは体内に分解酵素があり、本来、巢に持ち帰れないのですが電撃で丸焦げにされたので壊れました。あと、この主人公はイーオスもファンゴもフルベビの時点で本気の体当たり（ボウガンの弾と同じくらいの速さ）をすれば貫通して殺せます。

神の優しさ

特に無し

手に入れた獲物

イーオス八頭

ブルファンゴ一頭

第四話　ようこそ、男の世界へ（前書き）

途中、無理やりな場所がありますが気にしないでください。

第四話　ようこそ、男の世界へ

巢に帰った俺は焼きイーオスの尻尾をかじりながら現在の能力について思考していた。

ちなみに、この巢は洞窟の隅の壁の割れ目から広げたもので、唾液の研究ついでに作り初め今では一辺が三メートルの立方体の大きな部屋になっている。手入れは毎日しているが溶かして作っているの、壁はドロドロした感じで固まっている。肌触りは良いんだが、見た目がちよつと悪い。

出入り口はさっきの洞窟の壁の割れ目に通じる俺より少し大きめの穴が一つ。部屋内の池と洞窟内の池を繋ぐ大きな穴が一つである。

池は地下通路を作ろうとしたら外の池と繋がってしまったので、水中の出入り口兼魚捕りの場になっている。

寝る時には出入り口はクモの巣状の唾液で塞ぐので外敵は入ってこれず安心して寝ている。

なお現在、小部屋二つと食糧貯蔵庫を制作予定である。いつ食料がなくなるかわからないからな。

話を戻すが俺の体についてだが、形は変わっていたが肉体の性能は基本的には劇的な変化は無かった。

しかし足が生えた事により移動しやすくなり機動力がかなりあがった。

さらにイーオスを振り回した時気付いたが首がすごく伸びた。巢に戻って確かめたら伸ばした状態でも自由自在に動かせて尻尾も試してみたら同じ様に動かせた。

例外的に劇的に上がったのが実感出来たのが電撃能力と唾液生産能力だ。

発電能力の方は感覚的にだが以前の数倍の出力と数十倍の発電力になっていて。何十発でもブレスを撃てる気がする。帯電時間も延びている。

唾液は粘度や溶かす力はそこまで変わらないが量がおかしく、明らかに俺の体の体積以上に出ている。食べても体が大きくなならない事と言ひ俺の腹の中には四次元空間でもあるのだろうか？

さて、スペック確認も終わりこの体の強さも分かった。これ以上ちまちまとやってもいいのだが。早目に強くなって、行動範囲を広げないと人に会うまでに俺の人としての考えがいつか磨耗してしまふ恐れがあるので、これからは積極的にポジティブに行こうと思う。

その後イーオス達を食べ終わった俺は思い立ったらすぐ行動に移さないと、ダラダラしてしまうのを前世で十二分に学習していたので早速行動に移した。

具体的には洞窟から初めて外に出た。巣から出たのそのそと洞窟の外に出た俺を待っていたのはどんよりとした分厚い雲がかかっている空。淀んでいる湿つたいやな匂いのする空気。毒々しい色を持ち危険な色をしている沼。所々に生えているさまざま種類のキノコ達だった。

出てきた生物から判ってはいたがやっぱり沼地か。となると出てくる手強いモンスターはゲリヨス、ドスファンゴ、シヨウゲンギザミ、グラビモスかな。さすがにグラビモスとシヨウゲンギザミはきついからあつたら逃げるとして、ドスファンゴは電撃でゲリヨスは噛み

付きと唾液で溶かせばいけるかな。

じゃあ、ドスファンゴでも探しに行こうと俺は翼をバサッと広げ大空へ飛び立った。

ドサツ ……三秒後、地面に墜落した。

地面に落ちた俺は無言で翼で体の汚れをパツパツと払った。……結構痛かった。落ちるときには前世からの走馬灯が見えた気がした。そして初めて怪我をした。初の怪我の原因が墜落って我ながらどうなのよと思う。怪我自体は数秒で治ったが何より心が痛かった。

……やはり空を飛ぶのは他のと比べて難しいな飛び立ったって言うても、実際は脚力を使ってピョンと跳び上がっただけだし。まあ初飛行だったし、後フルフルは飛行が得意じゃないから仕方ないし。これは要練習だな。俺は大空を自由に飛びまわりたい。人の夢としてこれも外せないだろう。

飛ぶことはとりあえず諦め先ほど凄まじい跳躍力を見せた自慢の足で俺は匂いを辿りドスファンゴを探し始めた。木がない開けた場所にたどり着いた俺は小柄ながら異様な雰囲気放つ赤毛のドスファンゴに出会った。

その時、ドスファンゴと目と目が合った。その瞬間ビビッと俺達の間にかが通じた。

恐らく、これは運命なのだろう俺達の間言葉は要らない、そうだろう？俺は彼に対してそんな意味もこめて首を縦に動かすとドスファンゴも同じ気持ちなのか彼も首を動かし、そして互いにうなり声

も立てずに距離をとった。

「さあてどちらの突進のほうが上か勝負しようじゃないか、カウンタ―や小細工なんて物はこの漢同士の正面からのぶつかり合いには意味がないだろう最初の一撃が全てで、それで終わりだ。そうだと俺は奴に問いかける。」

すると奴も突進こそが我が人生にして全て、他には何も言葉すら要らぬ。返事を返してきた。

奴と目でこのような会話をしながら。互いに最初の一撃のために力を溜めていた。奴は前足で地面を掻き筋肉を暖めている。込められている力は凄まじく、膨れ上がった筋肉で体が一回り大きくなっている。対して俺は、体中に電撃を巡らし一気に肉体の状態を強制的にフルスロットルまで上げた。全身の筋肉が唸りを上げ解放の時を今か今かと待っているのがはつきりと分かる。

互いに準備が整ったその瞬間、俺達は自らの体を一つの砲弾に変え、空気を切り裂き、音を置き去りにして飛び出した。

奴は体中に力を漲らせ、ブオオオオオオオオオオ！！！！と大声で叫びながら俺を上突き飛ばそうとその曲がりくねった牙の先を俺に向けながらから突進してきている。その威圧感はいーオスの群れの比ではなく、まるで巨大な岩石群が猛スピードで転げ落ちてくるような恐怖を感じる。

恐怖に飲み込まれないように俺も負けじと、今までに出した事がない大声でギアアアアアアアアア！！！！！と雄叫びを上げながら全身に電撃を纏わせ周囲の空気を灼きながら突進する。

そのまま、間にあつた大気が歪むほどのスピードで俺達は正面から激しく衝突した。激突の瞬間も俺達は互いに目は閉じず、ただひたすら相手を見ていた。

俺達がぶつかり合った衝撃で周りの草や石たちを衝撃波で吹き飛ばし、中心地点はクレーターを発生させた。そのクレーターの中央、そこに佇む二対の漢。ドスファンゴとチビフルフルこと俺である。

ドスファンゴ……奴は強かった、その証拠に奴のその鋭く捻じ曲がった牙は俺の翼を貫き、胴体を少し抉り頑丈な筈の骨を何本か砕いている。激突時にはあまりの衝撃に体が千切れ飛ぶかと思うほどの痛みが全身を走った。特に翼と胴体の翼の付け根に近い牙で抉られた部分が酷く痛む。

しかし勝ったのは俺だった。激突の瞬間。最大限のダメージを与えるために首を伸ばしそれが奴の強靱な皮膚を破り、骨を砕き、その奥にある凄まじい生命力をもつ奴の心臓を貫いていた。俺は逝ってしまった漢に黙祷を捧げた後、死して尚凄まじい威圧感を放つドスファンゴの体を食べて自らの糧にしていた。

第四話　ようこそ、男の世界へ（後書き）

主人公は外に出たのと墜落したので少しハイになっております。

神の優しさ

ドスファンゴカスタム

特徴、通常のドスファンゴより強い、大きさ的には普通だが、ゲリ
ヨスを突進で吹き飛ばし、グラビモス相手に力比べできる。漢であ
る。

第五話〜キングクリームソー〜（前書き）

そろそろ、人間を登場させないと「」の出番がなくなるのでキンクリです。しかたないね。

10月1日 狂気をプラス

10月2日 寝不足時のテンションの怖さを知る。ルイズテンプレ
削除

第五話　キングクリムゾン

この沼地において最も激しい戦いと伝えられるあのドスファンゴとの決闘から約五年……

俺はあのドスファンゴを初めとしてラオシャンロンやミラボレアス、ラヴィエンテなど強力なモンスター達との激闘を制し。捕食し。力をつけ。ついに念願の人間の体を手に入れ。今では麒麟娘達でハーレムを作って毎日がウハウハです。これも全てマカ漬けの壺を買ってから運が向き始めたんです。マカ漬けの壺の効果で人生（？）最高の気分です。やったね！マカ漬けの壺購入の際はこちらまでお電話くださいTEL×××-□□□□

俺は登り始めたばかりなんだ。この果てしないハーレムリア充坂をな… 雷纏う竜 完！！

…… まあ、俺の妄想なんですけどね。実際に五年は経ったんだが。最近はやほど腹が減ってないか危害を加えてこない限りわざわざ強い奴を食わなくなった。二年ぐらい前までは見かけたら強い奴を食べていたんだが。そんなに食べてもまったく体が大きくならないの事に、俺は深い悲しみに包まれて裏世界に行きたくなった。よって無理に力を蓄えて人化するのとはほとんど諦めている。もちろん攻撃を加えてくる奴は美味しくいただいているが。

代わりにこのちっさいボディを活かして、村のマスコットもしくはオトモフルフルポジションを狙おうと考えている。大きかったら気持ち悪くても小さかったらキモ可愛いかわいといってくれる女性もいるだろう。野郎は知らん！野郎に擦り寄られても気持ち悪いだけだ。

まあそうして通りすがりのハンターや商人、旅人のピンチを助けそのままマスコットポジションに入ろう作戦〜できれば美人な女の人がいいなあ。でもギルドナイトは勘弁な〜を発動してから二年。こ
こら一帯に人の匂いがしたことは五回位しかない。

しかもどれも死ぬ寸前。もしくは死んでモンスターに食われた人たちであつた。一応、装備品やアイテムは巢に持ち帰り、遺体は埋めておいて簡素だが墓を作っておいた。この世界の風習はよくわからんが土葬にしておいた。

ここいら周辺を調べてみた結果、どうやらこの沼地は交易の道の近くにあるようでたまに沼地から抜け出たモンスターが取り掛かった人を沼地まで追いたててくるようだ。

しかし、そんなことがあるのにギルドは何をしているんだろうか？この五年間、一人も沼地に狩りに来るハンターがいないのだ。美人さんだったら全力で狩りの手伝いをするのに……そしてアイルに通訳できたら通訳してもらって、転生後初の人間との会話を楽しもう。やっぱり一言目は「報酬はパンツ一枚でいい」か「なますてー」かな。

そういえばこの沼地には何故かアイルやメラルーが居ない。居たらあのモフモフや可愛さで俺の心も癒されたのたのに。モンハン界の貴重な癒し成分が無いなんて、なんて辛い沼地だ。

だが、現実には居たのはショウゲンギザミやグラビモス、アクラ・ジエビアなどの強力な生き物ばかりである。こいつらの内群れのボスの三匹は本当に強くショウゲンギザミはその鋭いツメで俺の体を切り刻み、翼を切り落としてきたりしてくるし。グラビモスは熱線で

俺の体を丸焦げにしてタツクルで吹っ飛ばすし。アクラ・ジエビアは爪と尻尾のコンボや水晶爆破も使ってきた。もしかしたらやたら強いこいつ等が人が来ない原因かと思いい倒してみたのだが。それから一年経っても誰も来なかった。頑張ったのに……

しかし最近になって交易道の近くにある山間に人の気配が増えてきている。上空から確認してみると様々な資材が運ばれてきているので、中間地点に村でも作るのではないかと俺は予測している。

そして今日巣から出てみると久々に生きている複数の人間の匂いがした。しかも人間の血の匂いが混ざっていないので、これは期待できると俺は心躍らせつつ巣から飛び立った。

……流石に五年も経ったら飛べるよ。

こちら、スーク。目標を発見した。

空を飛んでいた俺は人の匂いの強くなった辺りで見つからないように慎重に地面に降りたところ六人の集団を発見した。現在この五年間で培ったスニーク技術を発揮してその六人を見守っている。見たところ学者さんが二人。残りがハンター達だろうと思われる。地形かなんかの調査かな？

何故か全員マスクをしているので見た目では違いは殆ど判らないが俺の嗅覚によると学者は五十代前半の男性と二十代前半の女性だが女性の方は竜人族かな？匂いが違う。後美人っぽい匂いがする。わくわくしてきた。

ハンターはランスが二十代後半男。大剣が二十台半ば男。ボウガンが四十代前半男。片手剣が十代半ばの少女（こっちは可愛い系の匂い）だな。動きを見るに、ボウガンの壮年の男が一番強い雰囲気か

する。ランスと大剣もなかなかだが片手剣の少女だけはさつきから無駄にきよろきよろしてるので、まだ初心者または沼地は初。だろうか。恐らく依頼人一人だけ女性と言うのを避けたかったのだろう。

ついでにボウガンの壮年の男と片手剣の少女は同じ匂いが混じっているのだおそらく一緒に住んでる親子だろう。親子じゃなかったらボウガンの男が勝ち組過ぎるので親子じゃ無い可能性は排除しておく。もしそうだったのなら。本当にそうだったのなら俺は、初めて憎しみで人を殺す！！

しかし折角生きた人が来たのになかなかピンチにならん。モンスターが襲い掛かってきてもボウガンの狙撃で死んでるし。抜けた奴は大剣が真つ二つにしているかランスで貫かれている。片手剣の少女は学者さんの傍で周囲を常に警戒してつポーチにすぐ手が伸びるようにしている。実質的な最終防衛ラインであるランスにたどり着いたモンスターは今のところ二体のイーオスだけだ。モンスター……お前らもつと頑張れよ。ピンチになったところを助けないと怪物ヒドロさんは英雄にはなれないんだから。

そうこうしている内に奴らは特に損害が無いまま俺の巣がある洞窟までたどり着いた。むう全員思ったよりやるなあ。ボウガンの走ってくるイーオスの頭を正確に打ち抜く異常な狙撃力はともかく、大剣もボウガンとのコンビネーションと体重をのせた一撃があるし、ランスも広い視野で撃ちもらしのモンスターを的確にさばいてる。片手剣の少女も父親譲りであろう視力で隠れて近づいてきたイーオスやカンタロスを撃破していた。

そろそろ昼になるがこいつら強いから見守るのやめよーかなと不貞腐れていると。洞窟の中で何かしていた学者さん達がハンター達と何か相談を始めた。そのとき地面が揺れたかと思うと彼らの近くの

地面からシヨウグンギザミが現れた。

男ハンター×三はすぐさま、戦えない学者さん達を洞窟の中に逃げ込ませ、その護衛を片手剣の少女にまかせて自分達はシヨウグンギザミの気を引くために戦闘を始めた。

さてここで俺はどうすべきか。

？洞窟内にも危険があるかもしれないので学者達と片手剣の少女を追う。

？シヨウグンギザミと戦っている三人の手助けをする。

？見捨てる。

？男ハンター達をシヨウグンギザミ共々殲滅し、その後、学者男の命を人質に取り。堕ちる美入学者と美少女ハンター凌辱と肉欲の宴
（貴竜^{あなた}って本当に最低の屑だわっ）を開催しようと鬼畜外道モードに入る。

？イケメンで天才のフルフルはいきなり人化できるようになりハレムを築く。

まず？は除外するとして、？も無いなこれまで一応見守ってきたし。
？は時間はかかるがシヨウグンギザミだったらこの三人なら特に怪我也無く終わらせるだろうから、無駄な手助けどころか邪魔になるかもしれない。
？は大変、魅力的だが会話できないので人質交渉がうまく行きそうにないし凌辱は好きだけど実際にやるのはちょっと遠慮したい。というわけで。

「ギユウ（やっぱり？だな）」

てなわけで作ってきました洞窟内男ハンターズに見つからないように、巣と外が直接つながっている場所から入ってきました。現在の

学者さん達と片手剣の少女長いから少女でいつかは薄暗い洞窟の中松明で視界を確保しつつ周囲を警戒中です。そんな中でも学者さんはなんか作業しています。だが学者さんよあまりこの洞窟を舐めないほうがいいぞ。

少女が気づいたときにはすでに遅く。天井を影に隠れながら歩いてきたランゴスタやカンタロス達に囲まれていた。少女は閃光玉を投げて入り口の方に逃げ出そうとしたが投げた閃光玉をランゴスタが包むように妨害したので思ったような効果は上げられなかったらしい。入り口の方は固められ奥に進む方は開けられていたので戦えない学者が二人もいる彼らは奥の方へ追い立てられていった。

まあ、そっちにはグラビモスとババコンガとコンガ達がいるんですけどね。少女と学者さん達はなんか呆然としている。後門の虫地獄前門に重戦車と装甲車、歩兵中隊付き、みたいなもんだからね。

……お、少女がグラビモスとババコンガ、コンガ中隊の気を引いてその隙に横を学者さん達に横を通らせるつもりらしいね。がんばれー。……飛竜応援中……右だ右、コンガが後ろから来るぞ気をつけろ！

あ、まずいグラビームがくる。

少女の危機を察したので、すぐさま天井から少女とグラビモスの間に降りた俺は文字通り翼を広げ熱線をから少女を守った。それと同時に尻尾の口でプレス（唾液と電撃の合わせ技）を吐いてランゴスタ達を蹴散らした。その後グラビモスの熱線と同時に少女に突進してきたババコンガを伸ばした尻尾の口を大きく広げそのまま一呑みにした。

うまい、もう一頭！ボスを一呑みにされたコンガ達は急いで逃げ出している。まだババコンガは生きているのに非情な奴らだな！全く、まあ結果的にはほぼ一掃出来た。

これは決まったな。……ってなんか少女と男学者は気絶しとるがな。何でやねん。せつかくの見せ場だったのに、思わずエセっぽい関西弁が出てしまったじゃないか。女学者さんは気絶してないのにハンターの癖に情けないな少女め。けど女学者さんもこれ以上は耐え切れないという感じの匂いが出ている。なんでかな。

その後、俺が逃げ出そうとしたグラビモスを伸ばした首で貫くと同じ時に誰かが倒れる音がした。何故だ。

第五話〜キングクリムゾン〜（後書き）

小話

人やアイルーメラルーが居なかったのは、沼地一体に成長を促す代わりに耐えられないものは死ぬ人体に有害な特殊な毒ガスがあつたから、彼等は村を作るのでこの沼地の毒ガスの分布調査にきていた。

神の優しさ

素晴らしきシヨウゲンギザミ

爪を振るだけで遠くの岩やファンゴが真つ二つになる。斬撃に弱いフルフルの翼を切り落とすなどしていたが、翼が無くなった分小さくなったのを利用してヤドに飛び込みMAXの電撃でつば焼きにした。

移動要塞グラビモス

普通のグラビモスの二倍以上の巨体を誇る。その大きさと電撃や生半可な攻撃は通じず。そのパワーで吹き飛ばした後、熱線で追い討ちをかける戦い方でフルフルを苦しめた。最後は二週間かけて作った硫酸落とし穴に落として、甲殻を溶かしてから体内を喰い破りKOした。

ぼくのかんがえたかつこいいアクラ・ジェビア

前の二体と比べてそこまで劇的な変化はないが地味に全体的に強化されてる。だが、前に戦った二体で学習したため、不意打ちを喰らって結晶に閉じ込められた後は抜け出してあっさり倒した。

第六話　ホル　ススム（前書き）

この話のフルフルは基本的にフルフルとしての形から外れません。理由はフルフルが可愛いからです。しかし、戦闘時に一部姿が変わることをフルフルファンの方はお許しください。

こんなこと書いていますが、今回、戦闘は無しです。

第六話　ホリ　ススム

前回ピンチに陥った少女ハンター（片手剣）と美人学者＋その他を華麗に助け出した俺はそのまま「大丈夫か」ニコッ　ポッ　を決めるはずだったのだが……彼等は俺がグラビモスと戦っている間に謎のスタンド使いの攻撃を受けたのか気絶していた。どうしてこうなった。

とりあえず彼等を、この沼地で一番安全且つ清潔であると自信をもつて紹介できる我が家へと運び入れた。

この自慢の巣もこの五年間の成長の証だ。まず入り口から通じる広間を拡張した。大きさはグラビモスが余裕を持つて寝れる程まで広げてみた。また食料貯蔵庫、寝室、植物・菌類栽培用の部屋、物置などを作った。これでもまだ用途を決めてない小部屋が三つほどある。また出入り口を今までのに加えて上に掘り進んで、洞窟内を経由しないで巣に直接入れるルートを作った。

後は雪山にまでつながる穴も掘った。これはある日ふと、そうだ、長いトンネルを作ろう。と思い立って掘り始めてから、そのまま何日もひたすら飲まず食わずで堀りに掘り堀り続けては掘り堀りと掘り進み、掘って掘って掘り壊し。掘って掘って掘り溶かし続けて。あれ、なんでこんなことしているんだ。俺、訳が判らないよ。髪型モヒカンにしたいなど、思考が混濁し始めた頃、雪山につながった……後のチビフルの黒歴史……なぜ私は雪山に掘り進んだのか？……である。

俺の黒歴史の事はさておき。気絶している彼等を巣の広間に運び入れた訳なのだが。一体何が起きたのか皆酷くうなされている。苦し

そうにしているので、ガスマスクを剥がしてやろうと。優しい気持ちから俺は行動した。顔を見たかったわけではない。

まず学者B、研究者なおっさん白髪交じり。以上。気になったんだが、なぜ彼等はこんなガスマスクをつけていたんだろうか？まあいい。このおっさんのガスマスクを外してみても、実験台にしてみたら特に変化はないようだ。

次に美人の匂いがする女学者さんである。期待に胸が高鳴る。ワクワク。慎重にマスクを外すとそこには優しい顔立ちの美人さんがいた。栗毛で目に入らないようにするためか髪は後ろで纏めている。耳は長く特徴的な形をしており、この美人さんが竜人族であることと、俺の嗅覚の優秀さが証明された。

次に少女の方も外してみた。少女の方は肩を少し過ぎた所までの黒髪のツインテールの勝気な雰囲気を持つ可愛い少女で、まだ子供みたいなあどけなさが残っている。よくよく見てみると、この武器は確かデスパライズで防具はザザミー式である。懐かしいなあ。ドスの頃この装備で遊んでたんだよな。初心者かと思ったがこの装備の事を考えると単にこの沼地の不気味さで緊張していただけらしい。

しかしこの三人はなかなか起きないな。この沼地で気絶などしていたら、すぐにイーオスやランゴスタ達が集まって骨も残らないぞ。これは起こしてやるべきだろうか？だとしたら起こす手段をどうするか。電気をながしてビリッとさせるか、叫んで音で叩き起こすか、普通に揺すって起こすか、はたまた光を思いっきり当てるか。

いやここはあえて起こさずに今の内に美人の匂いや寝顔を見て楽しむか、辛そうなので装備や服を脱がしてみるとか、体中を嘗め回してみるとか。などうんうん呻って考えていると。そのような不埒な考えに及んでしまったのがいけなかったのか、少女が目覚めそうな

心配がした。

やばいやばいやばいどうしよう目覚めにこんな生き物がいたら驚くよね。そうだよ。間違いないよね。叫べたらどうしよう。いますぐ逃げ出したい。マツハで逃げ出したい。実はさっきまでの考えは単なる現実逃避だったんです。起こすかどうかを考える事で目覚めた後の事を考えないようにしてたんです。ごめんなさい。

あ、目が覚めた。

起き上がり周囲を見回した。学者さん達を見つけ無事なのを確認してホッと息をついた。そして、そのままこっちを見た。

目が合ってます。コッチミナ。

「……………」

まだ目は合ってます。照れる。

「ちっさい」

「ホワ（うっさい）」

フルフルにちっさいとか言うなそれは周囲の男ハンターの精神に130のダメージを与えるぞ。気にしている人だったら即死だ。あ、何か考え込んで。謎のスタンド攻撃についてかな。

む、俺にとってもそれどころではないぞ。今まで考えないようにしていたが。どうやら、この世界の言葉も俺は理解できるようだ。商隊の遺品に在った本を見たとき文字が読めたから、言葉が分からないかった時は誰かから習えばいいかなと思っていたからそこまで不安

ではなかったが、習う必要が無いのはやはり楽だな。

考え終わってまた少女の方を見ると。彼女も考え終わったのか、ちようどこっちを見た。息ぴったり、お揃いだね。

無言で武器を手に取る少女。そのまま学者さん達と俺の間に入りこちらの動きを伺っています。なにこれ。しかも、彼女は足は震えているし腰も引ける。ただその目からは守らなきゃいけないと思う気持ちが伝わってくる。もう一度言う、なにこれ。そんな悲壮感たつぷりにこっちを見つめないでよ。俺ラスボスじゃないよ。ぶるぶる。ぼくわるいふるふるじゃないよ。

とりあえずどうしようもなくなったの離れた所で寝たフリをする。寝たフリ開始から暫くして、こちらに敵意がないのが判ったのか、こちらに警戒しつつも彼女は学者さん達を起こし始めた。

二人とも起きる時に悲鳴をあげた。でも俺はそっちを見なかった。怯えられた顔まで見たら俺、泣いちゃう。あれ、おかしいな。巢の中なのに雨が降ってるよ。前がうまく見えないや。

俺が悲しみに浸っていると。急に女学者さんが声を上げたかと思うと俺の存在を忘れて皆で話し合い始めた。寝たフリをしながら聞き取った情報をまとめると。

彼らは探査隊で、この沼地の特殊な毒とそれによる異常な成長を遂げたモンスター調査にきた。その毒はガスマスクをしてないとハンターも三十分で死ぬんですって。しかしこの巢は他の場所と違い清浄な空気が保たれている。だから、何故かガスマスクが外れていても、彼等は死ななかった。ついでに女学者さんの名前はミナさん。少女の名前はツキカちゃん。学者男はルアルさん。

これを聞いて思ったこと、ルールさんごめんなさい。俺貴方を実験台にしました。でも学者だから死んでたとしても、知的好奇心の為の行動の結果だから許してくれたよね。結果的には死んでないし皆の名前を知ることができたからいいよね。後この沼地そんな危険な所だったのね。これがこの世界の沼地の普通かと思ってたよ。

……ところで、俺が持つてるこのガスマスクを見てくれ。こいつをどう思う。

いや、まさかそんな重要アイテムだとは思わなかった物で記念にもらっておこうかな。とツキカちゃんとミナさんの分だけ今抱えこんでるのよね。でちょこつと見えてる。で彼等こつち見てる。誰か取りに来て。

願いが通じたのかミナさんがこっちに恐る恐る来た。俺は抱え込んでいるガスマスクを、彼女が取りやすいようにさり気無く寝返りながら押し出した。すると、ミナさんはガスマスクを取りながら。こう言った。

「あなた、言葉が解るのね。」

「ギユイ（うん）」

って何だってええええええええええ！？

第六話　ホリ　ススム（後書き）

神の優しさ　前回書き忘れた分もあるよ

人食いの機会

実はこの主人公、人を喰えば割と簡単に人化できるようになります。そのため、この沼地では異常な程、死体や半死人を見つけられました。周りの人が死にやすくなるわけではなく、死体が集まり安くなるようだ。

特殊な毒ガス

主人公の急成長の原因の一つ。普通のモンスターは成長速度が上がり、代わりに寿命が縮む。強い固体なら寿命も減らずさらに強くなる。人体に対しては単に有害なだけ。生物のサイクルを早める効果も有る。

ふつつのあとがき

このチビフルはどこへ行くのか…　それは誰にもわからない、作者さえもそれは同じ。…　なぜなら、書き溜めしてないからね　ミ

次回作書くときは気をつけます。

第七話くえっく（前書き）

いつの間にか日刊ランキング一位になってたりしました。（9月18日）

駄文ではありますが読んでいただきありがとうございます。

第七話くえつく

前回のあらすじ、人間の言葉が理解できるのがばれたでゴザル。

ミナさんが、俺が人語を理解しているかもしれないと思ったのは、彼女曰く。

この巢の壁や通路は動物らしい本能で作られたのではなく、失敗を繰り返した末にできた計算された形がある事。壁に規則性のない飾りの模様がついていたり、壁や通路を作ったのと同じ方法で作られたものが落ちてる事。巢が異常なほど綺麗な事。これらのことからまずこの巢の持ち主であろう目の前の小さいフルフルは、かなり高い知能を有していると考えたらしい。

またほとんど、自分達に傷がない状態で巢まで運ばれていた事。一応グラビモスの熱線をからツキカちゃんを守り、モンスターだけを倒したこと。こちらが起きていても攻撃してこないこと。警戒していたこちらから、わざわざ離れたことから。人に対してまったく危機感を感じてないか、または遊び道具として連れてきたのかと考えた。

最後に話をしてる最中に時々ピクピクしていたのとツキカちゃんが話しかけたら返事をした。と言っていたので。俺がわざとらしく寝返りを打ちマスクを足で押し出したのを見て、言葉を理解していると思い、思い切って話しかけてみたら見事返事が返ってきたと言うことらしい。俺の完璧な演技を見破るとはたいした奴だ。

つまり、俺は見事に鎌にかかったらしい。むしろ、ギロチンに滑り込んだ方がいいかな？

結果的には目標の一つである人間とのコミュニケーションが不完全ながら出来るとことになった。まだばらすつもりは無かったのにいきなり「あなた、言葉が解るのね」って言われてびっくりはしたが。

今考えると彼等の方から言葉が解ることを理解してくれたのは、俺にとってはかなりプラス要素になる。

例えばの話になるが。猫がいきなり私、人間の言葉解ります。と書き始めるのと。猫が人のしゃべる言葉に的確にニヤーと返事をして喋った通り行動してくれるのでは。同じ人間の言葉を理解してくれているのであってもイメージが変わるのだ。後、自分から人間の言葉解ると伝えて気味悪がられたら、俺は深い悲しみに包まれて二十年は未開の地に引きこもりたくなるだろうからな。

それはともかく、巢の様子を見て俺の知能の高さを見破るとは……
なんか照れる。

なんだかんだでもう五年。この巢は殆ど俺のが掘って広げたものだから、この巢には最後のときは此処で迎えたい。と世界に向けて叫んでもいい位の愛着はある。しかしこの巢はそこまでの知性を感じさせる巢だろうか。典型的な竜ならこれ位するんじゃないかな。と思うのだが。

たとえばこの広間は、ある日せつかく目が見えるんだから。こんな陰気な岩の壁じゃなくもつと綺麗にしてみよう、ついでに防御力も上げようと思い立ち、それから三ヶ月経って完成したのが壁や床、天井までもが光り輝き、ちよつとやさつとでは傷付かない。この総クリスタル張りの広間、池とシャンデリア付きである。

作り方はいたって簡単。岩を削ってそこに唾液や電熱で溶かしたク

リスタルを流し込み、冷えて固まったら余分な分を削り取るだけ。
これを繰り返していくだけの簡単なお仕事です。

天井に関してはアクラ・ジエビアを倒した後、アクラ・ジエビアみたいにクリスタル発射できたら楽なのに。と思ってやってみたら出来た。その後広間が無駄に広すぎて寂しかったのでシャンデリアを地面で苦勞しながら作り上げて、天井と溶けたクリスタルで繋げて開いていた空間を埋めてみた。

竜って確か光物が好きなんだよね？宝石とか溜め込んでるイメージがあるし。なら、これくらいするよね。あれ、それはカラスだったけな。

話がまたもずれたが彼女の説明を受けた俺がミナさんって頭良いのね。流石、学者さん。と感心しつつ頷いていると「危ないですよ」とか「危険だ」と言っていた二人も警戒しながら近づいてきた。泣ける。電撃のクエストにでてる最小金冠フルフルより小さいのに何でこんなに警戒されるの？

「本当に、大丈夫なんですか」

「大丈夫よ。こんなに近くにいても攻撃してこないし、ガスマスクを渡してくれた所を見たでしょう」

「でも、モンスターはハンターを外敵と排除してくるって言われているし……」

うんそうだよ。ゲームでもモスが風圧を受けてハンターに襲い掛かってきたり、野生のアイルー達に襲い掛かれたのはいい思い出です。この世界でも、ハンターは外敵として殆どの生き物に認知されているしね。普通に可愛い見た目だったらほった舐めたりして終わりなんだが、この姿ではただの味見になってしまう。……この

味は嘘をついてる味だぜ。とでも言えば許されるかな。まあ信用はこれから勝ち取ることにしよう。友達になるものじゃなく、いつの間になってるものって誰かも言ってたし。

「まあ、この小さなフルフルが危害を加えないとしても。私たちに今生きて此処から出る手段がないのよね」

へ？なんですと。ルールさんは解っていますな顔してるけどツキカちゃんと俺はびっくりしてるよ。

「どうしてですか、ミナさん！」

「ツキカちゃん、落ち着いて。ほら私たち気絶してたし、洞窟の前でそろそろガスマスクの残り時間が限界だったでしょ。今確認したけど。ガスマスクの効果が切れてて、毒ガスの所に出たら私たち死んじゃうのよ」

それは一大事だ。ツキカちゃんも驚き。どうしようかと、腕を組み目を閉じて呻りながら解決策を考えてるようだ。む、目を開いたなにか閃いたのかな。

「そつだ！お父さん達はどうなったの？」

訂正。忘れられていたお父さん達の事を思い出したようだ。俺も忘れていたが。

「ジンさんたちなら大丈夫よ。あなたの自慢のお父さんなんですよ」
「そつだよ。お父さんなら大丈夫だよ」

ランスと大剣はいいのかお前ら。そのお父さん達は、大量の人間の血の匂いが流れてこないのか、恐らく大丈夫だろう。一番怪我が多

いのは大剣さん、ジンさんであろうガンナーとランスは同じ位である。この血の量の差は役割と防御手段の所為かな。俺にかかれはこの沼地ぐらいの範囲なら人間の血が流れた量など嗅覚で余裕で把握できるのだ。

「では、我々はどうすれば此処を抜け出せるんですかな？」

「迎えが来るまでここで待つしかないんじゃないかしら」

「そんなあ、短時間の調査依頼だったから食べ物なんて竜車に置いたままですよ」

おお、ルアールさんが久しぶりに喋った。けどまたミナさんとツキカちゃんの会話に戻っちゃた。でもさっきからルアールさんは何してるのかな？俺が安全なフルフルだと解ってから器具だして周囲を調べ始めてるし。そして、ツキカちゃんは見えた目と違い若干アホの子なのか？

「食料なら、そこに池があるじゃない」

「わたしお魚釣り苦手なんですよ。それにお魚だけじゃ辛いです」

アホの子確定の瞬間である。仕方ない俺はミナさんの服を引っ張ると付いて来いと言う意味を込めて一鳴きして巢の奥の方へと歩き出した。

……付いて来なかったの。もう一度一鳴きして、翼で一生懸命手招きしたら着いて来てくれた。

「……これは、凄い」

ルアールさんが驚愕しているのは俺の自慢の食料保存庫である。前

はただ置いておくだけだった保存庫だが、今では雪山から持つてきた氷結晶で冷やすことによる長期保存も可能になっている。氷結晶にはかなりお世話になっています。

保存しているのは主にアプトノスやケルビなどの肉がメイン、グラビモスやシヨウグンギザミの肉も保存してある。もちろん肉だけじゃなく魚も冷凍保存している。食料を見せてあげたのが良かったのか、ツキカちゃんの俺に対する警戒心が一気にゼロになった。しかしミナさんが次の発言した瞬間、ツキカちゃんのテンションが下がった。

「これがこの沼地の生き物の肉なら、毒の成分が残っているかもしれないわね」

ツキカちゃんが悲しみに浸っているとこっそり肉を調査していたルアルさんが。

「大丈夫でしょう、調べた所、肉には毒は残留してません。それに、こちらにはポポなどの雪山の生き物の肉がある。気になるならこちらの方を食えばいいでしょう。それにしても素晴らしい品揃えですな」

と言った。ツキカちゃんのテンションがぐーんとあがった。見ていて楽しいなこの娘。しかも俺も褒められた。見る目あるねルアルさん。気分を良くした俺は、彼等を俺の自慢の植物園に連れて行った。

「……綺麗」

「……ここまでとはね」

「……素晴らしい」

上からツキカちゃん、ミナさん、ルアールさんの反応である。ふはは、もつと褒め称える。

沼地の植物でも日光ゼロでは育ちが良くなかったので、光が必要な植物のために此処は天井に大きな穴を開けて、其処にクリスタルをはめ込むことで十分な明かりを保っている。暗い所が好きな植物やキノコは暗くした隣の部屋にて育成中。そのキノコ部屋は入り口以外は殆ど腐海（ナウシ〇的な意味そのまま）の様なありさまになっている。水は雨が流れて来たのを溜め込み、少しづつ流れ出すようにした。沼地の植物は生命力が強いので、こうすることで時々見に来るだけでも勝手に育つようになっていく。

俺の家の素晴らしさを三人に見せ付けていると。ミナさんが何か考え込んでいた。まさか俺の家を乗っ取ろうと考えているのか。だがペットとして置いてくれるなら、ミナさんにとられても構わないぞ。と俺もふざけたことを考えていると。

「ねえ。この巣はあなたが殆ど広げたものなの？」

「ギユ（そうですたい）」

俺が熊本風に答えてみるとミナさんはまた少し考えた後。

「なら、この巣から直接、沼地の外に出る穴ってあるかしら」

「ギユイ（それはないけん）」

今度は福岡風に答えてみた。

「そう。そこまでうまくはいかないみたいね。……例え今から掘ってもらっても、何カ月後になるか……」

後半のミナさんの小さく言った独り言もバッチリ聞き取った俺は考

えた。結果、一日あれば十分だと出た。翼を懸命に動かしてジェスチャーで頑張って伝えてみた。ダメだった。仕方ないので文字と図で使ってギョオギョオ言いながら頑張って伝えてみた。結果。

「えっ」

「えっ」

「？」

一名を除き伝わった。でも、何そのリアクション。ツキカちゃんだけが俺の味方です。

第七話くえっく（後書き）

人物紹介

ルアールさん

軽いマッドサイエンティスト。でも、孫が出来てからはその気は薄くなった。五十三歳、王立古生物書士隊隊員。白髪交じりの茶髪。

ミナさん

竜人族。学者もしている。二十四歳、栗毛で髪の毛は後ろでまとめている。優しい顔立ちだが、意外と厳しい。行動派。

ツキカちゃん

ハンター。片手剣使い。ダイミヨウザミまでなら一人で倒せるが、ジンさんが付いてくるので一人で倒したのはイヤンクックまで。黒髪ツインテール。アホの子気味。

第八話　　苔まで愛して（前書き）

途中から視点が切り替わるよ！　注意してね！

二次創作に必要なのは原作を愛する心と気合、そして少しの遊び心
ってばっちゃんが言ってた。

第八話　苔まで愛して

前回のあらすじ「えっ」「えっ」「？」解せぬ。

「本当に一日で沼地の外まで掘れるの？」

驚きから回復したミナさんの第一声は、賞賛の言葉。ではなく本当にできるのか？と言う疑問の声だった。この小さい体だから疑問に思ったのだろうが。意外と洞窟から沼地の外までは近いのだ。

この沼地は周囲を大小さまざまな山に囲まれていて、交易道に近い谷になっているところが今回彼らが入ってきた場所だ。この巣がある洞窟はその入り口近くの山の中にある為、外までの距離は巣の中で一番沼地の外に近い所からだとして、直線距離で300～500メートル位だろう。今の俺なら一日で十分掘れる距離だ。そんな、穴掘りで大丈夫か。大丈夫だ、問題ない。

てな訳で沼地の外に一番近い場所から穴掘りを開始することになった。あ、みんな危ないから離れててね。穴掘りの場所についてきた彼等を離れさせると、俺は口を大きく広げ硬い岩壁に齧り付いた。

「ギョオワア（これより、穴掘りを開始する）」

俺の穴掘りはいたってシンプルだ。岩を削り喰らい。体内の電熱や胃液で溶かしたものを尻尾の口から壁に塗りつけて補強する。ただ、それだけだ。岩を削り、喰らい。そして排出、補強。それを繰り返し俺はひたすら外に向かって前進する。美人の頼みだ全力でいかせてもらおうじゃないか。

削り喰らい排出補強削り喰らい排出補強削り喰らい排出補強削り喰らい排出補強。削り、喰らい、排出、補強。削る、喰らう、排出、補強。削って喰らって排出して補強する。削り、喰らい、排出、補強。削り、喰らい、排出、補強。削る削る削る削る。喰らう喰らう喰らう。排出排出排出。補強補強補強。ガリガリゴリゴリガキンガキン。ギャルギャルジャリジャリジュルンジュルン。ジャリジャリヤベタベタドルン。削り喰らい排出補強。ガリガリゴリゴリガキンガキン。ギャルギャルジャリジャリジュルンジュルン。ジャリジャリヤベタベタドルン。

今日は記念だから、人に会えた歓喜の日だから、ひたすらひたすらひたすらに俺は掘る。掘っていく。掘り続ける。

「なんで、あのフルフルは私たちを助けてくれているのかしらね」
「ほえ、優しいフルフルさんだからじゃないんですか」

……この子本当にハンターなのかしら？……確かに、いろいろありすぎて混乱しているのはわかるけど。自分で言っていたじゃない。モンスターは人を襲うって。ポポのお肉で餌付けでもされてしまったのかしら。

「ツキカさん考えても見てください。幾ら知性が高いと言っても彼は竜です。あれほど強い固体なら本来は食事のとき以外は手を出さない限り人間やハンターにすら無干渉を貫くはずです。何故あの竜は私達を助けたのか？今態々外から自分の巣に繋がる道を掘っているのか？大変気になります。僕は彼が何を思っている希少な植物や菌類。保管されていた様々な稀少鉱物。モンスターの素材。さらに

何故、此処は毒ガスのが影響が無いのか？等を調べる方が有益だと思えますねえ」

「……毒ガスの調査はいいけど、この巣にある物の調査は後回しにしてね」

こっちの人は、孫が産まれた二年前に治ったはずの病気が再発し始めているし。どうしたらいいのかしら。

「みなさん。よくわかりませんが、とりあえず食事の準備をしてきます」

「……あなたはそれでいいわ。いつてらしゃい」

「はいっ」

ツキカちゃんはそのでいいわね。問題はフヒヤヒヤ八言ってるこっちの人ね。

「ルアル博士は、何故、毒ガスの影響がこの巣の中では無いのか見当が付いていますか？」

「んん？僕の予測を聞きたいのかね。まだ大まかなことしか予測は立てられてはいないが、まあいいでしょう。まず我々が洞窟の入り口近くの時点で調べた時、その時点で洞窟の内と外との毒の差は二割ほどの差がありましたね。つまり洞窟の内部に毒を中和もしくは排除する物があると我々は考えました。此処まではあなたも理解しているでしょう。その所為で我々は進むべきか退くべきかという会話になり、そこでショウグンギザミの襲撃に遭ったのですが。その後、……まあ、その後もいろいろありましたが、結果的にあの飛竜に助けられ、この毒ガスが存在しない彼の巣の中へ招待されたのだから、別にいいでしょう。むしろ好都合と言ってもいい所だがね。で此処からが僕と君との考えの違いだろうからしっかり聞いてくれよ。まずこの巣の中だ。此処は毒ガスが無いのもあるが。流れる空

気自体が沼地にあるにしては異常に綺麗だ。これは壁や地面が綺麗にされている所から、恐らくあのフルフルが電気などでまとめて掃除しているのもあるんだろう。だが僕は其れだけがこの空気の清浄さを保っているのではないと思うね。その根拠に関する一部の話を言わせてもらつと、洞窟は基本的に風の通りが良く空気が澄んでるか、流れが悪く淀んでいるかのどちらかに成るのだが此処には風の流れある。つまりこの巣にはは外の有害であるはずの毒ガスを含んだ空気が流れこんでいるのだよ。だがこの巣の中は清浄な空気が保たれている。洞窟内の空気が流れ込んできている場所を調べて見たが其処も空気は清浄なままだつた。正確に言えばほんの少し、人体に何の問題も無い程度には毒は含まれていたがね。……ん？本当に大丈夫だ。百年間吸い続けて寿命が一週間縮むかどうかだよ。まあ、僕の寿命はさておき。問題は何故この巣の内と外ではこんなにも毒ガスの量に差があるのかこの一点に尽きるね。考えれば解ることだが毒の浄化はこの巣の中で行われている量は少ない。なぜなら、この巣の中に入る前で毒ガスは浄化されているからだ。なら何処で。巣の外の洞窟の中にいた我々だがあの中でも一番ましな所で外と比べて三割位だつた。なら簡単だ。毒ガスの浄化はこの巣とあの洞窟を繋ぐ通路の中で行われていたんだよ。その結論に至つた段階で、既に僕はあの通路に在つた、植物。鉱物。苔。菌類。虫に至るまである物を片っ端から採取した。これらを相応の機材で解析すれば、間違いなくどれかが毒を分解する働き若しくは内に溜め込む働きを持つているはずだ。その中でも僕がこれだと目星をつけているものはだね。これだよ。この特徴的な形をしている苔だよ。この素晴らしい苔を見たときは驚いたね。独特の色合いを持つ濃い緑と赤色のこの苔、これは新種の苔だ。沼地と洞窟に関してなら書士隊の中でも一、二を争うほど詳しいと自負する僕が間違いないと断言するよ。この苔は恐らく突然変異によって出来た新種だ。何らかの特殊な環境によりこの苔は変異したんだよ。これは大発見だよ！何処が大発見かというとな（……………一時間経過……………）そのなかでも特徴的な

のはその生命力だね。他の土地よりも厳しいこの沼地でこの苔はあの通路で他の植物や苔等を寄せ付けない程に育っていた。だが、そうなる問題は何故その苔がこの巣と洞窟を繋ぐ通路外にまで繁殖していなかったのかだね。この苔の生命力なら動物に取り付いてそのままそこで成長するぐらいのことは出来そうなのにね。もしかしたらこの苔は、その凄まじい生命力と引き換えに、繁殖能力の低下若しくは繁殖形態が変化しているのかもね。思えばこんなにも成長しているのに胞子を飛ばした後が無いのは変だと思っていたんだよ。もしかしたら、この端の方にある子実体の様な形をした部分が横に横に伸びていき少しずつ生息域を広げていこうとするのかな？いや、きっとそうだろうね。毒ガスに関してはこの巣で調べられることは調べたから、ちょっとこの巣の中を探検してくるよ。僕にとっては此処は宝の山みたいな所だね！本当に！調べ物を回収したら戻ってくるよ。ではまたね。ミナ君。ツキ力君。」

.....

.....

「ミナさん。どうしたんですか」

.....ハッ

「ごめんなさい。少し休ませてくれないかしら。ちょっと注意しようとしたら、パンドラの箱を開けてしまったみたいで」

「いいですよ。でもご飯が冷めるので早く来てくださいね。後、パンドラの箱って何ですか？」

「.....あなたは気にしないでいいわ」

「分かりました！」

.....ふう、疲れた。

第八話〜苔まで愛して〜（後書き）

ルアールさんの長台詞。一回全部消えてorzしたのは後書きを読んだ君と作者だけの秘密だよ。

神の優しさ？

すごい苔

チビフルが唾液の能力研究の末に産み出した。狂気の液体フクダケトケール君（仮）を浴びた苔が突然変異して産まれた物。ありとあらゆる毒をエネルギーに変える力を持っている。すりつぶせば様々な毒に対応できる優秀な解毒薬が出来る。乾かして煙を吸えば肺に溜まったニコチン、タールも分解してくれる優れもの。副作用があるとすれば、解毒薬は服にかかるとハンターの防具でもなければ溶けてしまうこと。煙は大丈夫。

第Qまたは？話〜GUN道〜（前書き）

あれです、いつもと比べてかなり遅かったのは、どうにか頑張つてノクターンを完成させようとして挫折したり、別の奴の第一話をとりあえず書き終わろうとして挫折したり。やけになつて、小説を沢山読んだり、ドラクエジョーカー2（プロフェッショナルではない）でメタキン狩りをしていたからでは決してないです。

なにはともあれ、お楽しみください。

【クエスト：山肌を刳り貫け】を達成しました！つてところだ。サ
ブターゲットは途中にあったアレにしよう。アレは凄かった。古代
文明の遺産の香りがプンプンする。だが、惜しいけどミナさんにあ
げるしかない。アレを渡せば素敵、抱いて！とまではいかないが、
かなりの好感触を得ることが出来るだろうからな。期待を胸に俺は
彼等が待っている巢へと戻っていった。

……なにこれえ？（c v 千年パズルを解いた少年Y）特に何も伝え
てなかったが人の家で君達くつろぎすぎじゃね。仮にも此処、竜の
巢なのに。

まず一番警戒をしていないといけない。ツキカちゃん。彼女は疲れ
ていたのか食べて今はぐっすりお休み中です。寝顔がとってもプリ
ティーで緩みきっています、ツインテールを解いた寝顔は余計幼く
見える。まさに天使の寝顔だね！頬に付いたお肉の欠片がアクセン
ト。でも、防具を外して寝ているのはハンターとしてはどうかと思
うよ。俺の倉庫から持ってきたであろう毛皮を敷いているのでとて
も快適そうだ。

そしてミナさん。彼女もツキカちゃんが持ってきたであろう、毛皮
の上で寝ている。ツキカちゃんとの違いは彼女は適当なものの上に
毛皮を敷き椅子代わりにして、周囲を警戒していたが疲れて寝てし
まっただろうと言うことだ。穏やかな寝顔が逆にこの場でなにが起
きたかを伝えてくれそうな気がする。

その疲れた原因は主に彼女の足元に転がっているルアールさんだろ
う。俺が居ない間、はじめて見た時の白髪交じりの普通のおっさん
と言う印象は消え失せ、明らかな狂気の気配を感じさせる雰囲気

放っている。

この部屋に来たときに気になっていたが、この部屋に他の部屋のいろんなものが持ち込まれていた匂いがしていた。ルアルさんが持ち込んだのをツキカちゃんやミナさんが戻したのであろう。持ち込まれたものは主に、植物や沼地の生き物達の素材が多い。……大事にしている奴は持ち出されていないな。

最後にはツキカちゃんの眠り投げナイフで、暴走し続ける彼は強制的に眠らされたようだ。それでも、うつすらと開いた瞼から見える血走った目からその時の彼の狂乱振りを思い伺わせる。

……と言つか眠り投げナイフは人間に使っていいのか。

一日も経たないうちに、また起こすかどうかを悩まないといけなくなるとは竜生とは儘^{まま}ならない物なのだなあ……

とりあえず、ハンターなので心苦しいがツキカちゃんを揺すってみることにした。天使の寝顔に近づいていく。クツ、神は俺になんて試験を与えたのかっ！だがこれも戦争なんだ。許してくれ。

ユサユサ、ユサユサ

「……うみゃうにゃ……お腹いっぱいですよお……」

ツキカちゃんなんてベタな……全く持つて末恐ろしい子だ。まさかこの俺のハートを一撃で貫くとは、なんという萌力。見るよこの緩みきった寝顔。信じられるかこいつハンターなんだぜ。もうお腹一杯らしいんだぜ。

だがこのツキカちゃん、起きる気配ゼロッ……全くのゼロッ……。この一回のやり取りで俺には彼女を起こすことなど出来ないと判断

した。もうこの子の幸せそうな寝顔を少しでもゆがめることが出来そうにない。さっきのやり取りは心に大剣を差し込まれた後、いにしへの秘薬をかけられたようなものだ。二回も喰らったら俺は堕ちる、堕ちてしまうだろう。だからもうできない。これはこの竜生で初の人間に対する敗北だ。

ではルアルさんと言いたい。が彼は念入りに殺られたようで当分起きそうにないので、却下する。

仕方ない。こちらでも随分心苦しいがミナさんを起こすことにしよう。匂いでなんとなく解ったが、彼女は大変苦労していたようだ。だから後回しにしていたが結局こうなったか。これは彼女が苦労体質と言っわけではなく、他二名が周りに苦労をかけやすい人物なのだろうな。マッドと天然系アホの子に挟まれているとか波乱の予感しかない組み合わせだしね。

ではミナさんを起こすとしますか。ペタペタと寝ているミナさんに近づいていると、ミナさんが起きそうになった。寝ていても一応周囲の気配を感じ取れるのか。でもそれ学者の役目じゃなくてハンターの役目じゃないか。

「……………んう……………はああ」

起きたなう。ちょっと色っぽい起き方。

「ふう……………ッ!?……………!……………ハア……………」

解説なう。目開ける↓目と目が合う↓びっくりされる↓昨日の事を思い出した↓納得↓落ち着く。ちょっと傷付いたなう。俺のドラゴンハートにヒビが入ったなう。何故だ昨日最高級のおもてなしをし

たじゃないか。そう思ったので、ちょっと非難の気持ちを込めて見
つめつつ鳴いてみる。ホワホワ。

「ご…ごめんなさいね…ちょっと巢の中の物を動かすすぎたみたい
ね……謝るわ」

微妙に伝わってない上に怯えられている気がした。気のせいだと思
いたい。気のせいじゃないだろうけど、そう思うだけでも心へのダ
メージが随分違うことをこの人達から学んだ。学ぶことで俺は前よ
りも強くなることが出来る。そう思えばこの痛みも辛くはない。辛
くないったらない。

起きたばかりのミナさんには悪いが彼女にはやってもらわねばなら
ないことがある。G級クエスト【寝ているツキカちゃんを起こせ】
だ。俺は一撃で三死ほどのダメージを受けたが、彼女ならやってく
れる筈だ。俺はそう信じている。

少し警戒しているミナさんに翼でツキカちゃんを指し示してあげる。
さあ、俺に出来なかった事を成し遂げてくれ。

「……………」

ミナさんは幸せそうな寝顔で熟睡しているツキカちゃんを見ると。
黙ったまま近づき、そのまま、ツキカちゃんがくるまっている毛皮
を引っぱがした。なん…だと…

「ふにやつ」

「起きなさい」

「……………うう、もう朝ごはんですかあ？」

まず初めに「飯の事を気にするとは……ミナさんも呆れたのか言葉を失っている。俺も同じ気分だ。」

「……！あ、おはようございます！それと、そっちは昨日のフルフルさんですね。穴掘り終わりましたか？」

黙っていた俺達を不審に思っただけで考えていたのか、少し考え込んだ彼女から出たのは朝の挨拶だった。そして、その後に続いた言葉で俺もすっかり忘れていた目的を思い出した。しかし目が覚めた後の頭の回転のよさは流石にハンターらしいな。ツキカちゃんのハンターとしての評価が俺の中で少し上がった。

「キヤオキヤオ（終わったよー）」

ジェスチャーと鳴き声で穴掘り終了のお知らせをする俺。なぜか今回は理解してくれないミナさん、だが代わりにツキカちゃんが理解してくれたようだ。ポンツと手のひらを拳で打つと俺に確認してきた。可愛いな。

「……なるほど、もう出来たんだ。はやいねー」

「……えっ」

その通りだよ。ツキカ君。だがフルフルに早いとか言うな！それはNGワードだぜ！そしてミナさん何そのリアクション。またも傷付くよ。でもその後の諦めきった顔を見ると逆に慰めなくなるのは何故だろう。

その後防具を付けたり、荷物をまとめたりと彼女達の出発の準備が終わったので、新たに作った沼地の外への直通ルートへ案内した。ルアルさんは起きなかつたので、いくつかの荷物と一緒に俺が台

車で運んでいる。ちなみにこの台車は拾い物で今回ありがたく使わせてもらっている。

「……本当に出来てる。でも……何…これ…」

「少し変な臭いがするねー」

何これって通路ですよ。形は出来るだけ前世で見たトンネル再現してるけど、確かこの形が重さに強いんだよね。力が支えあうとか何とかで。大きさは車一台なら余裕の大きさに見えました。こっちはないけど。

そして、臭いは仕方ないんだよ！速く掘る為に岩を溶かしてたりしたからね。そっちは少し臭いで済むから我慢してくださいな。

てな訳でただ今通路を通って俺にとつては外出、彼女達にとつては脱出中である。隊列は前から俺、ルアルさん、ミナさん、ツキ力ちゃんの順だ。ルアルさんはまだ起きないから荷物と一緒に台車の上だ。

暗い所でも大丈夫な俺が危険が多い一番前を警戒し、戦闘力のないミナさんを真ん中にして、念のために後ろからの警戒をツキ力ちゃんがしている。転生後初の人類との共同作業に胸が高鳴る。

ところで暗い通路をひたすら歩いていく時、人ってどんな気持ちになるか分かるかな？まあどんな気持ちになるかは人それぞれだが、行動はいつもよりお喋りになるか、静かになるかの二択になりやすいよね？つまり今、みんな静かになっていて、俺のハートは負荷に耐えられずビクンビクンしてます。この独特の静寂感なんだか前世の記憶が妙に刺激される気がする。

結局、モンスターの襲撃も無く。無言のまま無事沼地の外に出ることに成功しました。なんだか人付き合いの苦手だったあの頃の記憶

が刺激されまくって心が痛い。喋れないから自分ではどうすることも出来なかったのも辛い。

「……本当に外に繋がっているわね」

「あ！道の向こうにミナさんの村がある山が見えるよ！」

あらミナさんあの村に住んでるのね。意外とご近所さんになるのか。ここは手土産を一つ持たせてあげよう。

その前にアレに気づかせないといけないので、翼で近くに置いていたアレを必死に指し示す。パタパタとな。

「……ミナさん……あれ……」

「……………」

驚きで声が上手く出ないようだな！

そうアレこそ、俺が穴掘り中に見つけた。純クリスタル製の大剣だ。目を引くのはまず、その華麗な装飾であろう。俺もそこその装飾品は作ったがここまで精緻で美麗な飾りは人類の手じゃなければ作れないだろう。だがこの大剣で一番美しいところは、その王宮にもないような飾りではなく、この大剣の刃そのものだ。実用的な美と芸術的な美を兼ね備えたその美しさは、最早俺の言葉では殆ど言い表せない程だ。一番近い表現は、触れるものを皆、切り捨てるような美しさ……だろうか。

そして明らかに古代文明の遺産と言ったのは、この大剣の素材のクリスタルはとても硬いのだ。掘り進んでる時にぶつかったが、電撃も酸も通じず牙にいたっては折れてしまった。そんな硬い素材を今の人類が細かく加工できる筈がない。

そんな凄まじいものを仮にも飛竜の俺がハンターに与えていいのかと思うだろうが。そこは世の中全てにおいて完璧と言うものは少ないと言うことだ。

この大剣の欠点は大きさと重さ。大きさは通常の大剣の三倍はありどっかの街に居る筈の大長老なら持てそうだが一般ハンターには厳しいだろう。次に重さだがこのクリスタルは硬い分、非情に重いらしくグラビモス以上の重さは確実にある。運ぶ時はかなりきつかった。

つまり人類では到底扱いきれない代物なので別に渡してもかまわないと言うわけだ。……流石に伝説の大長老でもグラビモスを振り回したりは出来ない筈だし。

まだ驚きから回復しきって居ない二人に、今度は進呈のジェスチャーをする。指し示すだけのさっきの動きと違い。今度は複雑な内容なので翼だけではなく、全身を使つての鳴き声を交えた必死のジェスチャーをする。

ギアアキアパタパタペタペタ

「……………」

「……………」

……伝わらなかったようだ。あの時ツキカちゃんと心が通った様に思えたのは気のせいだったのか。

やはり漢は行動で示すしかない様だ。ちよつとグダグダの雰囲気を纏ったまま俺（ルアルさん＋荷物＋大剣等のみやげ物を装備中）と彼女達は村のある山へと向かつていった。

第Qまたは？話〱GUN道〱（後書き）

PSPでMH2ndGをつけて確かめつつ、フルフル狩りに行ったら。アナログの反応のいかれ具合が進んで、プレスに飛び込んで二死したorz

自分でも分かりづらくなったので、そろそろ登場人物紹介的なものでも作るかもしれません。

神の優しさ

大剣

用途 苦しくなったときの自殺用。

効果 他の人にとっては普通（？）の大剣。主人公が死にたいときに刃に触れれば首が落ちる。前世の残り寿命（112年）が過ぎると効果は消える。

第十話　笑顔とは本来（ry）

てくてくと村に向かって歩いているのは、チビフルと愉快的仲間達御一行。

そのチビフル担当を任されているのが何を隠そうこの俺だ。二回目か？このパターン。あの大剣は非常に重いので、荷台には乗せておらず、尻尾を吸盤代わりにしてその脅威の吸着力で引っ張ってます。後ろに大剣がある所為で荷台は引くことが出来ないで押している。大剣と荷物を合わせると流石にこの体でも重いので、現在の俺の速度はミナさんの歩き程度に抑えられている。

愉快的仲間達の美少女、美女担当のツキ力ちゃんとミナさんは荷台の右側を歩いている。両側にばらけないのはミナさんの戦闘力がなから仕方ないそう。本で殴って戦う学者じゃないし仕方ないね。

愉快的仲間達の黒一点ルアルさんはまだ睡眠中だ。身動きなどの起きる気配すらしないでぐっすり寝ている。

やっぱりモンスターも眠るほどの睡眠投げナイフを、人類に使うのはまずかったんではなからうか。彼が目覚めるかどうか、今の俺の一番の心配事になっている。何故ならもし目覚めなかつたら、ツキ力ちゃんに罪が及ぶかもしれないからだ。その時はルアルさんを埋めなければいけない……

こんな風に色々考えているが、あの大剣お披露目会ときから俺は会話に加わっていない。

せっかく外に出たのに何故会話に加わっていないかと言うと。尻尾↓大剣に引っ付いてる。頭↓荷台を押してる。翼↓荷台のバランス取り。とジェスチャーで必要なパーツを全部使っているからだ。出

来てせいぜい話しかけられた時に、鳴き声で合いの手を入れることくらいだろう。

だがミナさんとツキカちゃんはその後から、俺に話しかけてくれないのだ。二人でひたすら何かを話し合っている。俺も会話に加えて欲しいと思っていたが。改めて考えると女性二人の会話に飛び込むのは、グラビモスの熱線に飛び込むより度胸がいると思うので。今は出来るだけ鳴き声を立てないように静かにしている。寂しさはない。

だがやはり歩くだけでは暇なので仕方なく、周囲の音を聞いて警戒している時に聞こえてしまう彼女達の会話を聞いている。断じて盗み聞きではない。耳が良いので勝手に聞こえてくるだけだ。その会話を並べると

あのフルフルは何処まで付いてくるんだろうか？村まで付いて来たらどうすればいいか？

他のハンターたちは今、何処にいるか？沼地の方を探しているのではないか？お父さんは大丈夫です。

あの大剣は何なのか？何故、持ってきているのか？それよりもあの装飾は綺麗だね。

ルアルさんをどうするか？起こしたらめんどくさいから寝かせておこう。

村に帰ったらなんて説明しようか？難しいことはミナさんに任せます！

このような会話がループしている。特に大剣の装飾についてが長い、やはり何処でも女性は綺麗な物に引かれやすいということか。あとやっぱり大剣に関しては通じてないのね。此処まで持ってきたんだから道中で気づいてもらえたらいいいなー程度には思っていたんだが。……村まで持っていけば流石に通じるはず。

そういえば前に上空から見た村は作り掛けだったはずだが、彼女達の口ぶりから察するにもう殆ど出来てはいるのだろう。となると今回の調査は村の傍にある今まで人の手がつけられなかった、毒ガスが漂う超危険地帯な人外魔境びつくり沼地を村が出来る前に少しでも調査しようと言うことだったのかな？

あの沼地は二、三年前から自分でもおかしいなあと思っていたんだよ。やたらモンスターの数が多かったり、時々異常な程強いモンスターも現れたりしていたからな。

一番インパクトがあっただのは、全身キノコまみれのグラビモスだった。

その見た目は動く巨大なキノコの山だった。頂上にある巨大な赤いキノコを中心に紫、黄、青、白、黒などの様々な色のキノコが隙間なく生えていた。そんなキノコの山がその巨大な赤いキノコをユサユサと揺らし胞子を撒き散らしながら突進してきたのだ。痛くなかったがモフツと飛んだのでかなり驚いた。プレスも菌糸を発射してきて喰らったらキノコまみれになるプレスだった。そのキノコの量はグラビモスの甲殻の上に更に一メートル分キノコの層ができる程。あまりのキノコの量に肉を食べるまでグラビモスと気づかなかった位だ。

と言うか考えているうちに今気付いたんだが、何で彼女らをもう少しあの巢に留めなかったんだろう。結局、彼女達と一緒にすごした時間は三時間あるかどうかなんだが。このまま村に入ったら「ありがとう、そしてありがとう」とか感謝の言葉言われた後、さよならフルフルパターンも在り得るんじゃないか。まあ、それでも今後も調査とかでまた会えるかもしれないからいいが。最悪なのは「ありがとう、そしてありがとう」の感謝からさよならフルフル永遠に……

…（完）パターンになることだ。まあ一応飛竜だから正面からなら負ける気はさらさらしないが。鬼退治やヤマタノオロチ退治的に食料に毒混ぜたりなどの、油断させて殺すパターンだったらやばいかもしれんから、一応警戒しておこう。そうしないとこの先生きのこないからな。

そうやって色々考えつつ一時間ほど歩き続けていたら村が見えてきた。村の人々からどんな罵声を浴びせられるかと思うと凄く興奮してきた。嘘だけだな。またもや緊張で思考が混乱しているだけなんだ。

ミナさんの村は、山に囲まれている地形を利用したまるで砦のような形をしている。緊急時には出入り口である門を閉ざすことでモンスターへの襲撃を防ぐことが出来るのだらう。今は開いているその門から入るわけだが、かなり緊張している。とても緊張している。大事なことなどで二回いいます。

だがここで緊張を理由にして入ることをためらっていてはいつまでたっても、人間と関わり合いを持つことなど出来ないだらう。そして、最終目標のキリン娘とイチヤ×2などではしないのだ。いざ大いなる夢の為村の中へと進もうと一歩踏み出そうとした時。ツンツンと体に触れる感じがした。なんじゃらほい。ミナさんに突かれていた。そちらを見るとミナさんはすまなそうな表情で俺に告げた。

「悪いけど、少しここで待ってくれないかしら。先に村の人達にあなたの事を説明した方が混乱が少なくなると思うの。今までの経緯も説明しなきゃいけないから。ごめんなさいね」

うむ、それなら仕方ないね。猶予が与えられてほっとしている俺を

残して、ミナさんとツキカちゃんは門の中へと入っていった。……あれ？ルアルさん持っていないのかい？忘れ物ですよミナさん。遅れて気付いたときにはもう俺の声が届かない所へミナさんは行ってしまったようだ。

ふむ、待っている間、暇だし今までの展開を纏めてみるかな。

- 1・昨日いつものように起きたら、生きてる人の匂いがした。
- 2・見に行くとそこにはハンターも含んだ人間の一大団が！
- 3・ストーキングしていると、彼らはショウゲンギザミの襲撃に遭い、バラバラになってしまった。
- 4・女性が多い方をストーキングしていると、ピンチになったので華麗に助けた。彼女等は気絶した。
- 5・目覚めた彼女等の様子を見ると、人語が理解できるのがばれた。
- 6・傲慢の我が家を公開。鼻高々になる。
- 7・帰る方法がないらしいので、通路を掘ってあげると伝えた。驚かれた。
- 8・凄く頑張って穴を掘った。途中でクリスタルの大剣を発見！
- 9・穴掘り完成を伝えた。驚かれた。クリスタルの大剣を見せた。驚かれた。
- 10・巢を出てここまで歩いてきた。会話が少なかった。

纏め完了。気付いたこと。俺は寝ていなかった。

なんだか寝ていないことに気付いたら急に眠くなってきた。くっ……これが人間に会えたことでハイテンションになっていたことへの報いか。しかし俺にも五年ほど野生で過ごしてきたという自負がある。そう簡単に安全な所意外で寝るものか！とは言ったものの穴掘りで思ったより疲れているらしい。かなり眠い。

そうだ！眠い時は時は素数を数えるんだ。ってどつかの神父も言っていたような気がする。というわけで実践。素数が2匹、素数が3匹、素数が5匹、素数が7匹、素数が11匹、素数が13匹、素数が17匹、素数が…… zzz

軽いまどろみの中でゆっくりとした感覚を楽しんでいると、俺の理性とこの体の本能とでも言うべきものが、警告を与えてくる。しかしこの半分寝ている状態の、このふわふわとした感じから抜け出すのはとても大変だし拒否したくなる。警告を無視してそのまま、軽いまどろみの中で、雲になったようなふわふわとした感じを味わいながら、ミナさん達を待っている時。門の上から音がした。

そのまま音も立てずに落下してきたものを、大剣から離れた尻尾をグインと伸ばして弾き飛ばした。ぬ、硬い。でもその割には軽いな。

吹き飛ばしたものが何なのか確認する為、俺は十メートルは吹き飛んだものに首を伸ばした。

其処に居たのはおじさんとお爺さんの中間のような竜人族の男性だった。中途半端に小さいなこの野郎。手に持っているのは角竜系の片手剣かな、あんなに棘だらけの奴は知らないけど。

……にしてもこの匂い、ハンターじゃなくて鍛冶職人か？血の匂いが濃くないしなにより、炭や焼けた金属の匂いがきつい。腰にハンマーもあるし手ぬぐいもある、ついでに筋肉ムキムキだから確定だろう。

そのままマツチヨな竜人族の鍛冶職人と見詰め合っていると。門からミナさん達が帰って来た。お帰りなさい。

ミナさんは見詰め合っている俺達を見ると、笑顔のままツキ力ちゃ

んから何かを受け取り。笑顔のままこっちに近づき。笑顔のまま俺と見詰め合っている竜人族の鍛冶職人にナイフを突き刺した。刺された竜人族の鍛冶職人は急な事態に驚き、声を出そうとしたらしいが、麻痺毒が塗ってあったらしく、体をピクピクと痙攣させたまま倒れた。

……怖いッ！ミナさん怖いよ！

刺したミナさんは、その笑顔のまま、話しかけてきた。

「私が居ない間、何かあったかしら？」

重大なことは何も無かったので、俺は伸ばした首を戻して静かに横に振った。ツキ力ちゃんもは竜人族の鍛冶職人を引きずって先に門の中へと戻っていった。

第十話、笑顔とは本来（ry）（後書き）

今回は前書きなし、これからは基本、前書き無しにします。

竜人族の鍛冶職人

150cm位の身長で筋肉モリモリマッチョマン。ドワーフのイメージに近い。武器を打ち合わせば相手の気持ちちが分かるという考えを持つ。実践的鍛冶職人。

ツキカちゃんの特技

トラップや薬作り、ナイフ投げ。手先が器用なので細かいことが得意。お父さんの補助の為、弾丸調合も出来る。裏方向け。周囲の人からは、何処の暗殺者だよ！と心の底で思われている。

チビフル五年の成果

手加減可能。寝ながらの警戒。尻尾と首の動きが自由自在。

第十一話 この作品はR・15 (前書き)

前書きは基本書かないと言った次の回到これだよ！

！警告！

今回は下ネタがあります。不快に思った方はその部分を飛ばしてください。そこまで大筋には影響はありません。

追記

いつの間にやら総合ポイント3000超えました、これも読者の皆さんのおかげです。

第十一話 この作品はR - 15 -

ミナさんの後を付いていき門の中に入って村全体を確認してみると、やはりここは村と言うより宿場町としての雰囲気の方が強い。奥の方に大きな屋敷と鍛冶屋、商店、集会所といくつかの民家など村としてのものもあるが、此処の門から村の半分まで商人達が泊まるであろう宿場や荷物を保管する蔵、竜車を置いておく小屋など宿場町としての機能を果たす為のものが多く、更に此処でも商人達に取引をさせるためである、村の広場には大きなスペースが設けられており荷物を並べやすいようにしてある。

また奥のほうにある村の機能が集約されている場所には、川を引き込んで作られたと思わしき池と畑がある。お、アプトノスも居るな。アプトノスは村の食料用としても用意しているのだろうが、竜車用として商人に売る分も含まれているだろうな。この村だと需要も必然的にあるだろうからいい値段で売れるだろう。

なんだか見た感じ内部だけでも、この村は十分自給自足出来るようになっていて。あの堅牢な門といい、村の全体的な構造といい、この村は何処に向かっているんだ？ほつといたらバリスタや撃龍槍、大砲を装備した難攻不落の要塞になるんじゃないか？現在が一番近いイメージを知っているもので言い表すとしたら、もの○け姫のたたら場かな？自然に寄ってみたたら場。

……そして村に荷物と大剣と共に入った俺に浴びせられている視線は、ミナさんとツキカちゃんを除くと二十九人位だな。視線から伺える思いは多い順に疑念、警戒、恐怖、興味、期待、羨望、感謝、捕まえたい、撫でたい、乗りたい、無関心、××、○○だな最後の二つは内緒だゾ。

匂いで判別した村の総人数三十八人＋三匹より視線が少ないけど、残りは仕事と家の中に避難かな？子供達にはアダルティな俺の存在は早すぎると判断されたんだろう。

……あれか？よくある「見ちゃいけません！」とか「あなた達にはまだ早いのよ」的なシーンと同じ位の物体なのか俺は？存在がR-18指定ならめえ的な存在になってるのか？やっぱり俺は生きてるだけでわいせつ物陳列罪に当たる存在なのか？生きてるだけで2年以下の懲役又は250万円以下の罰金若しくは科料に処されてしまうのか？自分ではそこまでち○ち○（ち○コやペ○ス、陰茎とも呼ばれる）に似ているとは思っていなかったんだが人間から見るとやっぱりち○ち○（ち○コやペ○ス、陰茎と以下略）に似ているのか？ちようどいい感じに小さいから後で「あのいきもの、お父さんのち○ち○（ち○コやペ○ス以下略）にそっくりだったね」。あ！でもあのち○ち○（ち○コ以下略）の方がおつきかったね！」なんていわれるのを危惧していたのか？でも俺、頑張っているよち○ち○（ち以下略）なんて言われないようにプレスはめったな事が無い限り口から吐かない様にし、毎日帯電して体は清潔にしているし、よだれも垂らさないように努力したんだよ！俺はなんとしてもち（以下略なんて呼ばれたくないんだ！俺はち（ryじゃないんだ！t（ryじゃないんだ！

穢れを知らない無垢な子供にとって、俺のような生き物は正しくフルフルの元ネタの通り悪魔または（ryなのだろうか？自分の存在というより見た目について、いまさらながら俺が考え込みながら歩いていると。無事村の中央にある広場に到着した。

ふむ、周囲からバリスタやボウガンなどで狙われる感じはしないな。屋根の上からの奇襲も罠も特に無い。

沼地で見かけた残りのハンター達三人とこの村の門番や警備員の代

わりをしているだろうガーディアンみたいな二人が俺が暴れたとき様に戦闘の準備が出来ている。他の人たちも一応武器になるものを持っているが、役に立たないだろう。これなら今のところは警戒を緩めていいかな、こちらが警戒しているとあちらにも気持ちが悪わって警戒されるだろうからな。

……その前にこの大剣を此处に刺しておくか。

この広場の中央は無駄にスペースがあり過ぎる。ここに大剣をモニユメンとして刺し込めば村の名物になって人気が出るだろう。そうなればこの大剣を持ってきてここに配置した俺の人気も上がりマスコット化にまた一歩近づける。俺はしばらくマスコット路線に集中していこうと決めたんだ。手始めにこの村の名物マスコットの地位を目指そう。

ではでは大剣を尻尾でグインと持ち上げまして、尻尾を伸ばしてそのまま広場の中央へザクツとパイルダーオン！

うん、ナイス俺！大剣の刺さり方がゼルダの伝説のマスターソードの如く真っ直ぐだ。

一発でここまで出来るとはやはり俺は天才なのだあゝ！と世紀末の北斗な三兄弟の次兄である病人を模倣したとある村の超天才^{アミハ}を真似してハイテンションになっていると。

村人達の様子がおかしいことに気付いた。パンピーな村人達は驚きや恐怖の表情を湛え、戦闘職のハンターやガーディアン系の人達も武器を構えて警戒と敵意を表しているがその中に恐怖が隠れている。だがツキカちゃんのお父様でジンさんだけは腕組みをしてダンディな微笑みのままだ。何このイケメン、四十過ぎてるだろうに格好良いなんて反則だぜ。しかしなんだ村人と戦闘職達の反応は？「ん？間違ったかな？」って言いたい！でも言えない！

ツキカちゃんはそんなお父さんに抱きついています。安心しきつてニコニコな笑顔が素敵。お前は空気読めコルア。アホの子にも限度あるぞてめえ。周りの人との違いありすぎだろうが。変わらないのもいいことだと思うけど。今は俺の村入りなんだからフオーを少しでも良いからしてくださいお願いします。…無理か。

ミナさんはやつちやたわね。とても言いたそう顔をしている。顔から説明が面倒臭くなる、もう一回安全性を話さなきゃ、余計な事するなどが伝わってくる。どうやら何か余計な事をしてしまったようだ。彼女にはこれ以上苦勞をかけたくないからね。

てな訳で戦闘職の方々に警戒されている中、ミナさんの第二回このフルフルは安全です危険ではありません説明会へ添加物や保存料などは含まれておりません〜が開催された。第一回は俺が門の外で待ちぼうけをくらって眠りこけている間に開催され、そのときはまだ小さいなら危険が無いだろう、ミナさんが言うなら…ということでは納得してくれたんだって。

第二回開催前にミナさんに言われたが、どうやら大剣を持ち上げ地面に突き刺した事がいけなかったらしい。あんなに小さいのに力強い事や尻尾が伸びすぎじゃないかと村人たちは危機感を覚えたらしい。今後は派手な行動、異常な行動は慎めと言われた。なるほどない。

しかし、そうしないと大剣が刺せなかったんだ許してください。テヘペロ。この体だと獲物を前にした舌なめずりにしかならないので心の中だけでやった。無性に悲しくなる。あと大剣に関しては褒めてくれているらしい特に商人と学者夫妻が。…：そういえば学者といえは誰か忘れていたような気がする。

人の配置は俺から近い順にジンさん、ツキカちゃん、ランス、大剣、

ガーディアン系二人組み。大剣の向こう側でミナさんが村人達に説明会をしている。なおジンさんの装備は今は太刀になっている、全体の雰囲気ガチリとはまっているのでこれが本気の装備だろう。

それから、十五分位後説明会は難航しているようだ。やはり大剣持ち上げはやりすぎたか。今のところ俺が安全だと分かってくれているのはミナさん、ツキカちゃん、ジンさん、あのマッチョな鍛冶職人。説明を聞いた後理解してくれたのは草とアプノトスの香りがする、生き物が好きそうな純朴そうな村娘一人位だ。

どうなるのかなーと思っていたその時、ヤツが目覚めた。

第十一話 この作品はR・15（後書き）

この作品はみなさんではなく、読者の皆さんの感想、指摘をお待ちしています。気軽にしてください。作者は大概喜びます。

人物紹介 時々更新 ネットバレ あるかも（前書き）

時々更新します。人によっては危険！ネットバレ注意！

10月11日更新

10月22日更新

10月25日更新

人物紹介 時々更新 ネタバレ あるかも

主人公（前世：人間 今世：フルフル） 名前（仮）シロシロ・リフル・シウテクトリ

シルエットが卑猥な主人公。神のメテオで死亡してMHに酷似した世界にテンプレ人外転生を果たす。人との係わり合いは基本ヘタレ気味。モンスターに対しては慎重すぎる嫌いがあるが普通に立ち向かえる勇気を持つ。

テンプレ的願い事は強い体と神の優しさ×2 強い体と言う曖昧な願いにも神の優しさが加わっている。

子供の頃食べた蝗の佃煮とはちのこが美味しかったので、一般から見ればゲテモノ好きに育った。だが、Gなど食べられないものもある。「……うん、凄く、好きなんだ。 カブトムシ。」

前世人物像

多趣味多芸で器用貧乏の人物、手先が器用な為ある程度はできるが極めるまでは行かない人。しかし、多趣味を活かして富士山の頂上に登ってそこで絵を描くなどの事をしていた。ロリショタ好きのBL百合SMおじ様熟女どれでもいける人だった為、今世で今までの自分はどんな人だったのか分からない原因にもなっている。プチ不運だったが、130歳以上までは確実に生きるほど寿命を持っていた。

能力

フルフルの能力 水晶精製（爆破機能付） ミラクル唾液（粘度や酸度などが自由自在） 鋭い爪の出し入れ 電撃の細かい操作（体内・体表限定）体色変化（赤く白の間のみ） 身体操作 超音波メス 水流ブレス（唾液） グラビウム 唾液ネット

神様

見た目は羽の生えた白いドー○君。実はきぐるみのようなものらしい。とても優しい神様。

前世主人公の近くに居た悪霊を祓おうとしたら、ミスに不幸と偶然と奇跡と幸運と強運と悪運と油断と人災と魔法と陰陽道と風水と儀式とすっかりが重なりメテオが発生して主人公は死んだ。御祓いには成功した。

神のなかでも人間の感性に近いが、それでも違いがある。

藤宮 月華 ツキカ フジミヤ

ツインテールな片手剣美少女ハンター。16歳。勝気な雰囲気を持つているが実際はアホの子気味。ハンターとしての腕前はダイミヨウザミまでなら一人で倒せる程度。お父さん大好きっ子。現在の装備はザザミー式にデスパライズ。父親譲りの黒髪黒目に母親譲りの白い肌と綺麗な顔を持つ。現在、ザザミ装備の為ツインテールにしているが、普段はポニーテールにしている。特技はトラップや薬作り、ナイフ投げ。手先が器用なので細かいことが得意。お父さんの補助の為、弾丸調合も出来る。周囲の人からは、何処の暗殺者だよ！と心の底で思われている。忍シリーズが似合いそう。

藤宮 刃 ジン フジミヤ

初登場時ヘビィボウガンの人。本職は太刀。42歳。ツキカちゃんのお父さんで東の方からきた。武士の雰囲気を持つ渋い男。丁髷ではない。娘に言われて身だしなみには気をつけている。黒髪黒目の黄色人種カラーで日焼け気味。ボウガン以外に太刀や弓、ハンマーも扱う。G級の実力だが、娘に構いまくっている為、現在上位級扱いにされている。

藤宮 アリス アリス フジミヤ

ツキカちゃんの母つまりジンさんの奥さん。33歳。美人。あらあまあ系の金髪碧眼美人。大事な事でもないけど二回書いた。

住んでいた村にモンスターが襲撃したところにジンさんが来て撃退。そして互いに一目惚れ。年の差など色々な問題があったが最終的には周囲を納得させ結婚。ルアールさん家の子供達を見て二人目が欲しくなった。

ミナ クアドランス

優しいな雰囲気、竜人族の女性。年齢は秘密。栗毛の長髪。髪の毛は邪魔になるので後ろで纏めている。怒る時はしっかり怒る方。エルブ村村長兼学者。

ルアール デイレアドレ

マッド気味な学者。54歳。孫の前では良きおじいちゃんになる。白髪交じりの茶髪。沼地と洞窟の第一人者（自称）。自称するだけはある沼地や洞窟に関する研究に対する情熱と知識は、他の学者の数段上に行く。

セージ デイレアドレ

学者兼ハンターそして夫。25歳。学者としての才能は少なかった。なので、他の人を補助する能力に長ける人になる努力をした結果、何故カリオレイアを追い払える位のハンターになった。助手や秘書執事、サポートなど脇役向け。見た目は若いルアールさんでも雰囲気全然違う。娘に隠していたエロ本見られた可哀相な人、四歳に氣遣われてそれに気付けないところが特に可哀相。

ユリイ デイレアドレ

学者兼妻。23歳。夫とは現地調査のとき助けられたのが切欠で付き合い始め、彼の食事の美味しさが決め手で結婚した。家事がうまくいかないのが悩みの二児の母。金の髪に青い目の格好良い系の見た目。宝塚でロミオとジュリエットなら即ロミオな顔。

リル デイレアドレ

ルアールさんの孫その1。4歳。しっかり僕っ子天才幼女。祖父の血のいい部分だけを受け継いでいる。サラサラのプラチナブロンドに宝石のような青い瞳の将来を期待される見た目。人との関係性を自分で閉じている。趣味は研究と弟の世話。彼女視点の話は書けない天才。

エル デイレアドレ

ルアールさんの孫その2。2歳。普通の男の子。基本父親似で目元だけは母親似。

ゴルデ バデストル

筋肉モリモリマツチョマンな竜人族の鍛冶職人。100歳。おっさんと呼んでいいか御爺さんと呼んでいいか迷う見た目。本人は爺でもゴルデ爺さんでもクソ爺でも構わないらしい。ただし弟子には親方またはゴルデ師匠と呼ばせている。昔、馴染みのハンターと大喧嘩をして武器を打ち合わせば相手の気持ちがかかるという考えを持つに至った。

エリン マルト

典型的村娘。14歳。農場の管理に一番積極的。茶髪に茶色の目の普通人。隣に居てくれるだけで癒される優しさが溢れている人。ただし食べちゃいたいくらいに動物大好き。捕食者モードに入ると色気が400%増加、属性妖艶付加、気配察知スキル上昇。捕食者モードは人には見せない。

十二話　蒼、再び

目覚めたのヤツはまだ自分が何処にいるかがよく分かっていない様だ。ギロリジロリと辺りの様子を見回し現在地や今の状況、行われている会話などの情報を取り込み寝起きの脳で処理させている。

ヤツが起きた事に気付いているのは恐らく俺とジンさんだけ、その内ヤツの危険性に気付いているのは俺だけだ。

ヤツは何をするか分かん。マイナス要素の可能性もある為ばれないように電撃で気絶してもらいたいが、ジンさんも気付いているのでそれは出来ない。

しかしこのままミナさんに説明してもらってもなかなか説得が進まなそうなので、危険ではあるが俺にとっては彼の行動により何かしらの変化が起きる方がいい。確実に村人達に衝撃を与えてくれるだろうから。

さあ行くのだ。狂気のマッドサイエンティスト！ルアールさん！

「……………ほう、つうまありいいいい」

地の底から這い上がってくるような声が広場に広がり、その場にいた人々は全員動きを止めた。

俺も動きを止めた。変わりすぎだろルアールさん。

「そこに居る小さく弱いと思われていたフルフルがそこに在る巨大で重厚、絢爛豪華なクリスタル大剣を振り回したので、事前に賢くて人間に害は与えないと説明されてはいたが、そのような強力なモンスターは村に住む人としてはこの村からは速く出て行ってもらい

たい。ミナ君としてはあの沼地の洞窟に閉じ込められた我々を沼地の外にまで導いてくれたので、付いてきたのならある程度はこのフルフルに好きにさせてやりたい。無理やり追い出すなどは論外であると。そういうことですかね。」

いきなりのルアールさんの登場に村の人々は啞然としている。皆ルアールさんの事忘れていたのか。酷い人たちだな。

「……ふむ、そのようだね。しかしだがね、このフルフルはただ単に我々を沼地から連れ出してきただけではないのだよ。その前に洞窟内で我々を襲っていたモンスターたちを撃破してくれたのだよ、君達も見た。いや、それ以上の力をもつてね。あの時は不覚にも途中でなぜか気絶してしまったが。その時居たモンスターたちはグラビモスとババコンガが居るコンガの群れ、ランゴスタとカンタロスの大群など、どう頑張っても僕達では死ぬしかないと思っていたからね。まあそれはいいとして」

俺の活躍が軽く流されただと！

「そんなことよりも遥かに重大で貴重な価値がこのフルフルにはあるのだよ！その貴重な価値というものはね、まずなんと言ってもこのフルフルが住んでるあの巣に関することだよ。あの巣には素晴らしい研究材料となるものが無数にあった。沼地に住む様々な種類のモンスター達の素材、沼地や洞窟に生息する無数の植物や苔、キノコが育てられている植物園のような場所、巣の中に落ちていたクリスタルで出来たその飛竜が作ったと思わしき美術品、その中でも特に特にとおくに！僕が貴重だと思うのは巣と洞窟を結んでいる通路にあった苔！あの素晴らしく、特徴的な形を持ち、まるで天界の布のような素晴らしきさわり心地を持ち、魂が野に帰るような緑色を持つ苔だ！沼地に詳しい僕が今だかつて見たことが無い色形を持つ

これまでの苔の常識を覆してくれたあの苔！その苔はね貴重で素晴らしいくて美しくて遅いだけではなく！あの沼地で人類が行動するに当たり最大の障害となる、今だ完全な解毒法が分からないあの毒を浄化する能力を持っているかも知れないのだよ。なぜそんな事が分かるのかというね。それにはまず僕と苔の出会いについて短くだが語らなければなるまい。あれは今から……（三十分経過）……

……よってあの苔は沼地の毒に対抗、更にはそれを養分とする能力を得たのだらうね。ここで大事なのはあの苔はこのフルフルの巣にしかなく、詳しい生育方法、繁殖方法も分かっていないのだよ。もしあのフルフルの行動があの苔の生育に関わっているのなら僕としてはコイツの意思を尊重させたいね。村から無理やり追い出すとなれば賢いコイツの事だあの巣から旅立つかも知れん。巣から逃げなくてもそんな扱いをしたら巣に入れてくれなくなるかもしれないし、その結果、敵対して討伐したとしてもその時に苔がなくなったら僕が何をするか分からないよ。何よりコイツの戦闘力は高いからね暴れられたらかなり被害もでるだらうね。まあ苔のついでだがコイツ自体にも僕はかなりの興味があるね、こんな小さな体であの沼地でも最上位に達する戦闘力。他の飛竜とは比べ物にならない知性。様々なものを作り出している技術、発想。さらにフルフルの原種なのにグラビモスのブレスを耐えた事。異常なまでの人間に対する敵意のなさ。巣で見かけたこいつの優しさ。一学者、書士隊の一員、なにより沼地の研究者として沼地の生物であるフルフルの中で明らかに外れているこのフルフルをね。私は研究したい、観察したい、解剖したい、連れまわしたい、他の奴らに自慢したいと思うんだよ。だからだね僕はコイツの傍に暫く居ようと思うんだよね。なればこそ僕の傍に居るコイツをだ、無理やり追い出すなんて事はしないで欲しいんだね。いざとなったら僕が責任は持とう。コイツの賢さと優しさは僕が保障してあげよう。だから僕の研究が楽に進む為にみんな了承してくれるよね。……返事はないが。無言と言う事は反対はしないということか。そうか了承してくれたか。それはよかった

なあ。なら名前でも付けてあげようかね。観察対象HH-1……じや味気ない気がするね。ならあの沼地の名前も組合せてHH-1・シウテクトリ。……何か違うね。……ではリフル・シウテクトリ。まあ一応こんな感じかな。僕にはネーミングセンスと言うやつが無いからね。とりあえずこんな感じでいいだろう。となるとコイツの滞在する場所を決めなくてはいいかね、とりあえずは貸し出し用の竜車小屋の一つでいいよね。もちろん僕が少しは改良しておこう。さてミナ君、話は終わったからとりあえず僕はコイツを竜車小屋に連れて行くよ、食べちゃいけない物、してはいけない事を教えないといけないからね。付いてきたい人たちは付いてきてくれ。後、あの毒に関する事は明日の朝までには終わらせておくから、荷物の内僕のものだけはうちの息子夫婦に持たせて置いてくれ頼んだよ」

……………解剖はお断りします！

ルアルさんの大多数の人のとって訳の分からない話をぶつけられ殆どの人は機能停止した。幸い俺は人の話に飢えていたし、知識は広く浅く持っていたし沼地は文字通り第二の地元なので意識を残す事ができた。他に意識が残っているのはルアルさんの話に出てきた息子夫婦に農場の匂いの村娘A、ミナさん、ツキ力ちゃん、ジンさん。

しかしこのルアルさんは大変な沼地オタクだな。最初見た時はそんな風じゃなかったのになあもっと大人しめの学者さんかと思ってた。だけどそこまで俺のマイホームを褒めてくれるとは……美人な女性にに褒められたかったけどおっさんでもあそこまで褒められると照れるな。でも勝手に名前付けんな！名付け親は純朴な幼女がベスト、そうでなくても女性が良かったのにせめてミナさんがつけてくれ。ただしツキ力ちゃん。お前だけはダメだ！いやな予感しかない。

意識が混濁している方々を意識が残っている人達に任せて、俺は先に歩き出したルアルさんの後を付いていった。

十二話〱苔、再び〱（後書き）

主人公の名前は暫定です。

今回はルアルさんとかの心情がメイン。他の作品の書き溜めを少しするので遅れます。ごめんなさい

PS・ルアルさんの長台詞はこれが最後。次あるとしても数文字で飛ばし背景とします。登場人物もルアルさんの話に耐性ができたので。

最初はチヨイ役どころか死ぬパターンもあつたルアルさんが、ここまで活躍するとはこれがキャラが勝手に動くと言う事か……

勢いで書いていたら主人公がニコポナデポを決められたのは内緒。飯の名前なのに一日は考えたのはもつと内緒。

閑話〱ルアールさんの心情〱（前書き）

ルアールさん視点。短いのです。

閑話〜ルアールさんの心情〜

この飛竜は不思議だ。

まず飛竜を含む野生のモンスター達は外敵、特に人間を見かけると排除しようと攻撃を仕掛けてくるものが多い。稀に人間に対して攻撃を仕掛けてこないモンスターも存在するが、それは既に外敵や人間を歯牙にもかけないほどに強くなってしまった固体であり、決して人間に友好的になったのではない。

だがこの飛竜は明らかに我々に対して明らかに友好的に接してきた。しかもそれは本能や習性によるものでも無く人間と言う種族、その言語を理解するほど知性をもつての行動だ。

最初の遭遇の時は特に馬鹿げていた。フルフルなのにグラビモスのブレスの前に飛び込んできた。フルフルの特性と習性を知っていればこれがどれだけ異常なことか直ぐに解る。

巢の中で目が覚めた時もその巢の中に広がっていた光景に驚かされた。飛竜が作り上げたとは思えない、だが人間に作り上げられるとも思えない程の幻想的な美しさを持つ竜の巢がそこに在った。

巢の至る所に使われている模様の彫り込まれたクリスタル、通路の隅を流れる僅かな傾斜を付けられた水路、美しさの中に高い知性とそれを可能にする技術力が見て取れた。

その巢にある美しき物、貴重な物に目を奪われ巢の中を探索していた時に、それよりも明らかに異常と言える物を私は見付けた。

それは整然と並べられた二十個程の墓だった。その墓に彫り込まれた文字や傍に置かれていた遺品から、その墓が最近この沼地の付近で行方不明になった一部の人間の物だと分かった。

そして僕は墓の置かれていた部屋の清廉さに、この部屋が一番この

巢の主の心が込められていると感じた。

その後新種の苔を見付け少し暴走してしまったが、これは竜には関係ないので省略する。途中で年の所為か眠ってしまったしね。

眠りから目覚めた僕は周囲の変化に驚いた。フルフルの巢の中で眠った筈なのに何時の間にか村の中にいて荷台の上で寝ていたようだ。周囲の状況を観察し、今何が起きているのかを理解しようとした。その時だ。そのフルフルの本当におかしな所が分かったのは。それは僕にしか分からなくて。そのフルフルも自分がそこまでおかしなことになることは自覚していなかっただろう。

小さいながらも強力なそのフルフルはとても怯えていたんだ、人間に嫌われる事に。

それはそれは飛竜としてもモンスターとしても異常で、昔の僕なら興味深いと思って研究したいと思うだけだったろう。でもそこで僕は研究者としては駄目な考えが思い浮かんだ。

昔と違い僕は歳を取ってしまった、今では僕にも可愛い孫が二人もいる。二人は本当に可愛い自慢の孫だ。

だが上の孫は可愛いだけでなく天才だった。

それは自分の孫だからだと言う鼻屑目ではなく、リルは本当にずば抜けすぎた天才だった。一歳で完璧に言葉を解し、四歳の今では息子夫婦の研究や僕の研究の手伝いまでするほどの天才だ。

僕達は大変喜んでリルを天才だ。女神の祝福を受けた子だと褒めた。しかし、よくある事で異常なリルは周囲の人々に気味悪がられた、そしてリルは賢く優しい子だった。表に出さなくても気味悪がられている事を察知し、やがて周囲に迷惑をかけないように自分から閉じていき、僕達が気付いた時には本物の笑顔を見せてくれなくなつた。

だからなのだろうか？そのあまりにも異常で、おかしくて、強くて、優しい、人間に嫌われる事を恐れるフルフルに対して、リルと仲良くなってくれそうと思ってしまうのは。そしてコイツがこの村に居られる様にしてあげたいと思うのは。だからだろうか？コイツにリフルと名付けてしまったのは。だからだろうか？リルもリフルも同じように自分の心を騙して生きているように見えるのは。

僕は歳を取ってしまった、そんな僕には正しい判断ができて居ないのかもしれない。だけれどもこの判断はいつかこの一人と一匹の為に成りその間に絆を作ってくれるだろう。それは研究者としては面白い事とは言えないが、一人の孫の祖父としては素晴らしいことになるだろう。そうなる事を僕は願う。

閑話〱ルアールさんの心情〱（後書き）

一人称で主人公が嘔吐きだと心の奥深くがそのままだと描写しにくい。これはどうしたらいいんだろうか？今回のように第三者に視点変更するべきか、後書きでちよくちよく主人公の内心をネタバレしていくか。個人的には視点変更が好きなんですけど読者の皆様方はどう思いますか？是非お暇でしたら感想に書いてみてください。指摘もお待ちしています。

裏設定 主人公は現在、気合で体をピンク、赤、白に変えられる。
これは週一の人間になれと念じる時に会得した。

十三話　　よう、よ

ルアールさんの後を着いていき俺は村の奥の方、民家や農場などがある所へと歩いて行く。

そしてなんか二人きりになった途端ルアールさんのマッドな雰囲気、が鳴りを潜め、物静かな最初の頃のルアールさんの雰囲気に戻った気がする。と言うより学者から単なる普通の優しげなおじさん見たいな雰囲気になった。

……何故だ？急にそこまで態度変えるようなことがあっただろうか？ルアールさんは寝ていたからミナさんやツキカちゃんと比べて俺との関わりも少ないはずなのに、直接的な意思疎通もしてないぞ。

だから、そんな生暖かい視線で見るんじゃない、他の人が見たら勘違いするかもしれんぞ。アッー！的な方向に。

しかしルアールさんの演説のおかげでとりあえずは危機は免れたけど今後は大丈夫だろうか？何気にルアールさんのあの演説で納得してる人もいたけど、やはりモンスターだからこれからも警戒はされるだろう。ここはルアールさんの余計なことしたらそいつにナニカスルゾと言っていたマッド性に賭けておくしかないか。

とりあえず最低三日はこの村を満喫しよう、そのあとは一旦巣に帰って見る事にしようかなとつらつらと大事な事やどうでもいい事、くだらない事を考えていると。

「もうちょつと気楽にしていたほうがいいよ。僕は沼地の生き物が大好きだからね、襲わない限りは嫌わないよ」

前を歩いていたルアールさんがこんな事を言った。

——　　思わぬことをいきなり言われて思考が停止した。

前を歩く彼は続けて言う。

「何故かはそうなっているかは分からないが、君は賢いだけではなく人間に非常に近い考え方を持っているのは分った。つまり君は人と一緒に居たいんだろう」

歩きながら彼は俺に話しかけ続ける。……合ってるけど急に言われるとどう反応していいか分からん。

「なら此処に来れた事は君にとってなかなか運がいい。ちょっと寄り道するけどいいかい」

……いきなり話しが飛んでないか？それと寄り道ってどこ？まあ良いけどな。

ルアルさんが近くの家に向かって歩いていくと、彼が家の前に来た所でその家の扉が開いた。

「お帰りなさい、お祖父ちゃん。今回はそのフルフルがお土産？」

扉の奥から出てきたのは、サラフワなプラチナブロンドのにサファイアのように美しい瞳の美しい幼女でした。

……て、ちょっと待て。お帰りなさい、お祖父ちゃんということはこれがルアルさんのお孫さんですか？見た目では全然分からん全く似てないぞ、嗅覚では分かるがそれも薬品の匂いとかが強くて何とか分かる程度だ。

「詳しく説明するのはやめておくが。まあ似たような物だね」

「……そう」

説明はやめておくのか！？そして今更ながら俺に全然驚いてないと

かどういう事なの……あとフルフルをお土産扱いとかこの幼女で
きる。俺が驚愕していると幼女がこっちを見つめてきた。

「……………」

……よう、よ観察中……こっちをジツと見てらっしゃる。次に頭に
手を伸ばしてきてそのまま撫でられた。

……幼女のやわらかいぶにぶにの手で撫でられています。正にヘブン
状態な至福の時間だ。至福の時間なのだけれども第三者から見たら
アウトじゃないか？フルフルの頭を撫でてる幼女なんて明らかに犯
罪の香りしかない。しかもこの場合逮捕されるのは間違いなく俺
になってしまう。

まさか俺をこのまま社会的に抹殺する気かと不安になっていると。
幼女が口を開いた。

「目が見えて人間の言葉まで理解するほど賢いフルフルなんて、お
祖父ちゃん凄いのを見つけてきたんだね」

なん……だと……何故分かった。しかも目が見えていることまで
分かるとか何者！？

まさかこやつは伝説のうわよう、よつよい（頭腦的な意味で）な
のか？と引き続き困惑していると。

幼女は続けて自己紹介をしてくれた。

「ボクの名前はリル・ディレアドレ。四歳だよ。これからよろしく
ね」

ボクっ娘だと……声も柔らかい感じで正に地上に降りてきた天使そ
のものとみたいな子だ。

もう一度言っがこの子は本当にルアーさんの孫か？本当に見た目

は似てないな。それよりも四歳でこのしっかりした性格にはつきりとした喋り方。俺が四歳の時はこんな風じゃなかったぞ。

そして今更だが幼女に会わせてくれたのはいいが、ルアルさんは何をしようとに此処へ来たんだ？まさか幼女に会わせる為だけでもあるまいし。

「僕はこれからコイツと一緒に竜舎の所まで行くんだが一緒に来てくれるかい」

「わかった。後エルは眠ったばかりだからお祖父ちゃんは会っちゃ駄目」

「そうかそれは残念だが仕方ないね。じゃあ行こうか」

なるほど幼女を迎えに来たのですね、だが何の為だかさっぱり分かん。フルフルと幼女この組み合わせに一体何の秘密が……と悩んでいると幼女が俺の上に乗っかって来た。

「行け、シロシロ」

行けと言われたら行きますけど何で乗った？フルフルの上になんで乗った？

いや幼女のお尻の感触は布越しでも最高に柔らかくて不満はないんだが。撫でられてる時より背徳度が増えて、俺の寿命が罪悪感がマッハなんですけど。後シロシロが俺の新しい名前に追加された。

「ボクはまだ小さいから竜舎まで歩くのは疲れるから。だから乗らせてもらった」

その時俺に電流走る――！この幼女俺の心を読みとりやがった。

「シロシロは気持ちが悪く表れづらいだけで隠してないから分かりやす

いんだよ」

「リルは僕よりも頭が良いからね。本当に自慢のかわいい孫だよ。ところでリル。僕もコイツにリフル・シウテクトリって名付けたんだけどコイツはどっちが良いって思ってるのかな？」

おじさんよりは幼女がつけた名前のほうがいいです。つまりシロシロのほうに俺は一票。

「シロシロはシロシロの方が良いんだって」

「……そうか。でもシロシロだけじゃ味気ないから僕の考えた名前を後ろに引っ付けておこうか」

「そうね。でもボクが呼ぶときはシロシロだから」

「そうだね。でも僕はリフルって呼ぶことにするよ」

……ルアールさん意外とその名前に自信あったのね。ネーミングセンスないとかとりあえずとか言っておきながら未練たつぷりじゃないか。孫と張り合うなよ。ちなみにこの間リルちゃんは俺の上につと乗っています。

俺の名前に関する孫と祖父の争いがヒートアップしてきたので、喧嘩はやめましようという意味を込めてちよっと一鳴きしてみる。ギヤオギヤオ。

「シロシロがやめろって言うんならボクはやめるよ。シロシロはこっちの方が良いって言うてくれてるし」

「うん？そんな事を今言ったのかい？なら仕方ない。その内どっちの名前が本当に良いか分かるだろうしね」

最後までルアールさんはこだわるなおとなしく負けを認めろ。俺は幼女の味方だ。

「では改めて皆で竜舎まで出発だ。行こうかりル」
「行くぞシロシロ。安全運転で頼む」

幼女の癖に安全運転で頼むとか本当に四歳なのか？まあいい今度は了解の意味を込めて一鳴きすると、おれは言われた通り安全運転でリルちゃんを乗せながらルアルさんの後を付いて行った。

で、竜舎のある農場にまで到着しました。リルちゃんもやはり四歳なので上に乗るのに慣れた後は、上で意味も無く幼女仁王立ちしてました。此処に来るまでの間で俺は何故背中には目が無いんだと自問自答していた。なぜならこの時リルちゃんは赤と白の可愛いスカートをはいてたからです。

背中に目がないフルフルの生態に俺が後悔していると幼女が背中から降りた。降りる時に風の抵抗で捲くれ上がったスカートから白い太もが見えたが、その奥は見えなかった……まさか幼女による絶対領域である。できるな。

「じゃあ少し説明するね、この農場にあるものは大概自由にしている。ただしアプトノスや人間は食べてはいけない。まあ君なら大体分かるだろうけど。詳しい事はリルに聞いてくれれば分かるよ」
「困った時はボクに聞いてね、でもエルがいるときは静かにしてね」

ルアルさんのは説明になるのか？後リルちゃんエルってだーれ？
「エルはボクの弟でまだ一歳だから、ボクも時々お世話してあげているんだよ」

なるほど納得、てかりルちゃんは気持ち察するレベルを超えてる気がするんだが。

「気にしない気にしない」

そうか、じゃあ気にしないわ。

「じゃあ僕は沼地の毒の研究をしておくから、リルはリフルの相手をしておいてくれないか」

「分かった。シロシロの相手ならボクはしておくよ」

まだ張り合ってるよこの二人、ルアールさんも譲れよ。

「お祖父ちゃんとボクは似てるからね。こうなると長くなるんだよ」
さよけ。分かり合っているなら別にいいよ。

俺とリルちゃんは農場に残り、毒の研究をし戻っていくルアールさん見送った。

ところでルアールさんは何をしたくてリルちゃんと俺を会わせただろう？

「お祖父ちゃんの事だから、君とボクを仲良くさせたいんじゃない？」

マジで！？

「たぶんね」

十三話　よう！　よう（後書き）

天才よう！　よ参上！　やったね！これで会話ができるよ。

アイルーを介さなくても会話できるのはこのよう！　よの他に数人出す予定。

裏設定

リルちゃんがちょっと異端視された為、ルアールさん一家はこの村に来た。ミナさんはルアールさんの生徒。

十四話　ベットの下の輪郭のある平面な物体

ルアールさんも居なくなつたので、幼女と二人きりでキャツキャウフフのイチャラブ状態！

になると思つたんだけどな。リルちゃんは職務に忠実なしっかり者であつたようだ。ルアールさんが適当に終わらせたこの村に居る上での守るべきルールの説明をきちんと補足してくれるようです。という訳で始まりました、リルちゃんのこの村での過ごし方講座守らないと村八分D A Z O の時間です。

「この村に居る為のルールをシロシロに教えてあげる」
よしい、シロシロは準備万全だぜ！

- 1・アプトノスは村の商品であり食料だから食べちゃ駄目。
- 2・農場にある物は大体自由にしていいが、畑を荒らしたり魚を乱獲したり木を勝手に切ったりは駄目。
- 3・村の中で無闇に吼えてはいけない、プレスも吐いてはいけない。人間も食べちゃ駄目。
- 4・村の建造物を勝手に壊してはいけない、建て替え、リフォームも駄目。
- 5・困つた時はボクかお祖父ちゃんを呼びなさい。
- 6・農場の隅にお祖父ちゃんの畑は本当に自由にいいい。

「これくらい守れば、きっと大丈夫」
了解だ！後この村から外に出たい時はどうすればいいの？
「普通に飛べばいいんじゃない？門から出たいならボクが付いていく」

……感動した。ここまでリルちゃんが俺との会話がスムーズにできるなんて。

アイルーに通訳してもらうのもいいけど、やっぱり普通に会話できる方がいいに決まってる。

でもこの世界に産まれたならアイルーの可愛さを味あわなきゃ損だ！二足歩行のぬこをもふもふするんだ！
てな訳で。

Q・アイルーはどこ？

A・シロシロが怖くて逃げた

……泣いた。

ぬこが逃げた事その原因が自分の所為だと告げられた事で、俺は給食のお気に入りのデザートをこぼしたあの時、前世の小学二年のあの日に匹敵するほどの悲しみを味わった。

とぐろを巻いて自らの心の内でその悲しみに浸りぬこと何度も心で呟いていたが、リルちゃんに背中を慰めるように撫でられたり、ボクがいるよと励まされたりしてそのおかげで立ち直ることができた。

相変わらず性能の高い幼女だな……世界中の飲み屋に出没する伝説の妖怪？励ましおっさん並の慰め励ましスキルの高さだった。思わずおやつさんと抱きついてしまったのは仕方ない。しかも抱きついた事まで許してくれた何て心の広い幼女だ。思わず今度は両翼を揃えて拝んだら「ボクを拝んだって意味がないよ自分を信じたほうがいい」と言われた。なにこの幼女……ステキ／／／

リルちゃんに慰められ（一応言っておこう性的な意味ではない）現世へ戻る事ができたので、今はリルちゃんによる農場紹介の時間に

入っている。先に行くリルちゃんの後をてくてく付いて行く。のんびり歩いていくとリルちゃんが農場の奥にある水場の近くで止まった。

「ここは池。元から在った水場を広げた後、川から水を引いたりして出来た所。奥の方はかなり深くて地下水脈と繋がってるかも。水浴びしてもいいけど魚を取ったりするから電撃は禁止。糞尿で汚すのも駄目」

しないよ！自分は紳士だからそこら辺に撒き散らさないよ！あと女の子は糞尿とか言うのに恥じらい持ちなさい！

「分かってるけど一応。あとこれが一番短い、そして恥じらいなら持つてるから大丈夫」

あの普通に糞尿と何のためらいもなく言った姿からは、恥じらいなんて全く感じられなかったんだが。

いったいお前の何処に恥じらいがあるのやらと思っていると、リルちゃんはおもむろに上着に手をかけるとそのまま脱いだ。そしてさも当たり前と言った顔のままスカートも脱いだ。その結果リルちゃんは下着姿になった。

………??? 一体何事？下着姿になったリルちゃんの姿は幼女特有のやわらかくてすべすべしてそうな白い肌で下着は色気のないものだけに明らかに増えた肌の露出で背徳度上昇して少しの下着のずれが謎の色気で悟りを開いた人でもロリコンに堕ちそうな魅力でロリでつるぺた警察が来いで病院が病気で本当に一体何事！？

前世どこから来世まで含めてもここまで混乱する事はないくらいに混乱している俺を尻目に、リルちゃんは次の行動へと移った。具体的には下着のずれを調整しギリギリにして、見えそうで見えない部分を自分の腕で隠し、周知に耐え切れないという表情のまま上目遣いでこちらを見つめ。本当に恥ずかしそうに「………そんなに見ない

でください、恥ずかしいです」と言った。

呆気にとられる俺を放置し暫くそのポーズをした後リルちゃんは、ずらした下着を整えた後脱いだテキパキと服を着ていった。全て着終わったリルちゃんは心なしかドヤ顔風の表情で。

「これがボクの恥じらいだよ」

と宣った。

…… っちつがあああああうー！それは恥じらいなんかじゃない！思わずペドに堕ちそうになったけど、それは絶対に完全に完璧100%究極的に乙女の恥じらいなんかではない！断言できる。

「でも書物にはこれが恥じらいでこれに男性は興奮するって記されてた。もちろん大人の女性がやれば、だけど」

それ書物って言うてるけど完全にエロ本だよ！

「違うよ。お祖父ちゃんの昔の日記」

それは予想外だよ！ルアールさんあんたなんて物を残してるんだよ！そんなもの読ませるな！

「たぶんお祖父ちゃんにも予想外でまだ気付いてない。特殊インクと暗号で書かれていたから忘れてるかも」

無駄に高度な黒歴史をのこしてるなルアールさんは！そしてそんなもの解読するな！

「ボクはお祖父ちゃんの血を引いて好奇心が強いからね」

…… 疲れた。この世界に生まれて一番疲れた。パ○ラッシュなんだかとも眠いんだって言ったネ□君の気持ちの二分の一、今なら分かる気がする疲れて疲れて体から力が抜けてゆく気がする。リルちゃんが次のところへ行こうとか言ってるけども面白いよ。説明されなくても大体分かるから。

「なら仕方ない。ここから見える範囲だけでも説明する。あつちに在る柵に囲まれた部分が畑。食料やこの村の特産品になりそうな数種類の植物を試験的に育ててる場所だから荒らしちゃ駄目。薬草や薬の材料になるものはお祖父ちゃんの畑で育てている。あそこの建物が竜舎。アプトノスが居るから仲良くするように、もちろん食べちゃ駄目。それから、ここらへんの草はアプトノスの餌にもなるから焼き払っちゃ駄目。シロシロが寝るところは竜舎の一番奥だけど、ボクは君の寝たいところで寝てもいいと思う」

以上。と最後に言つて彼女は説明を終えた。

ほいなー。と俺は心の中で返事をしたこれで通じるなんて便利だな。

この後はリルちゃんと一緒にのんびりしときたいな

「それはいいね。ついでに今更だけどちゃん付けはやめてね」

ありや？ちゃん付けは嫌い？可愛いのに。

「キミとボクとは1歳位しか変わらないからだよ」

だから何故分かる！？

リルと二人きりでキャツキャウフフのイチャラブ状態！ではなく二人で草原に転がってお昼寝タイム。

俺はリルの枕代わりになってます。フルフル特有の冷たくしつとり柔らかの独特の触り心地が気持ち良いんだってさ。つまり人間……じゃなくて生体アイスノンだ。幼女と一緒にお昼寝するだけの簡単なお仕事です。でも冬場になったらお払い箱になってしまうかもしれないな。

……いやフルフルと言えば電気だ。何とか頑張れば電気カイロの真似事ができるかも知れん。流石電気之力、現代社会に欠かせないだけあって活用法がいろいろあって便利だな。「きた！」「発電機きた！」「メイン電力きた！」「これで勝つる！」と賞賛される日も近

いかな。

「それはない」

によわっ！？いきなり俺の思考まで読み取るな！変な声出たじゃないか。

「途中から気持ちがいっつきり外に出た。それにしても突然の出来事にも鳴かずに、心の声だけのリアクションだなんて器用だねシロシロは」

なにそれ褒めてるの？照れるね。

「賢いのに馬鹿だねシロシロは」

リルちゃん非道い！

「ちゃん付けは禁止」

ぺしつと小さな手で叩かれた。我々の業界ではご褒美です。

いや冗談だけだね自分ではMではなくSだと思っているから。責められて喜ぶとかないわ。

「Sと自称する人ほど本当はMに近いらしいよ」

だからなんで四歳がそういうことを知ってるの！？耳年増にも程があるよ。

「好奇心強いから」

好奇心では済まされない事もあるんだよ。で今度は一体何処から？

「お父さんの本棚の上の板の中にあつた本」

父親エ……

こんなくだらなくて楽しくなんて事はない普通の会話を続ける。

俺とリルは寝転がって太陽の光と爽やかな風を浴びながらそれを楽しんだ。

頬を撫でるような柔らかい風、さらさらと揺れる草の音、緩やかに

暖めてくれる陽の光に囲まれてゆったりと話し続けていたら、いつの間にかリルは眠っていた。コイツは本当に可愛いが寝てる時は更に可愛いな、年相応と言うか素の顔と言うかとにかく可愛いな。口もふにやっとしてるし起きてる時はキリッとしてるんだよ四歳の少女が。まあそれはそれでいいんだけどね。

こんなふにやけた可愛い寝顔見るとなんだか眠たくなるよね。見ていたいんだけど眠たくなる魔性の寝顔だねこれは。まあこの環境で寝ないほうがおかしいから俺もおやすみ。

十四話　ベットの下の輪郭のある平面な物体（後書き）

謎のタイトルの正体とは。

エロ本ですか？いいえ、ケフィアです。

.....

まあエロ本の事なんですけどね。ケフィアでもプルケでもありません。

と言う訳で引き続き幼女回です。幼女の会話が長くて、予定のヤツまで入れたら長くなってしまうので寝オチで切りました。違和感あるよね。

勢いで書いてある本作ですが幼女の所だけは異常に筆が乗る。まさか俺はロリコンだったのか……そんな自分に愕然としたこの話でし
たまる。

……最初はツキカちゃん押しだったんだけどなー。

P S ・ M H で闘技場で捕獲したモンスター同士を闘わせることができたのはFでしたっけ？

十五話　神はいた

スヤスヤと穏やかな眠り、その中で俺は夢を見ていた。

扉を開けていくだけの可笑しな夢。扉を開ければまた扉が現れていくだけの夢。

とげとげした扉、白っぽい扉、虫みれの扉、色々な扉を俺はただただ開けていく。

今もまた扉を開けて

「いらつしゃい」

「のわっ！？」

神がいた。

「久し振りだね」

「確かに久し振りだが、何で俺の夢に出てきた！」

「だって君優しくしてくれて願ったじゃないか。アドバイスと雑談の為に来て上げたよ」

「雑談は余計だと思っただが……」

アドバイスも今更言われてもな。この五年間大変だったんだぞ。どんどん強い奴に襲われるし。

ちなみに俺の今の姿はフルフルではなくハガ○ンの真理みたいにまっしろけになってる。

「あのモンスター達は君のためにこの世界に用意した因子から産まれた試験だ」

「なるほどな。だから段階的に強さが上がっていったのか」

「キノコモスは君が肉ばかり食べていたから送ったものだけだね。ちなみに因子はあと少しだけ残っているから注意してね」

神の態度から察するにこの試練も優しさの一つなのかも知れんな。神様ってそういうところあるし。

「正解だね。ただ単に与えるだけじゃそれは甘さになってしまふ。君が求めたのは甘さではなく優しさだからね。甘くはならないよ、優しすぎるかもしれないけど」

「そこら辺は俺と考えが似ているな。甘いだけはいけないものな、俺は甘党だが」

口にだして言うプリンとか食べたくなってきた。この世界にあるのかな？所々の発達がおかしいからあるだろうとは思いたい。ケーキとかはあるみたいだしそっちでも良いけどな。

「プリンはあるよ。それはともかく、これからのアドバイスを少しするよ」

「是非、お願いします」

「君の慎重過ぎる所h s好みだよ。じゃあ、アドバイスだ」

1・早く人になりたいなら、人を喰え。そうしたら人に成ることが出来る。

2・その村はいい所だ。ただし気をつけておいたほうが良いことがある。

3・因子は君を求めてくる。ヤバイ奴が来たなら君なら分かるだろう？

4・君はいずれ人を殺す。そして君は人を救う。

「これらはアドバイスであり、予言である。そしてこれを伝えた今、可能性となった」

「……最初と最後だけ重いんですが、どうしたらいいですか？」

「全ては君次第だ。頑張りなさい。今はゆっくり眠るがいい」
「いや待って、雑談は？聞きたいことがあ」

言葉の途中で俺の体は神の翼によって起こされた風で吹き散らされた。

……む、人の気配。起きなければ。

目を覚ますと。あの広場にいた草とアプノトスの香りがする、生き物が好きそうな純朴そうな村娘Aさんがいた。Aさん！Aさんじゃないか！

「はい、なんででしょう」
ブルータス、お前もか？

「あれ？今、誰かに話しかけられたような気がしたんですけど。……気のせいですね」

少し首を傾げた後、Aさんはこちらに近づいて来てしゃがんで俺と顔の高さを合わせると。「こんにちは！わたしの名前はエリン・マルト。エリンって覚えてね」と自分のペットに話しかけるような気軽さで俺に話しかけてきた。おお、俺の事をそこら辺の猫や犬扱いとはやるな。名前も教えてくれてるがこの人はリルと違ってなんとなくでやっているんだろう。

「リルちゃんもぐっすり眠っている。キミが守っていてくれたのかなあ？」

エリンちゃんは俺の頭を撫でながらよしよしと褒めてくれた。思わずほわーんと和む。

「こーんなに大人しいのに追い出そうとするなんて。みんなはもう

ちょっと生き物に触れ合った方がいいと思うよね……。まあ大剣を振り回した時は驚いちゃったけど、その後キミはじっとしてたもんね」

うりうりと彼女は俺の頭を更に撫でまくる。

いかん、なんか涙が出そう。久し振りにまともに人の優しさに触れた気がするな、ミナさんは優しさじゃ無くして警戒していただけだし、ツキカちゃんは何も考えて居ないし、ルアールさんとリルは何考えているかよく分からないし、こんなストレートな優しさをいきなり向けられるとは。…かなり感激だ。

「……それにこの何とも言えない肌触り。ぶよぶよとした独特のやわらかい感触。アプトノス達のザラザラした鱗やコテツの柔らかい毛皮も良いけど、このフルフル特有と言われる柔らかさも良いなあ」

ほほう、そこまで褒めてくれるのか。生き物に物怖じしない女の子はとことん平気だよね。

「本当に柔らかくて……美味しそう。アプトノス達も美味しいしかっただけ。この子は食べたらどんな味がするんだろうな！。食べちゃいけないって言われてるけど気になるなあ。……毒でもあるのかなあ、でもこんなに美味しそうな生き物が毒な訳ないしなあ。アイルー達は自分で僕達は美味しくないとニヤーって言っていたけど、何時か野生のアイルーを捕まえてみようかなあ」

……………

WARNING！ WARNING！総員第一種警戒警報発令！

この娘色んなの意味で生き物大好きな人だった！フルフル見て美味しそうとか、何なのこの子？超怖い。しかもアイルーたんまで喰らおうと言うのか。現在フルフルの俺でも超えてはならない一線の一

つにしている事だぞ。野生のアイルーがこの娘の前に出ない事を祈るう、猫鍋（和む）じゃなくてアイルー鍋（本格派）なんて俺は見たくない。

「ねえ君い。少し位齧つてもいいかなあ？少しだけでいいんだ、味見させてくれないかなあ？」

いやあああああああ！！！！！！喰われるうううううう！！
彼女は口を軽く開け綺麗な歯を見せてハムツと俺の皮膚に噛み付いた。……痛くない。

「はふあいなあ。ふえもいいあひはふる」

グニグニと弾力を確かめるように何回も噛まれる。そして味を確かめるように噛んだままペロペロと舐められた。ってペロペロ舐めるなガジガジ噛むな気持ち悪い！

女の子に噛まれて舐められるのは普通なら嬉しいんだけど、この人はもし噛み千切れたら本当に噛み千切るだろうってのが伝わってくるからなんかゾワゾワするんだよ！

てか最初の優しげな雰囲気がなくなって妖艶な捕食者って感じになつておられる！

誰か助けてえええええ！ヘルプミー！

「……うにゅ」

リルの声が聞こえたたん。エリン様は瞬時に捕食者の雰囲気をお隠しになり、最初の優しげな雰囲気にお戻りになられた。そして寝ているリルの横に座るとリルちゃんの頭を手をお当てになった。

……助かった。あのまま行けば口の中まで探られていそうだった、フルフルノタンって美味しいのかなあとか何とかいいながら口に手

を突っ込んで奥歯ガタガタ鳴らされていたかも。

―ボクから見てシロシロには足りないものがある。危機感だよ―
いや、ぶっちゃけあの状態の人になんか勝てる気がしないんだよね。
む？今誰かいたような？

「ふう、それにしても今日は良い天気ですね」

エリン様。何かごまかすような喋り方をしないで下さい。エリン様は
一回モードが切れた所為なのか、その後はしばしのんびりタイムに
入り、皆無言で風を浴びながらぐでーとしていた。

時が経ち「そろそろ仕事をしなきゃ」と言ってエリン様は竜舎のほ
うに歩いていった。最後に残した「また会おうね」の言葉が俺の心
に刻まれた。

「行つたね」

起きたのかリル。おはよー。

「おはよう。シロシロ感謝してね」

何に？むしろずっと枕やっていた俺を褒めてもらいたいんだが。

「エリンさんから助けてあげた」

……マジで！？その頃から起きてたの？全然気付かなかったんだけ
ど。リルはどうなってるの？

「起きてない。眠りながらも周りの状況は把握可能」

睡眠学習って奴か。

「違う」

よし、リルも起きたしそろそろルアールさんの所にリルを届けにい
かなきゃな。夜が近づいて寒くなってきたから幼女には辛いだろう。
ここら辺は夜冷え込みやすいからな。

さぁルアールさんの所へ送りとどけてやろう。合体だ！

「パイルダーオン」

おおノリがいいなリルよ。ではルアール邸目掛けて発進だ。

「シロシロ、発進」

道案内は任せた！

「任された」

とルアール邸に歩き始めて約一分後。

俺が吹き飛ばしミナさんに眠らされたマッスルな鍛冶親父が現れた！

どうする？ コマンド

1・ガンガンいろいろやろうぜ

2・踊る大捜査○ The movie 交渉人 リル・ディレア
ドレ

3・会話

4・ペルソナ

俺としては2がお勧め。

「3」

「ああん？」

行き成りああん？とかリルだったからいいものを、他の少女だった
ら泣いてるぞ。

「何しに來たのゴルデお爺ちゃん？」

「……いや、まあソイツに確認したい事があつてだな。まあ危険性
はリル嬢が乗っているならないんだろうからいいんだが」

「確認したい事って？」

「ああそうだったそうだった。確か言葉が分かるんだったよなお前
さんは。なら二つ聞く。あの大剣はなんだ？そしてお前さん目が見
えているな？あの時、僕は確かに風下から音を立てずにしたはずな
んだが、視力がないはずのフルフルであるお前さんは、確かに影を

見てから反応していた。つまりお前さんは目が見えている違うか？」
えっと大剣は巢の近く掘り当てたもので、目は確かに見えてるけどそれは。

「大剣は巢の近くから。目は見えてるボクが先に確認した」

「ありゃ、流石リル嬢だな」

まいったまいったと爆笑するゴルデ老。見たとおりの豪快な方である。つうかどいてくれんか？リルをお家に連れて行かなきゃならぬのだが。

「ゴルデお爺ちゃんボクは帰らなきゃいけないから、もう行ってもいい？」

「おおそうだったのか、そうだな寒くなるから速く帰らにゃいけんな。いやあ時間を取らせてすまんかったな、代わりに必要なものがあつたら何時か作ってやるからそれで勘弁してくれ」

「分かった」

じゃあ僕は工房に戻るんでと言ってゴルデ老は去って行った。

嵐みたいな人だな。まああんなのが五人もいたら大変だけどな。

「そんなにいたら困るね」

そうだな、二宮ゴルデとかいたら怖いしな。まあ今度こそ帰るか。では改めてルアールさんの家へ発進！

「発進」

ルアールさんの家に辿り着くまでにエリンさんの事でさんざんいじられたのは二人だけの秘密だ。

十五話　神はいた（後書き）

活動報告でも書きましたがPV50万を突破しました！

他の人の所でPVなんちゃらと書いてあったので、アクセス解析をどんな感じかなーと見たら超えていたよ！やったね！

これも一重に読者の皆様の御蔭です。これからも少しずつ精進していきますのでよろしくお願いします。

感想は絶賛募集中です。感想で作者のテンションが上がります。

十六話　フロなんとか

村に到着してから五日が経過した。

その間にリルと遊んだり、ツキカちゃんと遊んだり、ミナさんと遊んだり、エリン様に襲撃されたり、ハンターにいちやもんつけられたり、ルアルさんの実験に付き合わされたり、ゴルデ老の仕事に協力したり、色々な事があつたがなかなか充実した五日間だった。

子供たちとはリルとエリン様とツキカちゃんのおかげで仲良くなれたんだが、やはり大人達はモンスターの脅威をその目で見てきたという事実があるのでなかなか打ち解ける事ができなかった。残念。

大人達に疑惑、不審の視線浴びせられて子供達に純粹なきらきらした視線を浴びせられていると、なんだかロリコンやショタコンの気持ちに分かる気がする。あのきらきらとした穢れを知らない無垢な瞳。ころころと変わり、そのどれも輝いている表情。柔らかくふわふわとした肌。やんちゃに駆け回るあの姿。まったく、小学生は最高だぜ！と言い放つたあのお方の気持ちは今なら分かる。

まあ俺がロリコンやショタコンに目覚めかけているのは良いとして、この村はなかなか良い所だ。

さつきも言つたように大人の中に俺に不信感を持つ人はいるが、子供達やこの村での偉い人ポジションの人達が俺を信頼してくれている。つまり不信感を持っている人達は権力と情で挟み撃ちの形になっているのだ。その状態であれば無闇に俺に手を出すような事はないだろう。

だからこの村でのんびりとできたわけなのだ。……エリン様と二人きりの時以外。

……しかし俺はこの居心地の良い村から出ようと思う。

理由は単純だ。ホームシックになったのだ！（キリッ

「格好つけて言うものじゃないよ」

リルちゃんよ。今のは俺の心の台詞だ。反応しなくていいよ。

「……エリンさんと二人つきりにしてあげようか？」

すいませんでした、リル様。エリン様だけのご勘弁を。

すぐさま土下座。幼女相手に小さなフルフルが伏せているという最近のこの村でよく見られる光景だ。

この村にあるていどなじんでいるのは一重にリルのおかげである。通訳が完璧にできるし。

「リルでいい」

分かったよ、リル。だからエリン様だけはお許してください。あの人はマジ怖い！

「分かった。それで村から出るのならミナお姉さんとお祖父ちゃんには言っておかなきゃね」

どうしてミナさんとルアールさんに？

「ミナお姉さんはこのエルブ村の村長で、お祖父ちゃんはシロシロに付いて行くから」

マジでミナさんは村長さんだったのか、現地調査するとかアクティブな村長だな。そして相変わらずのルアールさんだな。あまり荒らさないでほしいんだけどな！。

「大丈夫、今度は心配しないでいい」

で、ルアールさんとミナさんに巢に帰りたい旨を説明。と言っても実際は俺の上にいるリルが二人に向けて俺の言葉であると前置きしてから喋っているのだが。説明を聞いたミナさんからは「そう、巢に帰るのね。来なくなったら、またいらっしやい」とありがたいお

言葉を。ルアールさんからは「何？あの巣に行くのかい？なら僕もついて行かせてもらおうかな。沼地の毒について確かめたい事もあるからね。それから君の巣も詳しく調べたいしね」と付いてくる事を宣言された。

俺一人なら普通に村から出てあばよとつつあんで済んだのだが、ルアールさんが付いてくるという事で何名かお付が必要という事になり、とりあえず門の前で待機する事に。

でも別に俺一人だけで出発してもいいんじゃないかと思うんだが。巢で合流すればいいだけなのになんでわざわざ道中も一緒に行かなくてはいけないんだろう？分からないな。

と言うわけで背中のリルは分かるかい。

「大人の事情」

もつと詳しく。

「シロシロが逃げて被害出したらこの責任。先に行かれて巢への道を塞がれたら調査、討伐共に面倒。一緒に行く事でシロシロと仲良くさせるなど」

なるほど、色々複雑なのな。ありがとうリルえもん。

「どういたしましてシロ太君」

門の前でグダグダとリルと会話していると、ルアールさんのお付のメンバーが決まり準備が完了したようです。ではメンバー発表！一人目！セージ・ディレアドレさん。ルアールさんの息子で学者兼ハンター。今回の役割は父親の研究のサポートしつつの護衛。武器は学者としての手伝いもあるため片手剣。

二人目！ジン・フジミヤさん。ツキカちゃんのお父さんでハンター。今回の役割は俺への抑止力兼遊撃の護衛。今回の武器は銀色の太刀です。……もしかしてあの太刀は銀レウスの奴ですか、確か楓とかそんな名前の強い太刀。……強いハンターだとは思っていたけどそ

んなの持っていたんですね。怖い。

三人目！ツキカちゃん。お父さんがいるから付いてくるらしい。お父さん大好きにも程があるだろうと思います！武器と装備は前回と変わらずデスパラとザザミシリーズ。

四人目！大剣ハンター。名前はフロなんとかさん。特徴なし！

そろったので出発だ！いざ行かんマイホームへ！

「その前に上に乗せているものを降ろさないといけないんじゃないかな？」

だが、セージさんが話しかけてきた。上に乗せてるのってリルの事か？

「お父さんの方よりボクが行った方が役に立つ。だからお父さんは家で二人の世話をしてあげて」

「いや、外は危険だ。いくらリルでも今回は言う事を聞いてもらう」

「お祖父ちゃんもどっちが役に立つって聞いたらボクって言ったよ」

「……ぐつ。それでも駄目だ。パパはこれでも戦えるけどリルは無理だろう？」

その後も白熱した争いがあったが、リルちゃんの「お父さんの本棚の上の板の中。床板の下ドアから数えて6枚目壁際。机の引き出し一番下」などの発言によりセージさんは灰になった。

当たりまえだが大剣ハンターも子供を連れて行くことに抗議していたが、リルと目をあわせて数秒後には「分かった」と承諾してくれた。その後何を聞かれてもうつろな目で「分かった」としか返事をしなくなってしまったが、たぶんリルは関係ないだろう。

ちなみにジンさんとツキカちゃんとルアルルさんは普通に認めていた。それでいいのか？

ルアルルさんとジンさんは何か考えがあるのだろうけど、ツキカちゃんは何も考えていない筈だ。

てな訳で。見送りに来てくれた子供達に翼を振ってお別れの挨拶をした後、俺、リル、ルアルさん、ツキカちゃん、ジンさんの一団は出発しました。あ、大剣ハンター忘れてた。

と言う訳で道中小声でお話しようぜー。まず質問。なんで付いてきたん？

「面白そうだった。後はお母さんが最近寂しそうだったから」
親思いのいい娘だなリルはお母さんも喜んでいるだろうね。

「ボクがしつかりすぎた所為でもう2年9ヶ月25日御無沙汰だったから」

……え？ちよつと待つてくれ。何が？

「S O X。若いのに溜め込むのは良くない。夫婦仲の悪化にも繋がる」

だから、恥じらい覚えろって言うてるだろ！何このよう！、よ！

「今夜の二人は熱く燃え上がる。今度は妹を期待する」

ところどころ年寄りとかおっさん臭いなお前は！そして今更だが、お前のひそひそ声は人間の可聴域を外れてるじゃねえか。普通に小さくするだけでいいんだよ！

「それだとジンさんにはれる。両親にもプライバシーがあるから念のため」

俺はいいのか。オイ。みんなに話すかもしれんぞ？

「話せないでしょ。それに信じている」

ツ！？……その台詞を素で言い切るとは本当に恥じらいがないなお前は。

こんな感じに会話していたら到着しました。途中ランポスの小規模な群れがいたり、イーオスがいたり、イヤンクックがいたりしたが主にジンさんに撃滅されたり追い払われたりしたが割愛する。そして山を少し上った所にあるここが！俺の家への入り口ver1沼地の外への直通路だ！

徒歩一時間半位で着く村からのアクセスが便利な所だ。ようこそ我が家へ！歓迎しよう、盛大にね！

巢への通路に入ったのだが、いかせん突貫工事で作り出した為に所々水が染み出している所がある。これは後でしっかり手入れをせねばならないようだな。

どうでもいいけどこの水が落ちるぴちゅんっていう音を聞くとぴちゅん君を思い出す。確かエアコンか冷蔵庫のマスコットキャラクターだったような気がする。そういえばぴちゅん君のキーホルダーを持っていたような。……いや、あれは似ている別の奴だったかな？水滴をモチーフにしたキャラクターってやたら多いんだよな、紛らわしいったらありやしない。

「冷たい」

おっとぴちゅん君が当たったか、ごめんなリル少し考え事していた。「気にするな、運んで貰っている身だ」

相変わらず無駄に台詞が男前だな。実際はうだあっとうつ伏せなのに。

暗い道の向こうは俺の巢でした。（千と千〇の〇隠しのキャッチコピー風）

六日振りに帰ることが出来た愛しのマイホームだが、荒れている様子は特に無く巢の中に不法侵入した生き物はいない様だ。……だが六日も空けていたからにはやらねばならない事がある。

リル伝えてくれ俺の思いを。

「シロシロが巢の掃除をしたいんだって」

そうだ！俺は今、猛烈に掃除がしたいんだあああああ！

掃除開始！まず埃などを電撃で焼く。次に水路に溜まったゴミを取り除く。静電気を利用し巣の中を歩いて小さなゴミや焼いた埃を体に吸着させる。後はそれをまとめてゴミ捨て場へポイ！掃除終了！洞窟内だから一ヶ月ほど掃除しなくてもぜんぜん汚れたり埃が溜まったりしないんだが、元日本人としては六日もあけていたら流石に掃除したくなる。折角綺麗に作った巣だしね。

掃除も終えたから寝室でぐでつと休みたかったのだが、ルアールさんが巣を見て回りたいと言うのでリルとツキカちゃんと一緒についていく事にした。ジンさんと大剣さんは出入り口の見張り中。

「やっぱり何度見てもきれいだねー」

「シロシロもなかなかやる」

おお、リルに褒められた。まあ聞きかじりの経験で作ったものだが、この体だと感覚で傾斜とかがよくわかるから一々測量とかしなくてもできるのが便利なんだよ。

巣の中をぐるっと回って帰ってきました巣の中心部の大広間。ルアールさんは俺が持ち出し許可を出した奴を沢山持ってきてホクホク顔だ。俺の植物園にはこの沼地特有の希少な植物・キノコが多いらしい。ツキカちゃんも俺が作った小物とルアールさんが持てないモンスター素材を持っている。小物はミナさんから持ち帰って来いと言われたらしい。

改めて巣の調査が終わった所でルアールさんからの研究発表の時間です。

「やはり、この巣は素晴らしい。この資料も調べたい所だがその前にシウテクトリ沼地にある毒について分かった事を発表しよう」
そつえばなんかへんな毒があるって話だったね。

「分かったこととは？」

「毒の成分からみて植物系の毒である事、人体には有害であるがモンスターには成長促進効果がある事だね。対策だがこの巣で発見された苔にこの毒を中和する成分が含まれていた、この苔から作れる薬を飲めば二日程この毒の影響を無効化できる筈だ」

へー。なるほどね。つまり俺にはそこまで関係のない話ということだな。てか俺の巣は凄いな、そんなものまで生えていたのか。ここも随分人外魔境になってしまったな。

「シロシロ一匹で十分人外魔境」

いや俺は至って普通の小さなフルフルだよ。……なんでコイツ自分の事わかっていねーなって目で見る！やれやれまったくって感じのため息つくな！

「デイレアドレ先生。これからの予定は？」

「とりあえずは此処を拠点にして沼地の調査になるだろうね。まだ薬の数が足りないから、本格的な調査は明日からになるだろうね。植物系の毒という事だからハンター達だけでは厳しい所があるかもしれないしね。」

ルアールさんとジンさんは沼地の調査についての真面目な話をしてるようだ、それはいいんだが沼地の方から変な感じがする。この匂いはからすると今の沼地は厄介な事になっているかもしれない。

「シロシロからのお知らせ。今の沼地は危険。心当たりがあるからちょっと見てくるだつて」

……ついには思考の先読みまで仕掛けてきたか。まあその通りなんだが。降りろつて忠告する前に降りてるし、この巣の中にいれば安心だけどいざとなったら俺の寢床に隠れるよ。

「リフルなら大丈夫だと思うが危なくなったら巣に戻ってくるといい。ジンさんが何とかしてくれる」

「しーちゃん頑張ってねー」

「白いのよ気をつけろよ」

「ワカッタ」

……呼び名統一しろよお前ら。そして最後の人には突っ込まんぞ。
では行ってくる。

十六話〜フロなんとか〜（後書き）

次はモンスター同士の心温まる触れ合い。沼地に住む生き物たちの生命の神秘。

そんな感動できるような話になるかもしれません。

登場人物

大剣ハンター フロなんとかさん

赤毛のハンター。上位クラスでなかなか強い。特徴はあるのだが何故か思い出せない人物。影が薄いというより忘れられやすい人。

マイホーム

シロシロの巣。でかい蟻の巣。暇な時に拡張してたら大きくなった。現代にあつたら世界遺産に認定されそうな雰囲気のある場所。山の一角は使っている。

十七話　同属？嫌悪（前書き）

嫌な気分になったらブラウザバック！
人間ではありません。

この話に出て来る生物は

効果範囲は短い、ランゴスタやカンタロスなどは掠っただけで消し炭になるほどの威力がある。しかし今回の目的はそれじゃあないんだよ。

電撃を纏い、青い光を放って突き進む。周囲に漏れ出す力だけでランゴスタやカンタロス共を吹き飛ばし、蟲の海を割っていきこの洞窟の中央、特に密集している所に突っ込む。――!?」

と音にできない蟲共の叫びが聞こえるが関係ない。よし。この場所でもやりたかったんだ。体の内に秘めた電力を全開。今度は内に溜め込み纏うのではなく、電撃を外に放ち拡げる！

バチンッと言う空気を焼く音と共に洞窟中に広がる青く輝く電撃波。近くの蟲は黒焦げ、離れた蟲は原形を留めるも電気でビリビリ感電死。天井に引っ付いていたカンタロスや飛んでいたランゴスタ達がボロボロ落ちて地面に死骸うず高く積みあがっていく。

だが念には念を込めてもう一度。僅かに残っていた生き残りに止めの一撃としてバチンッと洞窟中に電撃波を放つ。青い光が辺りを照らして洞窟内に広がる蟲共の姿、黒く焦げたランゴスタや今だピクピクと動くカンタロスの脚、バラバラになった死骸を映し出す。

さて、洞窟内の掃除は完了した。しかしリル達に「ちょっと外を見てくる。なあに心配は要らない。すぐに戻ってくる」と言って飛び出てきてなんだけど、俺もうお家に帰りたい。いきなりの視界いっぱい、の蟲蟲パニックファンタジアで気が滅入りまくりだよ。何時もより二割り増しだよこりゃ。本当帰りたい。

でもな。今はリルが居るからな。アレだった場合この沼地は危険度が通常の百増しになるからな。ジンさんが強くても数が多いととても守りきれないからな。やっぱ、リルに危険が及ぶ可能性は0.001%でも排除しておきたいし、何より意外とツキカチやんに悪影響与えそうな奴の匂いもするし。

よし！ぐだぐた考えていても仕方ない！一先ずは外にでるか！

そして洞窟の外へ……

沼地にでてまず我が目に入っただのはそこら中でケルビ（♀）の上にケルビ（♂）が乗っかってたり、モス（♀）の上にモス（♂）が乗っかってたり、アプトノス（♀）の上にアプトノス（♂）が乗っかっていたりする光景です。動物園で子供に「パパー、あの動物さんたちは何してるのー？」と聞かれた父親が「なんだろうなー？ パパにも分からないなー。それよりライオンさんを見に行こうか。カツコいいぞー」と答えるような事を彼等はしている。……ストレートに彼等は何をしているかと言うとナニだ。交尾中だ。

つまりさっきから言っているアレとは繁殖期の事です。その中でも今日は仕込みの日ようですね。本当にありがとうございました！……もうこんな沼地嫌だ！ なんて一斉に始めるんだよ此処の生き物達は！ なんだよこの沼地は本当にお家に帰りたい！ 巢に籠っていて聞こえるんだよ色々と（性的な音が）！ 香って来るんだよ色々と（性的な匂いが）！

でも今回は進まねばならぬ。繁殖期だけあつて凶暴化するモンスターもいるし普段は奥に籠っている奴やこの時期だけ此処に来る奴もいるから進まねばならないのだ。

それに！ なんだか知らんがこの時期になると俺は良く襲われるんだよ！！

噂をすればなんとやら、遠くの方から地響きを鳴らしてモンスターの一团が迫ってきた。奴らの進路上に偶然居たイーオス、ゲネポス達や居た先程のナニしていた一团を踏み潰し蹴散らし俺の方に向けて進んでくる。

なんとこいつ等は俺の事を性的な目で見てきやがるのだ、忘れてる

かもしれないが俺はまだ五歳の幼い竜なんだぜ。竜の事情は分からんが流石に五歳から¥バツキューンノが普通とかはないだろう。これが美女美少女美幼女の群れだったらイインダケドナー。現実是非情で無情なものである。

しかもモンスター達と言ったようにこいつ等はフルフル、赤フルフルだけでなく、イヤンクック赤・青、ゲリヨス（亜種も）、グラビモスがいるんだぜ。クック×フルとかゲリヨ×フルの異種〇とか何事で誰得？

だが竜的にも魂的にも俺はまだ初めてを奪われたくないのだよ！最近神から人間に戻るって言われたばかりだから尚更にな！よって対象を撃滅する！

まだ離れている内にCHARGE！CHARGE！CHARGE！CHARGE！
！離れた所から一方的に攻撃し殲滅するこれが現代の戦の理を教えよう！何もできぬまま滅ぶがいい。

CHARGE完了！

さあ喰らうのだこれが我が竜生史上最大のBIGBANG！BREATH！ver連射式！

体内に溜め込んだ電気全てを特大の電撃プレスへと変えて前面のモンスター共にひたすら打ち込み続ける！ヒヤッハー！！逃げる奴はモンスターだ！逃げない奴はよく訓練されたモンスターだ！ホントこの沼地は地獄だぜ！フウハハハハハー！

流石に一発で死にはしないが連射する事で得られる足止め効果は大きい、しかも電撃プレスによる貫通仕様だから集団相手にはもってこいのこの攻撃。遠くから5WAYの電撃プレスの連射とかゲームで在ったら苦情が殺到するだろうが俺には関係ないね！

まき込まれたファンゴが吹き飛び。直撃したイヤンクックは動きが鈍り、そこに第二、第三撃と次々とプレスが直撃して甲殻が割れ、露出したピンクの肉が黒く焦げていきやがて息絶えていく。

しかし電撃プレスではイャンクックは倒せても、他の奴らにはほんの少しの足止め程度にしか効かない。なにせゲリヨス達はゴム質の皮での電撃耐性が有名だし、グラビモスはその厚い甲殻が問題。フルフル達に至っては言うまでもない。

だが、俺には切り札がある。通常フルフルが電撃を使う時、尻尾はアースの役割を果たす為地面に付けられる。もちろん例外もあるらしいが……。兎に角、俺は電撃を扱う時は敢えて尻尾を地面に付けないでいる。その理由とはこれだ。

口を大きく開いて「グラビーム発射ア！！！！ゴジュウウウウウ」と電撃とはまた違う音が辺りに響く。

俺は電撃を扱う時発生する余熱（確かジュール熱だったかな）を体内に留めることでグラビームの発射を可能にしたのだ。北斗○拳は隙を生じぬ二段構えと言う奴だ！フハハハハハハハハハハ！元はモンスター技なのだ。ヘヴィに出来てフルフルに出来ぬ道理などないわ。グラビームの獲得により俺は雷が効かない敵にもアドバンテージを得たのだ！

さっきの電撃プレスを余裕の態度で耐えていた奴等もこれにはビツクリ。ゲリヨスは原種、亜種共にグラビームの圧倒的な火力で翼や首、尻尾などが焼け落ちていき。フルフルも原種だけなら何度か撫でるように打ち込めばたちまち白い体表が赤黒く焼け爛れていく。

フハハハハ！良い！良い！凄く良い！圧倒的な火力で大群を粉碎するのはやはり気持ちが良い！！

今までに使った事がないほど電気量だったから、グラビームの照射時間もかなり長かった。体感だが後三十秒間照射し続けるだけのエネルギーがまだ残っている。

生き残ったグラビや赤フルも此処までの攻撃で流石に生殖本能よりも生存本能が上回ったのか、怯えている尻尾を巻いて逃げだそうとしている。しかし逃さん！腹が減っているんだ！

怯えろお！竦めえ！実力を出せぬままに死んでいけえ！

この小さいからだの利点の一つ敏捷性を活かし赤フルに肉薄。動けぬ赤フルの首をそのまま噛み千切る。

口の中の物をよく噛みながら逃げていくグラビをじいつと見つめる。口の中の物を飲み込んだ所で気分がいいので第三のプレスを使う。

シュンつと音が鳴り、目の部分にぽっかりとした穴を開けたグラビモスが逃げようと歩いていた状態からグラツつとその体を崩す。

これぞ我が第三のプレス、ガノレーザーだ。本来のガノトスの水流プレスと違い俺のは自らの唾液を飛ばしている。唾液の性質を変えられる俺が使っているので本家より厄介な業になっている。

……さて脅威は去ったし食事でもするか。

だがちょうどゲリヨスを食べている時にヤツが現われた。通常の二倍はあるピンクの巨体、その身に刻まれた歴戦の傷跡、名状しがたい形状をした頭頂部のトサカ、無駄に整った顔、硬い牙を持つ強靱な顎、引き締まった鋼の肉体、血を吸って黒光りする爪。しかし其のどれよりも目立つのは2m以上ある股間に聳え立つバベルの塔。無駄にイケメンなババコンガ。俺的固体名称イトウマコト。深い意味はない。

……やはりコイツも出て来たか。俺が一時撤退の可能性も視野に入れて置こうと考えているとイトウの下からショウグンギサミが現われヤツを急襲しようとした。って駄目だ！

思わずISTD！（いかん！ソイツに手を出すな！）の意味を込めて吼えた。

しかし俺の忠告は間に合わず。ショウグンは攻撃を避けられヤツの怪力でひっくり返された後爪でその体自主規制を　され、ヤツの■で隅から隅まで自主規制された後、美味しく頂かれた（食事的な意味で）

そう、ヤツは強いだけでなく非常に性欲が強く特にこの時期だとしても喰う（性的な意味で）ヤツなのだ。

三年前ヤツを最初に見たときはレイアが犠牲になっていた。セリフで表すと「やめてください、私には旦那が」「奥さんそんなこと言ってるけど此処はもう……」「やめて!」「ここまで来てやめられますかな」「アッ……」と言う感じの昼ドラ的寝取りシーンだった。実際には文字通りケモノの雄叫びを上げながら襲うババコンガに対してレイアが必死抵抗していたんだが力負けして。結局は喰われた（性的な意味で）。飛竜でもレイプ目に成る時は成るんだとその時学んだ。目から光が消えて虚ろな感じになっていく様は俺の数ある嫌な思い出の中でも上位に入る。なんだか気に喰わなかったのでその一年後戦ってみたのだが無駄に強く手傷を少し与えるだけが精一杯だった。

恐らくヤツも神の用意した因子とやらなんだろうがやっぱり気に喰わない、なんだかその行動全てが気に喰わないし、何よりコイツの存在はリルやツキカちゃんに対して害悪過ぎる。レイアを襲って人間を襲わない通りはないもんなあ。今回はなんだか何時になく戦意が高まるなあ!

ショウグンギザミに自主規制して、賢者タイムに入っていたババコンガに向けて電撃プレスを連射!だがヤツは数発喰らったあとダメージを感じさせない動きでその場から飛び退ってプレスの射線上から離れる。目標を見失った電撃プレスはショウグンギザミへとぶち当たりその身を焦がす。プレスを避けたババコンガは俺に向けて突っ込んできた。二足歩行で。見せん!その股間のもの!気持ち悪いんだよ!

突っ込んでくるヤツに対して一定の距離を保ちつつ俺の持ちうる遠距離攻撃手段の全てを用いる。電撃プレス、ガノレーザー、唾液ネット、グラビーム。アイツに対して接近は分が悪い、いくら小回り

が利いていても此方は飛竜の体。牙獣種であるヤツはその腕を器用に使い懐に入り込んでも反撃してくる。後、純粹に触れたくない。なんだろうこの気持ち。そのままネットで動きを止め距離をとり繰り返しブレスを放つ事を繰り返し続ける、最初の頃はネットをその豪腕で引き千切り、電撃や熱線、毒水流も意に介していなかったババコンガだが。熱線が少しづつ剛毛を焦がし、電撃がその動きを鈍らせ、わずかな傷口から入り込んだ毒がその体を蝕み。少しづつその体を弱らせていった。

思ったより手こずらなかつたのでスピードで上回ればこんなものか……と俺が油断していたその時。ババコンガは特有の攻撃手段で反撃してきた。響く爆音、辺りに広がる刺激臭。つまり放屁攻撃だ。放ったババコンガの顔がにやけている様に見えてなにかむかつく。

………よし！殺す！ただ殺すだけではない！肉片も残さん！
デデデデストロイ！

辺りの匂いを一掃するほどの咆哮。先程の音と比べ物にならない体をバラバラにするような高音があたりに響き。ババコンガは頭を抑えてうずくまる。口から発した音を収束させ、それをババコンガの首に向けて解き放った。ヒュンと音がしてババコンガの首に真紅の線が走っていく。違和感を覚えたババコンガが立ち上がるうとした時その頭がポロリと転げ落ちた。

いつもなら倒した敵は食べるんだけどこいつは別だ。死体に対して熱線を撃ち燃やす。酸を飛ばして溶かす。電撃でバラバラにする。なんだか見るだけで嫌悪感がするので徹底的に攻撃して灰にした。

……疲れた。これだけやればしばらく俺の巣の周辺には何も近づかないだろう。このババコンガがでてくるのは予想外だったが結果的には将来の危機を取り除く事に繋がっただろう。そして繰り返すがとても疲れた。巣に戻って寝よう。何があっても寝よう。

十七話　同属？嫌悪（後書き）

オルガロンとナズチは挟み込みませんでした。すみません。
一人称だと戦闘シーンが……戦闘シーンだけでもエセ三人称にすべ
きか……

後、このババコンガに対して嫌悪感を抱いたのには理由があります、
食べなかった事によるデメリットもあります。
そして次々回位に人化します。……人は食べませんよ。

十八話　後半シリアスですよ。たぶん（前書き）

前回もどった人の為の前回のあらすじ

巣の外に出る。沢山いた虫達を電撃で殲滅。

巣窟の外に出る。繁殖期のようだ。襲い来る有象無象を殲滅。

強いババコンガが現れた。遠距離でチマチマ削り殲滅。

疲れた。家に帰る。

十八話 後半シリウスですよ。たぶん

倒したモンスターは美味しい所だけ俺が頂きました。

でもそれは生態系とか周囲に対する威嚇とか考えての行動なんだからね。べ、べつにイーオス達の為に残してやった訳じゃないんだから。勘違いしないでよね！と脳内で無意味にツンデレー。むう精神不安定なお気持ちに成ってしまった。おのれデイクイドー！と脳内ツイツタで呟く。なんか頭がモアツ！と感じて支離滅裂で尻死滅な感じで。宇宙ヤバイ。と考えながらぼてぼて歩いているとようやくマイホームへ辿り着いた。

うばあー疲れたぜー。後、ソロモンよー私は帰った来たー。来たー。来たー（エコー

「お疲れ様。ソロモンって何？」

んあ？確か宇宙にあるビックなザムとか作っている巨大な金平糖。一回太陽の光でピカーツと融かされたー。後、そこで戦艦の群れがGP-02に核で沈められたりしているよん。俺が34番目に所属しているSRM72^{ソロモン72}って言うアイドルグループの事でもあるぞー。総選挙とかじゃんけん大会とかあるんだぜー。未来読んだりそもそも手が無かったりする所為でじゃんけん大会は最終的には大戦争になるらしいぞー。

「……大丈夫？」

大丈夫の元気ピンピンだぜー。でも大量に押し寄せる敵を殲滅せしめた俺は大変にお疲れちゃんなのだー。だから眠らせてくりやれ？

後、あの凄く大きいモノを持っていたヤツ相手にしてたから精神的にもきついんだ。自分の攻撃が相手に避けられず、尚且つ相手の攻撃が届かない絶妙な位置取りしながらの一時間に及ぶの自然界では稀に見る長期戦だったんだぜ。

「駄目」

そんな！？せめて横に寝転がらせてくれなイカ。

「お祖父ちゃんとジンさんからの質問が沢山あるけどそれを一つに
してあげる」

じゃあ、早くその質問とやらをしてくれなイカ。

「外の様子はどうだった？」

繁殖期でモンスターの数がフィーバー。しばらくは外出を控えると
吉。でも巢の周辺は薙ぎ払ったり、威嚇行動してきたから安全。

「……分かった。伝えておく」

ところでリルは大剣ハンターに何したの？

「……」

ん？どうしたリル？ うわ！なにするやめ

気付いたら寢床にいた。一体俺に何が起きたというのか……そこら
辺リルどうよ？

「なにも 問題は ない」

よう、よがアーカードの旦那の真似すんな。雰囲気は出てるけど
迫力が足りんよ。そういえばジンさんとルアルさんに伝えたのか。
俺が頑張った事も含めてだぞ。

「伝えた」

ならよし！ではこのまま駄弁りながら眠るので付き合ってくれ、本
当に疲れた。

寢床には眠りやすいようにゲリヨスのゴム質の皮やコンガ、ファン
ゴの毛皮などを重ねて敷いてある。俺はどれでも平気だが、リルが
幼女なので今はケルビの毛皮を一番上に行っている。今更の話になる
が俺は寝る時は何時もとぐる巻くように寝ているこれが一番楽な姿
勢だ。ちなみに骨格のゆがみが出ない様に左巻き、右巻きを交互に

して寝ている。

「どうしてそんなに疲れたの？」

「なんでだろうな……。……ある奴が現れて殺意の波動に目覚めてたからかなー？」

「外の様子をゆっくりでいいから大体教えて」

ゆっくりか。まあさっきも言ったようにモンスターが多かったなあ。ここを出てから順番に言うとなンゴスタの群れ、カンタロスの群れ、ケルビにモスにアプトノス。それからイヤンクック、ゲリヨス、フルフルそれらの亜種。ファンゴにイーオス、ドスイーオスとグラビモスにババコンガとシヨウグンギザミ。こんな感じかなー。やたら強いババコンガがさっき言っていたある奴。まあ殆ど退治したから心配なくていいぞ。それに俺の巣には殆どモンスターも寄り付かない、ここは雇付きだから特に安心だぞー。

ちよつと今日の戦場での戦果と俺の家のハイテクさについて自慢してみる。ドヤツ

するとリルは珍しく少し考え込んでから口を開いた。

「大丈夫？」

「……何が？」

「シロシロはフルフルなのにフルフル殺して大丈夫？モンスターなのにモンスター殺して大丈夫？殺さなくても済んだ生き物を殺して大丈夫？優しいのに生き物殺して大丈夫？」

眠気が消えた。心臓から送られる血液の鼓動が速くなり、意識が急に覚醒する。

それにとリルは珍しく少し言いよどむと

「今の自分がなくて大丈夫？」

その言葉に俺は、俺は、俺は、オレハ……

[illegible]

自分が分からない。

「それはどうでもいい。自分が分からないのは大抵の人がそう。シロシロの問題点は前の自分なら……。前の自分はこうだから……。前の自分に比べて今は……。前の自分はどうかだったのか……。とか考えてる事」

……そう考えて何が悪い。

「すこしなら別にいい。だがシロシロはそう考えすぎている。だから自分を見失う。自己なんて不確定。シロシロはシロシロそのままが今の貴竜。^{あなた}モンスターなのに人の心。人間性を失うのが怖くて人間に手を出せない。モンスターの様に振る舞いそれでも人間の理性をもつ。臆病で努力家、慎重に振舞っていても何処か抜けている一匹の飛竜それがシロシロ」

……だからそれが何？

この五年間必死に目を背けてきた事を突かれると流石の温厚派の俺でも怒るよ。首を持ち上げて俺の傍で俺を見つめるリルに対して敵意を向ける。仮にも飛竜に敵意を向けられているというのにリルは相変わらず微塵も揺らがないでそのまま話し続ける。

「敵意が弱い。シロシロは懐に入っただものに対して優しすぎる。それにシロシロは疲れすぎている」

それでも前の人の分として生きる為に……。

「そこが間違い。貴竜の前は死んだ。貴竜は貴方らしく生きるべき。モンスターらしく生きると言っている訳ではない。シロシロは考えの根元が捻じ曲がっている。人、モンスターではなく自分として考えろ」

…… 厳しいな。抛り所を求めるなという事か。

「違う。抛り所なら沢山ある。ボクがいる。お祖父ちゃんがいる。ジンさんがいる。ツキカお姉さん、ミナさん、ゴルデお爺ちゃん、村の子供達がいる。モンスターの友達もこれから作っていけばいい」
そうかな……

そうか……それでいいのか。……ん、また眠くなってきた。

「長く話してごめんなさいシロシロ」

いや……いいよ。こっちこそごめん。おやすみ。

「おやすみなさい」

十八話　後半シリアスですよ。たぶん（後書き）

シリアス？

前回忘れていたもの。

神の優しさ？

強い体（裏）

強い体というアバウトな願いの為。効果は様々な意味で強い体として適用された。その為生存競争的な意味で強い、他者から魅力的に見えるボディになっている。よってフルフルだけでなく他種族からも魅力的に見える。ただし外見がある程度近くないと適用されません。知性が高い生き物には通用しません。

悲しみの向こう側へと行ったババコンガ

歩く十八禁。行動も十八禁。なかなか強い。以上。

十九話　まれによくある。　　

　　（飛竜睡眠中）

……で

またですか？

「またです」

神様がまたもや夢の中で降臨。転生後、降臨したのは前回の夢の中が初めてだったのにここに来て連続とはな。……暇なのか？暇なんだな。暇ですね分かります。

「正確には暇を作ってきたんだよ。夢に出てくる事はこれからも稀によくあるから、特に気にしないでいいよ……さて君は自己を確立できたね。おめでとう」

リルや村の皆のおかげだけだな。

「他者がいなければ自己は意味が無いからね」

何故か神がニコツて笑った。神の○ーモ君スマイルは怖いな喰われそうな感じがする。ちなみにリルとのやり取りで俺は神曰く自己を確立したので、その所為かこの場でもフルフルの体だ。

「さてここからが大変だよ。本当に自分で生きていかなきゃいけない。そして人と関わるからには君にはいずれ別れが訪れる。モンスターとしての自分を受け入れた事でこれから自分の意思で人と対立する事もあるだろう。特別サービスで寿命を減らすか別れの悲しみを無くしてあげようか？」

結構です。これ以上ショッカーの如く改造されすぎても困る。ただでさえ魔改造なのに……

「魔改造？……ああ、あれか。魔改造というほどでもないだろう。」

元のスペックをただ強くして。そこに強い適応・強化性能を付け加えただけだからね。あの世界自体、オリジナルに色々手を加えて生み出した世界だからね」

……神クラスの方が言う色々は普通クラスの我々にとって大災害の気がするんだが。

「気にしない気にしない。君は今回なかなか頑張ったから少しボーナスでもあげるよ」

神の話は脈絡がめちゃくちゃだな。まあ貰えるものは貰っておこう。

神の手から光る球体が放たれ俺の口の中に入ってくる。む、ブドウ味だ。しかも巨峰じゃないか。美味しいくて懐かしいな。味に浸りつつ光りの飴玉をころころ口の中で転がす。

「他には……ああ、確かまだ君はあの沼地の最奥に踏み入れていなかった筈だよ」

おう！一回突っ込んだけどズタズタのボロボロにされたぜ！

「あの奥に毒を発生させる巨大な樹があるよ、別に破壊しなくてもいいけど放って置くと人類補完計画クラスの災厄を招くから注意してね。具体的には強くなった毒で全ての生物・植物が強力に成長そして耐え切れず破裂する。そして破裂した生物・植物の残骸は周囲の物を巻き込んで新たな生物になる。それリピート」

……なにそれ。超怖い。

「怖いから処分頑張つてね。君一人では無理だと思うから、困難に協力して立ち向かい成長し絆を深める。まあ絆に関しては充分だろうけど上げられるならことん上げた方がいいよね。では行つてらっしゃい」

ちょ！まっ。

神（改めて書くが見た目は白い羽の生えた〇ーモ君）の口から打ち出されたよくわからない無駄に神々しい金属でできたカジキマグロ

が俺の脳天に向けて飛んできた。

「安心しろ。目覚めたら疲れは取れてる。後、ボーナスは有効活用しろよ」

意識を失う前。おぼろげに聞こえた最後の言葉にそうじゃねーよと突っ込みたかった。てかなんでカジキマグロ。

ポスツと腹の上に何かが落ちてきた。その重みで目が覚めた。体を起こしてみると俺の白い腹の上にリルが頭を乗せていた。そのリルは珍しく驚いたような顔でこちらを見ている。どうした？

「おはよう、シロシロ？」

なんだ、その疑問口調は？どう見ても俺だろう。

「何処から見てもそう見えない。ボクの記憶とは一致しない」

リルはそう呟くと起き上がって俺を上から見下ろした。あれ？可笑しくないか？確かに寝転んでいる時はリルは俺を見下ろせたがその時こんなに大きく見えたか？

悩んでいる俺をそのままにして、リルは俺の頭、顔、胸、背中、腕、腹、脚を触りながら確認していく。

「……見た目は全然違う。でも中身は完璧にシロシロ。肉体も精神も」

……ちょっと。ちょーっと待ってくれないかリル。……俺に猶予をくれ。何事にも受け入れる側には心構えが必要だと思っただ。

「分かった」

毛皮の下にゴム質の皮を敷いて独特の弾力を持たせたマイベツトから起き上がり、リルと正面から向き合う。その状態での目線はリルの顎くらい、つまり寝て目が覚めたら……体が縮んでいた！？

……何処の高校生探偵だよ。

頭脳はフルフル、体もフルフル（魔改造）、魂は人間！その名は村の名物チビフル！開始二秒で警視庁に通報されて〇ぐれ警部に連行されそうだな。あの人は年下の美人な奥さん持ちの勝ち組なんだぜ。

「そういう事じゃない。……握手！」
はい！

珍しく感嘆符がついたリルの言葉に反射的に手を差し出してしまう。ここら辺は元のビビリ

な所が残っているなあ。NOと言える日本人になりたい。むしろ英語ペラペラになりたい。………ん？手？

今、リルの可愛い小さい手には更に小さな白い手が握られている。さて俺はさっき何をしたでしょう。A・リルと握手。ならリルの手に握られているあの手は誰の？A・たぶん俺。間違いなく俺。確実に俺。

……視線を下に向け、自分の体を見ると一度も光に触れたことが無いような白い柔らかそうな肌。赤ん坊の頃のポニヤつとした感じが少し残る手足。

……頭上にあるものを摘まんでみる。それは一本一本がとても細く、手を真つ直ぐに伸ばした位の長さ、白色で真珠のような艶やかさがある。まるで髪の毛のようだ。

「……リル。おれってどうなってる？」

「よう！、よ。ボクよりも小さなよう！、よ。綺麗な白い髪と紅玉の様な紅い瞳を持つよう！、よ。白い柔らかな肌を曝している全裸

のよう！、よ。可愛らしいよう！、よ」

「……………よう！、よよう！、よれんこしゆるにや！」

リルめ俺がよう！、よ扱いしたの意外と根に持っていやがったな。後、俺少し舌つ足らずになつとる。

「一歳の年の差でよう！、よ扱いされたら怒る。飛竜の五歳と人間の四歳だと明らかに飛竜の方が幼い」

「くつ、たしかに。しょう考えればこの姿で済んだのはまだ増しというわけか。リルより小しやいのは不満だが致し方無い。てか今更ながらなんで俺はこの姿に！？今はフルフルモードの方が都合がよいのに。」

「どつちも可愛いけど。その姿は初めてだからしばらく堪能したい」
「ちよつと待て。また少し考えしやしえてくれ」

まずは何故姿がこのタイミングで変わったかだ。確か前に人間を食べたら直ぐ人間になれると言われていたけど俺は人間を食べた覚えが無い。リルを見ても傷一つ付いてないから寝ぼけているうちにちよつと齧ったとかもないだろう。

なんで人型になっているんだ？……………む、そういえば神がボーナスと言ってくれたあのブドウ味の光る飴玉か？そういえば最後辺りボーナスを有効活用とか言っていた気がする。あの飴玉自体がボーナスだと思っていたがこういう事だったのか。

次に何でよう！、よなのか？だ。まず見た目の年齢はリルが言ったように俺は飛竜で五歳だからこんなものだろうと言うのは分かる。むしろここまで成長した見た目なのは神パワーが何か働いているんだろう。

んで性別が雌なのはなぜだ？フルフルの体だと性別が分からなかったが俺は元々雌だったということか？しかし勘だがそれは違つと俺の本能が告げている。本能曰く「半分当たり半分はずれ。詳しい話はリルに聞け」ならばリルに聞くしかあるまい。

「リル。フルフルの時の俺の性別しえいべちゆって分かる？」
「……………」

「またもや珍しいリルの心の底から呆れた表情をgetした。フッフ、今までだったらダメージを受けていたが。吹っ切れて、尚且つ、見た目が年下状態の今なら全然心に痛みがこないなあ。フハハハハ！」

「フルフルは雌雄同体、単独で卵を産んで殖える。いつかシロシロも卵を産むのかな」

「……………？…………ゴフツ」

「卵産むシーン想像したら今だ幼い心に深刻なダメージを受けた。リルめその為に一言付け加えたな。人間で例えるなら幼稚園児に両親のプレイ内容と出産シーンを臨場感たつぷりに伝えるが如き鬼畜の所業。」

「なかなかやるな。リル……。そしてありがとう。自家受精じかじゅしえいで卵を産むだけら棒の方はいらんわな。だからXYじゃなくてXXの方なのか。なつとくなつとく」

「それでこれからどうするの？その姿だと他の人にはシロシロだって分かって貰えないよ。「昨日頑張って戦ったから今日は一日寝て過ごしたい」って言うていたってお祖父ちゃん達に伝えようか？」

「そうだな。この姿はまだ上手く動かせないからそうした方が良いか。今日中に変化の仕方を見つけてしまえばいいか。この姿が見つかる。と今まで以上に厄介な事になる。後、純粋にこの姿になれることがばれるのが純粋に恥ずかしい。」

「よし、そうしてくれ。てか今何時頃？」

「日が昇ってから一時間は経った。ボク達は早く寝たけどお祖父ちゃん達は色々大変で遅くに寝た。夜の見張りは大剣さんがやってくれたから、お祖父ちゃん達は皆一緒の時間に寝てそろそろ起きそう」「そいじゃらば、先回りしてルアールさんに伝えてきてくれないか」「後、五分位でここを出ればちょうど良い。それまで撫でて良い？」「別に良いけど……。なんで？」

てか答える前に既に撫でてますがな。ようゝゝよが更に小さいようゝゝよ（全裸）を抱きしめて撫で回して可愛がっている光景とかマニア向けすぎる。ようゝゝよで纏めているけど、四歳と見た目三歳半位なんだぜ。これは相当レベルの高い変態じゃないと対応できないだろう。まあ普通だったら可愛いので済むんだらうけど、洞窟内の獣の皮で作ったベツトの上でと言う条件が付いているから見た感じ変態度が増している気がする。

「……いや、本当になんで？」

返事は無言の撫で回しだった。

……ん？……ちょ！？何処触って！？……くすぐりたい！……そこはヤメ……そこは冗談じゃ……あつ

十九話　まれによくある。　（後書き）

最後はくすぐったい所触られただけです。他意はありません。ちなみにリルちゃんは好奇心旺盛で可愛いものは好きです。ただし可愛い範囲に変なものも入っています。PS・タグにTS?を付けました。雌雄同体に転生だからTS?です。作者もややこしいと思っています。仕方ないね。

そして何より祝！人化！　見た目は白髪赤目の将来が期待される美少女。たぶんこれからの童生で野生的な雰囲気を獲得する。

二十話　コキヤツと

ナニカやり遂げて満足した顔のリルは俺の休みを連絡しようと、俺の寝室を出て行きルアルさんの所に行った。そして俺の身には何も無かった。ホントダヨ。ナニモサレテナイヨ。

ふむ、しかしこのよう……よぼでえはどうした物か……。まず動きが覚束ない。リルと話している時に口の動きがたどどしく舌足らずな口調に成っていたのは分かっていたが、どうも体全体の動きもぎこちないかんじがする。例えるならシャツ二枚にトレーナー二枚、更にフリースとコートを重ねたような動き辛さが全身にあるような感じだ。今までフルフルの体だったからこれは仕方ない事かもしれないが——いや、むしろこの場合は自分がココまで人間の体の動きを覚えていた事に驚くべき事なんだろう。

他にも体の動きを確認する時に発覚した事だが、筋力が当たり前のよう^にに落ちていて大きな石（推定二十キロ）を持ち上げるのがやっつとだ。それでも見た目の割にはかなり異常なんだが、グラビをぶん投げられる今までの筋力^{パワー}に慣れているとどうにも落ち着かない。

……その際に試しに壁を殴って思わず涙目になったのはリルにも秘密にしておこう。

だが改めてプニプニだ……。もっちり^とと吸い付く感じというか、さらさらつと滑るというか、なんか我が体ながら不思議な感じがするこのロリっ子ボディ。髪の毛もキューティクルたっぷりな感じでサラツヤな白髪だし。アジアンビューティーなCMにも出れそうな艶やかさ、これは自慢できる。

しばらく体をグリグリと動かしてみるか。イメージは体を馴染ませ

る、体中の細胞を一通り動かす感じで。

ではでは……コホン

「ラジオ体操たいしょうだい！ うでを前から上に上げて大きく背伸びのうんどー！ イチ ニイ シャン シ ゴオ ロク手足のうんどー！ ……

……（約三分経過）…… ロク しんきゅー！ 大きくいきをすつてー。はいてー。ゴオ ロク シチ ハチ イチ ニ

イ シャン シ ゴオ ロク シチ ハチ……」

……ふうー。ラジオ体操って手先足先まで注意してやると結構良い運動になる。夏休みのラジオ体操カードは良い思い出。ハンコが一度途切れたら行きたくなかったのも今となつては良い思い出だ。にしてもこの体は間接的な意味でも柔らかいな、手の平がペツタリ地面に付く所ではなく頭が脚の間を通れ……。れ？

「つまよあ！？」

「どうした？」

「どうした？ じゃないよ！？ いつから見ちえいた？」

「見ていたのは『大きくせのびのうんどー！』の『びの』から、聞こえたのは『ラジオ体操たいしょうから』」

「あにやあああ！？」

「どうした？」

なんか恥ずかしいなんか恥ずかしいなんか恥ずかしい……とてつもなく恥ずかしい！！途中、久し振りのラジオ体操にテンション上がって笑顔でグルングルン体回していたの見たのか俺！？ラジオ体操知らん人に見られたのか俺！？……によおおおお！！？

全身を引っかきたくなるような痒さに襲われ体を縮めて自作ベツトの上でゴロンゴロンしていると、リルが見かねたのか話しかけてきた。

「それでどうだったの？ 体の調子は？」

俺はリルの質問により一先ず落ち着いた。てか落ち着かないとリルにナニカサレソウだった。自らの羞恥心に突き動かされて潜りこんだ、ケルビの毛皮の中からとりあえず顔だけをだしてその質問に答えた。

「うーん。体のちょーしは悪くない。でもフルフルの体のときより、性能は落ちている」

「そう。フルフルの体に戻れるか試した？」

「それは一通り、このからだで出来りゆことを探してから。最後にためしゆ。……もどれなかったら助けちえね」

「……………分かった」

「なんだ今の間は」

間が在ったけど最後に「分かった」って言うてるから助けてくれるよね？きつと助けてくれるよね？何時も即答するリルに間があると不安になるんだけど……。

ほいじやらば、話している内に羞恥心も治まってきたし。

「……よし！性能じっけんパート2でも始めるか！」

「頑張れ」

「頑張る！」

性能実験パート2は人間の体として性能を試していた先程までの行動と違い。フルフルの体で出来た事が人間の体でもできるかを試すものだ。さっきまでののが能力値調査だとしたら、今からやるのは特殊能力&技が使えるかの調査だ。てな訳でまずはフルフルの十八番の能力。

「でんげきい！」

ビリッと手の平から電気が出てくる。ふん、静電気クラスかゴミめ。……今のは本気じゃなかった。本気出したらリルが危ないからね。手加減しただけだ。だからリル微笑ましい物を見る目で見てないでちよつと離れて。

……では改めて。

「はあああああつ、ら、い、げ、きいいい！！！！！！！！」

バリバリツと口から電撃ブレスをだす。……ランゴスタ、カンタロスが死ぬ位……かな？一応全力全開、フルフルの時ならドスイーオスを蒸発させるほどには気合込めたんだけどな……。……はあ。鬱だ。一番効率がいい、口からの電撃ブレスでこれか……。今まで封印してきたのを解除したのにこれか……。一番良く使う尻尾の口からのブレスはたぶんこの体だと出来ないだろうし、出来たとしてもしたくない。認めようコレが今の俺の全力の電気攻撃だ。

「どんまい」

「なぐしゃめはいらない。悲しくなる」

「知ってる」

「お前は鬼か!？」

……電撃の威力低下にショックを受けたまま、続きをやって行く。

体液関係。まず唾液。粘度、酸度などの変更可能かどうかチェック。通常。酸多目。粘度高め。粘度低め。それぞれの唾液になるよう意識して古いケルビの皮に垂らす。

通常はまんま人間の唾液と同じだった。（提供リル）

「……ちよつとだけ変わったかな？変わっているよね？」

酸多目に意識したのは微妙に溶けている。硬い物を食べる時に重宝するかな？

粘度高めは前のが超強力粘着テープだとしたら、何回も付け剥がしたシール位。普通の唾液よりちよつと伸びる感じだ。

粘度低めはさらさら。コレだけはフルフル時と変わらない。一番使えないのが変わらないとかないわー。

次に血。神曰くの適応能力でフルフル時にはアクラ・ジエビアの体液に変えられたのでテストしてみる。唾液と同じく、通常。ジエビアの体液イメージ。アルビノエキスイメージ。の三種用意。比較の血はまたもや提供リルでお送りしています。採血の方法は親指の腹をカプツとした。

「……ファントジーだ」

通常の血はリルと変わらず。ジエビアイメージの時は垂らした青っぽい血がたちまち結晶化した。アルビノエキスイメージは……その……なんだ……見た目は通常とそこまで変わらないんだが、赤マムシドリンク的な雰囲気漂っている。……なぜに。

……次だな。次はアレだな。首伸ばし！これで伝説の三忍の変態担当の真似ができる！

フルフルの時の首を伸ばすイメージを思い出して……てりゃ！ゴキッと首の骨がイカレる音。

「——ッアア！?!?!?」

その直ぐ後から来た鈍くて鋭い痛みに口から声にならない声が出た。

二十話〱コキャツと〱（後書き）

キリがいいところで終わらせたので短いです。最期のシーンでは一応、首は伸びました。一瞬だけ。2cm位。

そんなシロシロの奇行をリルは見てるだけー。ツッコミ不在のこの状況。如何するべきか……

雷纏う竜外伝。 fate / zero 〽流行に乗って書いた、反省はしている。だ

途中から三人称に変更してます。その為、分かり辛くなっています。

雷纏う竜外伝。 fate / zero 流行に乗って書いた、反省はしている。だ

ふと気付くと俺は見知らぬ所に立っていた。

空を見上げれば深い闇にキラキラと光る星々、灰色の千切れ雲がかかる黄色の月。夜である。

だが少しおかしい、星の並びが違う。季節により夜空の星の位置は変わり行く物だが、この空は昨日までと根本的に違う気がする。その上、星の輝きが弱い。弱すぎる。空一面に輝いていた星々の輝きが損なわれている。

辺りを見回す。どうやら俺は周囲を小さな木々に囲まれた緩やかな傾斜のある場所に立っているようだ。それにしてもこの木どこかで見た気がする。一体何処で見た物か……とても懐かしい感じがする。胸を打たれ、訳も分からず涙しそうなこの懐かしさはなんだろう。

いや、木だけじゃない。この空気の匂い、土の感触、今まで感じた事がない筈の雰囲気なのにそれら全てが懐かしい。懐かしすぎる。……なんだ此処は？なんなんだ此処は？どうなっているんだ？

混乱の最中、視界に入った一つの星が目に残る。その星は動いていた。違う、アレは星じゃない。星はあんなに速く動かない。ソレが何なのか確かめる為、目を凝らし遠くにあるソレを見る。ソレの姿を捕らえた時、衝撃が走った。アリエナイ。

……何故だ！？何故アレがある！可笑しいだろ！あんな物はまだ造られていない筈。空はまだ、あの広い空は俺達の場所だ！！

……いや待てよ。その前俺は何で混乱していた？……………まさか！？近くの木に登り、その頂上から眼下の景色を視界に収める。

そこに在るのは、其処に在ったのは、夜に在って空の星を汚す地上の光。天に向かって聳え立つ高大な建造物。その子供のように周囲に群がる多数の雑多な建物。その間を縫うように敷かれた白い線の走る黒の道。

そこには俺にとっては見慣れないモノ。そして俺にとっては見慣れた街並み。

ビルや住宅街などが建ち並ぶ、前世の俺の言葉を借りれば有り触れた市街地が其処には在った。呆然とする俺の上、赤い光を灯しながら飛行機が夜空を飛んでいた。

…… 落ち着つこう。落ち着いて。落ち着け俺。落ち着くんだ俺。

…… よし！落ち着いた。

まず状況確認だ俺。ココは異世界かそれともコールドスリープで行き着いた数千年後の未来か、はたまた夢オチか？いや、夢オチは無いな。

とにかく周囲の全てを感じろ、その情報を知覚しろ、そして知識と比較するんだ俺。頑張れ俺…… たぶん異世界かな？俺の住んでいた世界に在ってこの世界に無い物や、この世界に在って俺の世界に無い物が多すぎる。それに法則も幾らか違う気がする。

さて次は何故こうなったかだ。こういう意味不明なことがあった時は落ち着いて神に祈るんだ。さあ、どうかこの迷える子羊を救い給え！この神が！何故こんな事をしたんだ！

「神には敬意を払えよ」

その言葉と共に俺の頭にナニカから猛烈な勢いで知識が逆流してきた……

……なるほど分かった。プランD。所謂、聖杯戦争^{セインギ}ですね。……
お家帰ってもいいですか。

てか聖杯戦争って事は、つまりココ冬木市か！？前世の記憶によると士郎君が鈍感系主人公で剣であり鞘。尚且つお手伝いロボット。ドッペル現象で自殺でムキムキの人に石の剣で真つ二つ。ルートはロリ妹ヤンデレ属性持ち義理姉、くすくすわらってごーごー幼馴染、絶対領域持ちアカイアクマ、ハラペコ騎士王と訳分らない事になっているんだけど。

なんだコレ？つまりアレか士郎君は貫きつつ貫かれるのか？どのルートに行っても貫かれちゃうのか？

ぬう、記憶が所々抜けているともどかしいな。面白いつて記憶はあるが今のままでは力オスだな。これは確かめるしかあるまい。それにどうやら強制参加みたいだ。聖杯から知識が流れ込むと同時に俺の頭に浮かんだ物が俺の聖杯戦争への参加の決定を告げていた。

【クラス】：ワイバーン

【真名】：シロシロ・リフル・シウテクトリ

【性別】：雌雄同体

【種族】：竜盤目竜脚亜目奇怪竜下目稀白竜上科フルフル科チビフル

【体長・体重】：100〜8000cm・60〜80000kg

【属性】：中立・善

筋力 A++ 魔力 EX

敏捷 A+ 幸運 C+++

耐久 A++ 宝具 |

【クラス別能力】

騎竜：B

騎手を背に乗せての自由な行動が可能。その際騎手には加護が生じる。

対魔力：A

Aランク以下の魔力はすべてキャンセル事実上現代の魔術師ではワイバーンに傷をつけることはできない

【保有スキル】

再生：EX

死なない。致命傷ほど再生は速くなる。翼が切り落とされても直ぐに生えてくる。

捕食吸収：A

喰らった物を吸収し、その能力を獲得する事のできる能力。Aランクは相性が良くなければ能力の獲得は困難になる。

神の愛し子：EX

ある神の優しさを受ける存在。その身に加護がある時、幸運値が大幅に上昇する。

単独行動：EX

完全に受肉している。マスターがいなくても永久的に自由に行動できる。

人化：A

人としての形を獲得した物のスキル。Aランクであれば能力値に変化は起きない。

放電：A+

体内の器官から自由に電気を発生させる事ができる。細かい操作も

可能。

体液生成：B（EX）

体液の生成とその性質をある程度変えることができる。時に物理・魔術法則に問われないミラクルな体液を出すことある。

身体変化・操作：B

体の一部を変化させ自由に操る事ができる。ただし変化できるものは条件を満たしたものにのみ限られる。

気配隠蔽：B

気配を隠す。自らの存在を周囲から隠す事ができる。

放熱……………以下略

これが俺のステータス——突っ込みどころがありすぎる……………あ
りすぎて何処から突っ込めばいいのか分からない位に……………。総括的
に言えば能力値は異常に高いけど宝具が無いのが悲しいな。その代
わりスキルがやたら豊富なのが救いか……………。

スキルはまだ沢山あるみたいだけどこれ以上は確認しなくても分
かる。恐らく俺が今まで生きてきた中で獲得した能力がスキルとし
て登録されているのだろう。……………こうして見てみるとまるで資格み
たいだな。放電検定A＋級取得！再生検定EX級取得！みたいな感
じがする。

さて、この聖杯戦争をどう過ごせばいいのか俺には分からないが、
とりあえず山を降りてハンバーガーでも食べに行こう。折角来たん
だから久し振りにジャンクフードや日本食でも食べたいな。

山を降りた俺を待っていたのは金が無いので食料が得られないと
いう悲劇。そしてこの聖杯戦争が士郎君が出る第五次ではなくその

十年前の第四次の聖杯戦争であるという事実であった。

……かなりうる覚えになるが、確か第四次の聖杯戦争の始まりはコンテナが置いてあり、ある程度開けていて、デリッククレーン等がある港だった筈。アルバイトとして雇ってもらい食糧確保に成功した俺はその条件に合致する場所を探し出しそこに潜んだ。

……あれから二週間たった今日、ようやく聖杯戦争が始まるようだ。俺の視界では絶世の美男子が一人佇んでいる。特徴的な衣服、そしてイケメン。かなりのイケメン。とてつもないイケメン。大事な事なので三度も繰り返し返した。間違いなくサーヴァントだ。数十分前に現れた彼はここで他のサーヴァントを待っている様だ。

しかしこっさり覗き見ている此方には気付いている様子は無い、流石の英霊といえどジャパニーズニンジャスタイルの精神を忘れずに長年生きてきた俺の隠れ蓑の術は見破れまい。

後ランサーと共に現れた人間が周囲で何かゴソゴソしている。これはマスターかな？動いたらイケメンにバレるので匂い感知しかできないが、なんだかエリート臭とかませ犬の匂いがする。

そうして彷徨うイケメンを眺める事数分間、皆のヒロインセイバーさんが現れた。凛々しいセイバーさんには黒のスーツが似合っている。そしてその後ろに俺とカラーリングが割と似ている女の人がいるんだが一体誰だ？銀髪に紅い目のほんわか系美人。マフモフクラスにモフモフしている高級そうな服を装備している

……ん？人？……なんかもやっとする。見た目だけ人間になっている訳ではなく、中身も外見も人なんだけど何かが違う。……まあ普通の人間じゃないって事は分かる。ならあの人がセイバーのマスター

「か？でも記憶だとセイバーのマスターはくたびれた雰囲気の男の筈。」

「その清開な闘気、セイバーとお見受けしたが、如何に」

「如何にも。そう言うお前はランサーに相違ないな」

「——フツ、これより死合おうという相手と尋常に名乗りを交わすことも俟ならぬとは。興の乗らぬ縛りがあつたものだ」

お、セイバーが鎧を装備した。戦闘形態か……これはいよいよ始まるのかな？さてイケメンVSセイバー、英霊同士の戦いをじっくり見させてもらおうかな。

チャーム
「魅了の魔術」

「悪いが、持つて生まれた呪いの様な物だな。こればかりは如何ともし難い。俺の出生か、もしくは女に生まれた自分を恨んでくれ」

と思つたら、またランサーとセイバーが話を始めた。……ここで更に焦らすとはなかなか良く分かつているじゃないか。と流石サーヴァントだと褒めてやりたい所だ。——と思つていいのか？

……本当に早く始めてくれよ。二週間も待機してこっちはランサー以上に待ちくたびれてん「セイバー、この私に勝利を」「はい、必ずや！」って！？考えている内に始まつた！

サーヴァント————本来は召使という意味を持つ言葉だが、この聖杯戦争に於いてサーヴァントと呼ばれるモノの正体は座という場所から呼ばれた真正の英霊達である。そのサーヴァントであるランサーとセイバーの戦闘。死して英霊と世界に認められた者達の戦いは正しく人の域を超えていた。

長槍と短槍、その二本の槍での突きと薙ぎを巧みに織り交ぜた変幻自在の攻撃を見せているランサー。それを文字通りの見えない剣で弾き返し、隙あらば切り伏せようとするセイバー。

そのセイバーとランサー、二騎のサーヴァントの戦いを潜んで見ているシロシロは思う。対人戦闘って難しいな。彼女？が見てきた戦いは主にモンスターとハンターの戦いであり、人間対人間の戦いなんて物は見たことが無かった。正確に言えば人間の強者と強者の命を賭けた本気の戦いなんて物は見たことが無かった、だ。

その原因はモンスター達だ。あの世界でも戦争はある。しかし、あの世界の人間の脅威は敵対する人間だけではない、生半可な国なら滅ぼせるほどのモンスターが居るのだ。それが人と人との争いの抑止力となっている。更にあの世界では強い人間は殆どモンスターハンターになる。その中でハンターは成長していくのだが上位のモンスターハンター程、協調性やチームワークなど他者との関係を重視する。

何故か？それは仲間との信頼関係が狩場で生き残るために必要な物だからだ。その為に真の強者同士の命を賭けた闘いは滅多に起きないのだ。起きてても精々どちらが狩場で活躍できるかを競う位だろう。

……上位のハンターに厄介な人物が少ないのは、あの世界で数少ない対人戦闘技術を持つギルドナイツと呼ばれる存在が暗躍しているのもある。

長年生きて凡人の集団同士の戦争なら目にした事はあるが、ギルドナイツの暗殺シーンなぞ見かけた事がない彼女？にとってこの戦闘は未知の戦い、それ故今だ知らぬ情報を掴み取れる貴重な物だ。

しかし、彼女？が一番驚いている所はこの戦闘を眺めている他の者たちとずれていた。

（どちらも武器が小さいな。セイバーのは良く見えないけど片手剣よりちよつと長い位かな？ランサーの槍は二本使うからあんなに短いのかな？それにしても細いな。）

シロシロにとって武器とは大剣、ランスは身の丈を越える物が当たり前、いざと言う時の為に殆どの武器はやるうと思えば防御できるような頑丈さが必要なのだ。この場合の防御は飛竜の突進に対する物だ。更に彼女？普通サイズのイャンクックを尻尾から頭まで貫けるようなランスを見たことがあるため、ランサーの槍に不信感を抱いていた。自分が使う訳でもないのに。むろん宝具であるランサーの槍は彼女？が思うほど脆い訳が無いのだが、その事を失念している。

シロシロがその様なセイバー達の武器について考えつつ、サーヴァント同士の戦闘を隠れながら眺めていると、セイバーとランサーの戦いは一時膠着状態に陥ったようだ。セイバー、ランサー共に武器を構えているがどちらも間合いに踏みこまずに睨み合っている。

「名乗りもないままの戦いに荣誉も糞もあるまいが…」

訂正、またランサー達は話し始めたようだ。

シロシロにとってはこれまた初めての事だ。人間同士で殺し合う場合大抵無言か「殺す殺す殺す殺す」と呟き続けるか、獣の如き雄叫びを上げるのどれかだったからだ。戦っている最中の相手と冷静に会話しているのは彼女？にとって驚愕の一言に尽きる。

「ともかく賞賛を受け取れ。ここにいたって汗一つかかんとは、女

だてらに見上げた奴だ」

「無用な謙遜だぞ、ランサー。貴殿の名を知らぬとはいえ、その槍捌きをもってその賛辞……私には誉だ。ありがたく頂戴しよう」

やはり、騎士として強き相手と武技を競えるのは喜ばしいのか、喜悦の表情を浮かべながら互いを賞賛し合っている二人。その所はシロシロも長年生きていて分かる。が本気の戦いで賞賛し合うのは納得できない。命の取り合いはその戦意を怒りを憎しみを猛りをぶつけるものだったから。

「戯れ合いは其処までだ。ランサー」

何か第三者の声が聞こえたがシロシロは考えに没頭する。その際も視線はランサーとセイバーから離さない。何故、彼らは賞賛し合うのか？ランサーは短槍を捨て、構えた長槍から呪符が剥れ紅い槍が姿を表す。互いに騎士としての誇りを持ち武技を競う事が楽しいから。長槍を構えたランサーがセイバーに神速の突きを放つ。

それは分かるが何故闘いの最中に？紅い魔槍がセイバーの不可視の剣に触れると剣を纏っていた風が剥がれその姿が露になる。相手が生きているうちに賞賛を伝えたいから。

……………根幹から異なる者との理解は難しい。シロシロがそう結論付けた時、目の前に紅い魔槍が迫ってきていた。

セイバーを捕らえ損ねたランサーの紅い魔槍がコンテナを抉った途端、コンテナの内部から甲高い怪物の絶叫が広がった。その叫びは人間の恐怖を呼び起こす物。サーヴァントであるランサー、セイバーですら気を抜けば耳を塞ぎそうな叫びの音だ。明らかな異変にセイバーはアイリスフィールの傍まで下がり、ランサーは叫びの中心に向けて魔槍を構えた。

「セイバー、戦いは一時中断のようだな」
「そのようですね。ランサー」

叫びが止んだ途端、電撃の奔流がコンテナを紙屑の様に吹き飛ばした。

ボロボロのコンテナの中から現れたのは紅い髪と目を持ち、血のように赤いボディースーツに身を包んだ長身の女。ボディースーツに押し込められた肉体は逆にその豊かな胸を強調させ、更に引き締まった手足の美しさ引き立たせ、その陶器の様に滑らかな白い肌は全身を彩る赤色と対比して妖艶な雰囲気を漂わせている。しかしその女の発する野生的、活動的とでも表せる雰囲気がその全てを飲み込んでいた。

そんな赤く紅い女は頭から噴水の様に吹き出す血で更に赤く赤く染まっていた。

赤い女は今だ頭から血を吹き出したまま、イイ笑顔をランサーに向けると。

「……人の顔に傷付けるとは、御礼にその黒子を引き千切ってやろうかランサー？」

……酷い言い掛かりだ！この戦闘を見ていた者達の意見が完璧に一致した奇跡の瞬間だった。

雷纏う竜外伝。 f a t e / z e r o 流行に乗って書いた、反省はしている。だ

ここで力尽きた！この後はランサーに刺されたり、セイバーに斬られたり、ライダーに轢かれたり、アーチャーに針山にされたりする。

設定的には遠い未来の平行世界だよ！赤い女の正体はシロシロだよ！シロシロの隠し設定で怒り時には赤色に変色するんだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5443w/>

雷纏う竜（MH転生）

2011年11月29日17時57分発行